

# 研究報告

## I 今年度の国語科の教科経営

## 1. 本校の生徒の実態

進学や学習に対する意識が高い生徒が多いため、学習量に比例して学力の伸びが実感できる教科や、一つの答えが明確に導ける教科に対して肯定的な感情を抱きやすく、国語に対しては「勉強しても伸びが感じられにくい」「答えがはっきりしない」など、やや否定的な感情をもつ傾向がある。その反面、新しい解釈に気付いたときの感動や、自分の思いを的確に表現したいという思いなどは強く感じられ、潜在的な言葉への関心は高いことがうかがえる。根拠をもって読み取る意識は高まっており、積極的に辞書を活用する習慣が身に付いてきている。

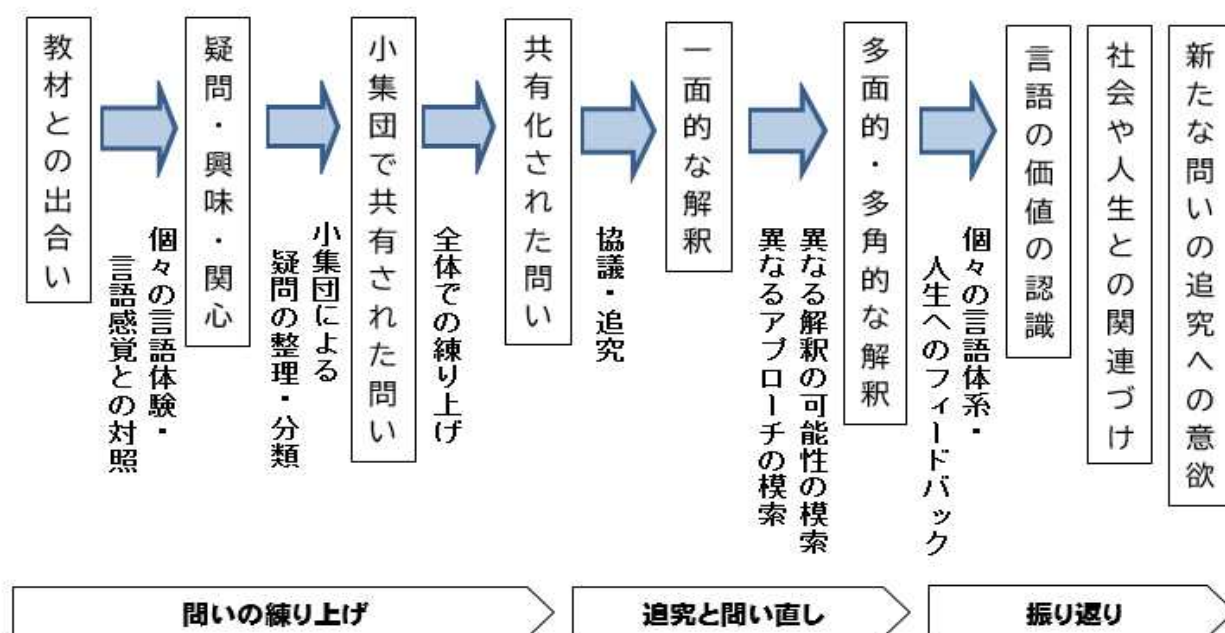
## 2. テーマ・サブテーマと教科の特質

言葉がもつ価値を認識し新たな発想や思考を生み出す —「対立」を生むことにより全員が参加する学び合いの実現を通して—	
特質	言葉による見方・考え方を働かせて考えること。具体的には、自分の思いや考えを深めるために、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。

## 3. 具体的な実践事項

- (1) ICTの三つの特質
  - ・瞬時の共有化を目的に、コラボノート等のツールを活用して個々の思考を比較できる形で提示することで、追究課題に対する互いの意見の違いを認識して対立点を明確にできるようにする。
- (2) 対話の三つの方向性
  - ・可視化され共有された個々の思考の違いを焦点化していくために、生徒が互いの意見を比較したり関連付けたりする過程を重視する。具体的には、その段階において全ての生徒が自分の思考を外言化し、他者と対話する機会をもてるようにすることで、集団での深い省察を促す。
- (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開
  - ・全ての生徒が学び合いに参加できるように、適切な難易度の課題設定を研究するとともに、生徒の気付きや発表に応じて、多様な学び合いの形態の工夫を柔軟に行っていく。
- (4) 日々の授業改善
  - ・教科部内で情報交換をこまめに行い、授業展開のアイディアや発問の工夫を共有して教科部全体で授業力の向上を図る。

## 4. 学びのプロセス



## 5. 国語科で目指す子どもの姿

言葉の意味や使い方、関係に着目して文章の意味を読み取って思考し、新たな価値を生み出している姿。また、文章から得た価値や考え方、言語の知識や感覚を自分の人生や生活に生かして豊かに生きようとする姿。

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問	見通しを立てる	<p>学ぶことへの興味・関心が高まっているか</p> <p>自分自身の経験と向き合っているか</p> <p>課題解決の見通しをもっているか</p>	<p>子どもの実態に応じた適度な難易度の課題を設定する</p> <p>自らの問題として考えることができるように、実生活と結び付けた課題の提示を工夫する</p> <p>本時の学習に関連する既得の見方・考え方や知識を確認する</p>
問い直し	自分で考える 他者と学び合う	<p>学習活動を自分事として捉えているか</p> <p>追究課題に対する互いの意見の違いを意識化できているか</p> <p>互いの意見や思いの違いを焦点化しているか</p>	<p>既得の見方・考え方をを用いて自分の考えをまとめる時間を設定する</p> <p>I C T等を活用して全員の意見を可視化して提示する</p> <p>全ての生徒が自分の思考を外言化することで、生徒が互いの意見を比較したり関連付けたりできるようにする</p>
振り返り	まとめる	<p>本時の学習に関連する見方・考え方が身に付いているか</p> <p>学習活動の意義を感じているか</p>	<p>見方・考え方を提示してまとめる学習活動を設定する</p> <p>言葉の価値を感じられたか、自己・他者理解を深められたかについて、自己評価をする場面を設ける</p>

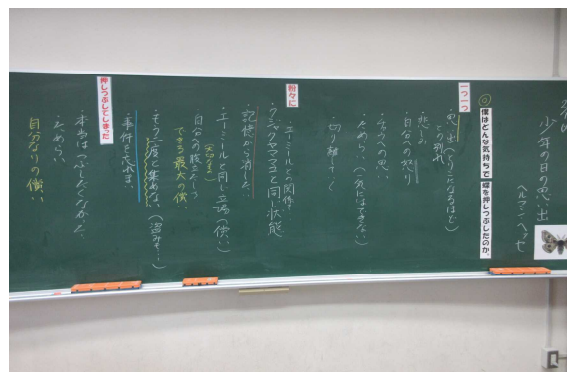
## II 具体的な実践事項について

### ○1年生の実践について

#### (1) 「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化

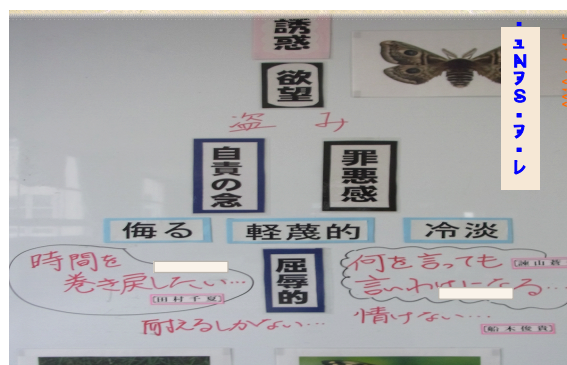
1年生の学習では、問い直しの場面での話し合い活動の充実を目指して実践を重ねてきた。

小説文「少年の日の思い出」では、「なぜ少年は蝶を押しつぶしたのか」という問いの後で「どんな気持ちで一つ一つ、粉々に押しつぶしてしまったのか」という問い直しをした。一語一語に着目して話し合うことで、問いの場面では気付かなかった心の深層部分について、考えを深めることができた。



#### (2) ICTの三つの特質・対話の三つの方向性

モニターを活用することで、生徒が知識を整理しやすくできるように心掛けた。既習内容を瞬時に確認できることや、画像を見ることによる気付きなど、視覚的な情報による効果の大きさを実感した。「誘惑」「欲望」「罪悪感」などの語句カードが、半年前に学習した教材でも使われていたことに気付き、同じ言葉なのに登場人物の感じ方は全く異なることに驚くなど、発見につながる手立てとして有効であった。



### ○2年生の実践について

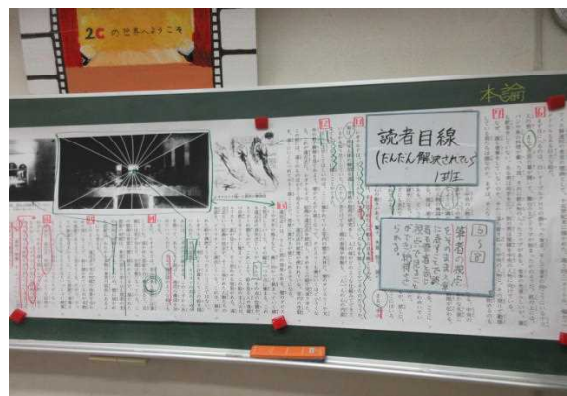
#### (1) ICTの三つの特質・対話の三つの方向性

2年生の学習では、自分の考えのまとめにコラボノートを使い、クラスで共有することを重ねてきた。さらに、コラボノートに記載したことをもとにしてクラスで話し合いをするときは、教師側から考えを類型化し、枠をその類型で色分けすることを指示して、同じ考え同士、または違う考えをもっている同士で話し合うことがコラボノートの活用によって簡単にできるようになった。

<p><b>仁和寺にある法師</b></p> <p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>	<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>	<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>	<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>
<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>	<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>	<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>	<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>
<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>	<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>	<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>	<p>法師の先達の理由は？</p> <p>どうすれば高僧になったか？</p>

#### (2) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

生徒の気付きを生かした授業展開を目指して実践してきた。「君は『最後の晩餐』を知っているか」の学習では、筆者が読者を納得させる工夫について考えた。その際、あるグループからは、「読者目線の書き方をしている」、他方のグループからは「筆者の視点を追うように書かれている」と一見違う意見が発表された。そのことについて、「どちらなのか」「なぜそのように書かれているのか」と問い直すことで、筆者の工夫について考えを深めることができた。





## ○ 3 年生の実践について

- ・対話の三つの方向性
- ・瞬時の判断と柔軟な授業展開

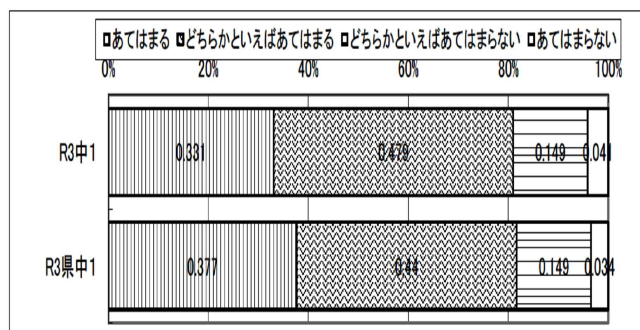
対話の目的を明確に意識することを心掛けて活動を行った。たとえば、自分の考えを説明すること（認知過程の外化）を目的とした対話をグループを定めず自由に立ち歩いて行った後で、課題に迫っていくこと（集団での省察）を目的としたクラス全体でのディスカッションを行う、などの展開である。対話の目的を明確化することにより、これまでのミエルトーク（役割分担した小グループでの話し合い）の形態にとらわれない対話の可能性が広がり、これまでよりも多くの生徒が1時間の授業の中で何らかの対話に参加することができるようになった。その結果、自分の考えをしっかりとった上で他者の考えと比較して共通点や相違点を焦点化し、より思考を深めることにもつながった。このことは、多様な学び合いの形態の工夫による柔軟な授業展開とも関連して、授業が活性化している手応えを得られた。

適切な難易度の課題設定や補助発問といった瞬時の判断による学び合いの支援については公開研究会の授業でもご助言をいただき、課題が多く見つかった。生徒の実態に応じた学習課題の設定や発問のあり方について、科内で授業を見合う機会を増やすなどして研究を深めていきたい。



## III 生徒の変容について

## ○ 1 年生 「国語の勉強は好きだ」



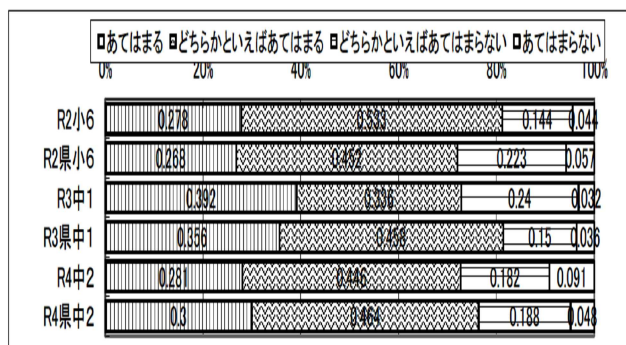
国語が大好き・好きの理由								(右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)			
学年	①内容に興味がある	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とのかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意				小計
R3 小6											
R4 中1	19 % ▲	12.4 % ▲	4.6 %	10.7 % ▲	3.4 %	8.3 %	0.9 %		19 %	6.3 %	78.5 %
R5 中2											
R6 中3											

国語が嫌い・大嫌いの理由								(右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)			
学年	①内容に興味がない	②わかりにくい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とのかわりの中で役立つ	⑥考えるのがめんどろ	⑦不得意				小計
R3 小6											
R4 中1	5.8 % ▲	1.7 % ▲	0 %	0.1 %	0 %	3.3 % ▲	1.1 %		5.8 %	2.8 %	16.6 %
R5 中2											
R6 中3											

※⑤その他5%を除く

## ○ 2 年生 「国語の勉強は好きだ」



国語が大好き・好きの理由								(右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)			
学年	①内容に興味がある	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とのかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意				小計
R2 小6	20 %	2.9 %	5.6 % ▲	4.8 %	14.4 % ▲	2.4 %	15.6 %	6.4 %	18.9 %	8.9 %	77.8 %
R3 中1	23.2 %	3.4 %	8 % ▲	9.9 %	11.2 % ▲	3.3 %	11.2 %	3.7 %	8.8 % ▲	2.8 %	67.2 %
R4 中2	26.4 %	3.6 %	9.1 % ▲	6.1 %	9.1 % ▲	5.9 %	5.8 % ▲	1.1 %	10.7 %	1.0 %	67.7 %
R5 中3											

国語が嫌い・大嫌いの理由								(右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)			
学年	①内容に興味がない	②わかりにくい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とのかわりの中で役立つ	⑥考えるのがめんどろ	⑦不得意				小計
R2 小6	4.4 %	1.7 %	0 %	3.4 %	1.1 % ▲	1.0 %	0 %	0.1 %	1.1 %	1.8 %	15.5 %
R3 中1	5.6 % ▲	0.7 %	1.6 %	0.4 %	0 %	0.2 %	0 %	0.1 %	3.2 % ▲	1.9 %	25.6 %
R4 中2	7.4 % ▲	0.2 %	0 %	3.2 %	0 %	0.2 %	0 %	0.2 %	1.7 %	0.9 %	26.5 %
R5 中3											

※⑤その他0%を除く

県の学習状況調査の結果、昨年度の調査では1年生・2年生とも全県の数値を大きく上回っていた「国語が大好き」の割合が、今年度は全県平均を下回った。進路意識が強く学習意欲の高い生徒が多い本校においては、学年が上がるにつれて「成績が上がりづらい」「勉強方法が分からない」と感じ

られることの多い国語に苦手意識をもつ生徒が増えるのは例年の傾向である。一方で、本校生徒の高い読解力・表現力や鋭い言語感覚は、学習状況調査の通過率だけでなく日々の授業や作文コンクール等の受賞実績などからも明らかである。このような生徒たちに「国語が大好き」と感じて学んでもらうために、「言葉で考える・価値を生み出す」ことの楽しさと大切さを伝える授業の工夫を、科全体で行っていく必要がある。

#### IV 来年度の国語科の教科経営

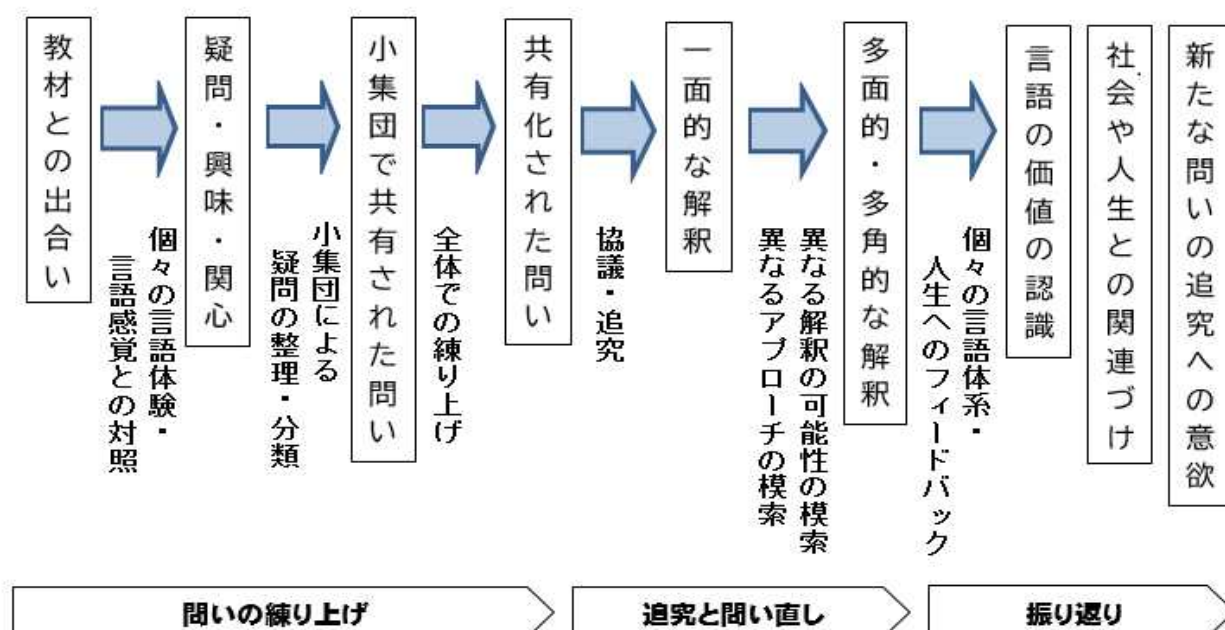
##### 1. テーマ・サブテーマと教科の特質

言葉がもつ価値を認識し新たな発想や思考を生み出す —共に言葉のおもしろさを発見する授業実践を通して—	
特質	言葉による見方・考え方を働かせて考えること。具体的には、自分の思いや考えを深めるために、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。

##### 2. 具体的な実践事項

- (1) 考える価値のある課題設定による「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化  
適切な難易度で、かつ生徒が考えてみたいと思える魅力的な課題設定に取り組む。そのために週1回の国語科部会の充実を図り、学年を超えて教材の指導計画・発問計画等を共有し、意見交換を行う。また、プロセスカードを全員共通で使用し、生徒が学びのプロセスを視覚的に捉えやすい板書づくりを目指す。
- (2) ICTの効果的な活用と対話の三つの方向性の明確化による全員参加の学び合い  
集団での省察を目的とした対話だけでなく、支え合いを目的とした対話や認知過程の外化を目的とした対話を意識的に取り入れることで、多様な学び合いを教室に創り出す。また、引き続きコラボノート等のツールの効果的な活用方法を模索していく。これらにより、生徒全員が自分の意見をもって学び合いに参加できるようにし、生徒の学習への満足感・納得感を高められるようにする。
- (3) 言葉の価値に気付く深い学びを目指した瞬時の判断と柔軟な展開  
対話の三つの方向性とも関連して、従来のミエルトーク以外にもさまざまな話合いの形を柔軟に取り入れた授業展開に取り組む。ホワイトボードを使用した話合いにおいても、より効果的で国語の課題追究に適した「国語型ミエルトーク」の形を探っていく。

##### 3. 学びのプロセス



## 5. 国語科で目指す子どもの姿

言葉の意味や使い方、関係に着目して文章の意味を読み取って思考し、新たな価値を生み出している姿。また、文章から得た価値や考え方、言語の知識や感覚を自分の人生や生活に生かして豊かに生きようとする姿。

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	学ぶことへの興味・関心が高まっているか	子どもの実態に応じた適度な難易度の課題を設定する
		自分自身の経験と向き合っているか	自らの問題として考えることができるように、実生活と結び付けた課題の提示を工夫する
		課題解決の見通しをもっているか	本時の学習に関連する既得の見方・考え方や知識を確認する
問 い 直 し	自 分 で 考 え る  他 者 と 学 び 合 う	学習活動を自分事として捉えているか	既得の見方・考え方をを用いて自分の考えをまとめる時間を設定する
		追究課題に対する互いの意見の違いを意識化できているか	I C T等を活用して全員の意見を可視化して提示する
		互いの意見や思いの違いを焦点化しているか	全ての生徒が自分の思考を外言化することで、生徒が互いの意見を比較したり関連付けたりできるようにする
振 り 返 り	ま と め る	本時の学習に関連する見方・考え方が身に付いているか	見方・考え方を提示してまとめる学習活動を設定する
		学習活動の意義を感じているか	言葉の価値を感じられたか、自己・他者理解を深められたかについて、自己評価をする場面を設ける

## I 今年度の社会科の教科経営

## 1. 本校の生徒の実態

授業での発言の様子や諸調査の結果から、本校の生徒は総じて基本的な知識が豊富であり、自分の意見や考えを説明することも得意であることが分かる。また、「学びのプロセス」の可視化により、社会的な見方・考え方を踏まえた思考の意識化もできている。

しかし、課題として以下の三点が挙げられる。①知識があるがゆえに、学習課題に対して事実を根拠に考察しないことが多い。②社会問題を様々な視点から批判的に解決しようとする力は十分身に付いているとはいえない。③ICTについては資料提示による学習の動機付けや必要な資料の準備には活用できているが、説明や議論、学習のまとめとしての活用については、発達段階を踏まえながらも全ての学年で取り組んでいく必要がある。

## 2. テーマ・サブテーマ・教科の特質

	社会的な事象を時間、空間、相互関係の視点で捉える ー生徒自らが行う、「協働的な学び」を通してー
特質	資料を的確に選択し、読み取った事実に基づいて社会的な事象等の特色や意味などを客観的に考察したり、社会に見られる課題を把握して公平・公正な解決策などを構想したりすること。

## 3. 具体的な実践事項

## (1) ICTの三つの特質

- ①資料（動画、写真、図表等）の効果的な提示と、瞬時の共有化。
- ②思考の過程を確認するためのカメラ機能の活用。
- ③思考の可視化、共有化できるアプリの活用による、考え方の比較・関連付け。（課題③）

## (2) 対話の三つの方向性

- ①考えをぶつけ合う場としての「協働的な学び」による「個別最適な学び」の実現。（課題②）
- ②班内や教室内での意見交流によるコミュニケーション能力の育成。
- ③異なる考えが理解できるよう、ペアやグループ内で教え合い、説明する場の設定。

## (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

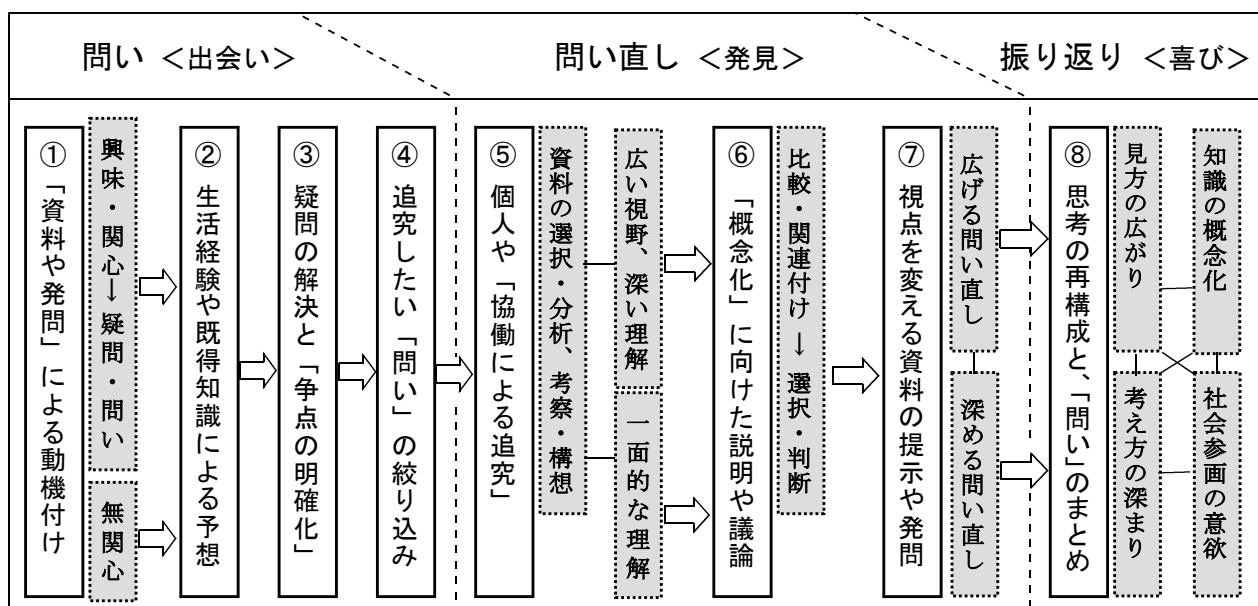
教師が想定しない展開の察知と、的確な軌道修正。

## (4) 日々の授業改善

自らが行った授業について授業中の生徒の活動や NES 評価に応じた記述の内容を見取った振り返り、課題に対する手立ての具体的考察。

※課題①については、指導の全場面を通して資料を根拠とするよう指導する。

## 4. 学びのプロセス



## 5. 社会科で目指す子どもの姿

事実をもとに概念を捉え、よりよい社会作りのために提案する姿
(「よりよい社会作り」のために提案する生徒は、異なる考えをぶつけ合う「協働的な学び」により、批判的に課題を解決することで生み出される)

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	自分自身の経験と向き合い、学ぶことへの興味・関心が高まっているか  社会的事象に問題を感じ、学習への動機付けができているか  追究したい「問い」を絞り込んでいるか	子どもの生活経験に応じた資料を準備する  資料により、社会的事象における矛盾や差異を示す  学習活動で解決すべきことを明示する
	自 分 で 考 え る	「問い」の解決のための見通しをもっているか  資料を根拠に、主体的に「問い」を解決しているか	「問い」への予想や、必要とするべき資料などについて見通しをもつ場を設ける  「問い」の解決に必要な資料を検討する場を設ける
	他 者 と 学 び 合 う	生徒同士の対話を通じ、多面的・多角的に社会的事象について考察しているか  考察をつなげ、思考の再構成ができているか	思考・判断等を揺さぶる、事実や考察を提示し、思考を広げ深める  考察や意見などを比較したり、関連付けたりする視点を示す
振 り 返 り	ま と め る	学習活動の意義を感じられているか  時事の学習へ向けた関心や意欲が一層高まっているか	「見方・考え方」に照らした思考・判断等の価値付けを行う  本時の学習と次時の学習との関連を確認する



## Ⅱ 具体的な実践事項について

### ○1年生の実践

#### (1) ICTの三つの特質に関わって

③思考の可視化、共有化できるアプリの活用による、考え方の比較・関連付け

- ・一単位時間の学習のまとめを共有化するために、Cラーニングの「教材倉庫」を活用し、その時間のまとめ（教師が提示するまとめや生徒の単元のまとめ等）や資料を毎時間公開・蓄積してきた。
- ・問いに対する説明や議論を深めるため、思考の過程を可視化したミエルボードを班ごとに Teams に投稿させてきた。
- ・問いに対する個人や班での説明は、必ず根拠を提示するように指示（課題①に対応）してきた。また、各班の思考の過程をチームズに投稿させることにより、他の考えが瞬時に共有化でき、個の考え深化させ、まとめの手助け（課題③に対応）となっていた。



#### (2) 対話の三つの方向性に関わって

①考えをぶつけ合う場としての「協働的な学び」による「個別最適な学び」の実現

- ・協働的な学びを実現するための手立てとして、ミエルトークと井戸端会議を併用してきた。井戸端会議とは、問いに対して個人で考えたり、複数の生徒で自由にグループを構成したりできる学習形態のことである。
- ・他の意見や板書は、「ノートへの筆記」「タブレットでの入力・撮影」を自由に選択させている。
- ・「個別の最適な学び」ができるように生徒に選択の自由を与えてきた。井戸端会議では、様々な視点からの意見交流が自由にできる（課題②に対応）ので、目的に応じて生徒が自主的に行動できている。

#### 【今後の課題】

- ・社会科の苦手な生徒のためにCラーニングに公開している教師側のその時間のまとめは、どの程度、生徒たちに役立っているのか検証する必要がある。
- ・ノート作りなどでの生徒の裁量が大きい分、その取り組みを通して身に付けた力と課題を明確にする必要がある。

### ○2年生の実践

#### (1) 「ICTの三つの特質」に関わって

- ・大型モニターや書画カメラによる資料提示・共有  
全体で共有したい資料や生徒の発言に関連した資料を映すことで、授業の流れを全員が理解しながら進めることができた。
- ・Teams にアップした板書写真の活用（例：右写真）  
授業終了時の板書をほぼ毎時間教科の Teams に保存することで、①前時の振り返りに活用したり、②後でノート整理を行ったりすることができた。リモート参加生徒の学習を補完する効果もあったと捉えている。



#### (2) 「対話の三つの方向性」に関わって

- ・生徒のコミュニケーション能力を育成するため、班内や教室内での意見交流の際には、4人組座席の位置で司会者と発表者を指定し、輪番制で行うことで、全員が様々な立場の経験を重ねられるように配慮しながら継続的に実施した。

#### 【今後の課題】

- ・ICTの活用場面が限定的であること  
導入部や終末（まとめ）の場面では比較的活用できたが、展開部での活用が少なかった。活

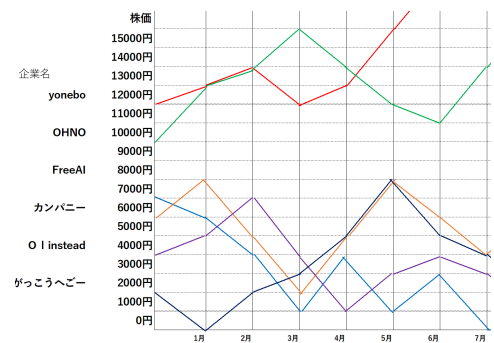
- 用ありきではないが、学習効果を高める手立ての一つとして、さらなる研究が必要だと感じた。
- ・「個別最適な学び」を実現するための具体的な手立て  
「協働的な学び」の手立てに比べて、「個別最適な学び」については未だ研究途上であると  
感じている。教科部で具体策を練り、試行していくことが大切であると考えている。

### ○ 3 年生の実践

#### (1) 「ICTの三つの特質」に関わって

##### ③思考の可視化

- ・生徒が株主になり、より配当を多く得るために株式を売買するゲームを行った。
- ・株価の初期設定は、生徒が起業した企業についてのプレゼンをもとに行った得票数で決めた。
- ・株価の上下はサイコロをもとに行い、その変動の結果を表したグラフをモニターに表示し、生徒は月ごとに株を売るかどうかが判断した。



#### (2) 「対話の三つの方向性」に関わって

##### ①考えをぶつけ合う場としての「協働的な学び」による「個別最適な学び」の実現。

- ・答えが明確でない「問い」を設定し、グループ→学級の順に批判的思考を踏まえて議論することで、個々の生徒にとっての最適解を求める活動を行った。

##### ※「問い」の例

「日本はもっと難民を受け入れるべきか」

「公共料金は、民間の手に委ねてもいいのではないかな」

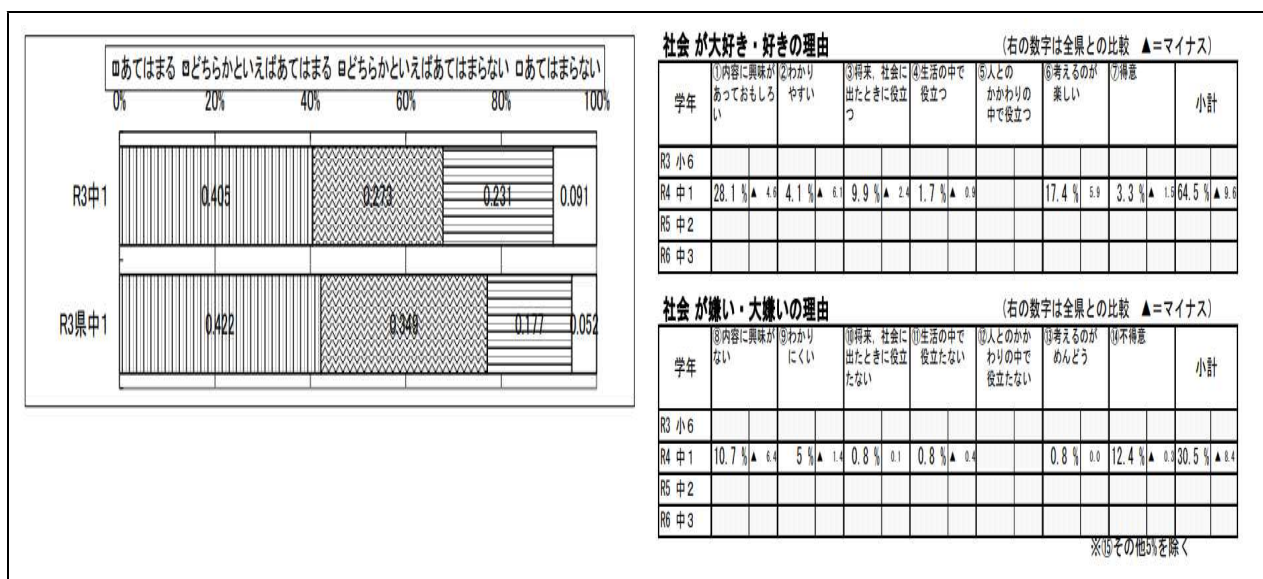
##### 【今後の課題】

- ・ICTによる「③思考の可視化」は、本実践のような数値の変動の可視化について行ったが、数値の変動だけでなく、生徒の考えの相違を可視化するための使用も更に充実させていかなければならない。

### III 生徒の変容について

社会に対する情意面に関する「令和4年度秋田県学習状況調査における生徒質問紙の結果」は次のようになっている。

#### ○ 1 年生 「社会の勉強は好きだ」



## 【結果】

「大好き」「好き」の割合が、いずれも県平均を下回っている。また「嫌い」「大嫌い」の理由では、「不得意」「内容に興味が無い」を選ぶ生徒が多い傾向にある。

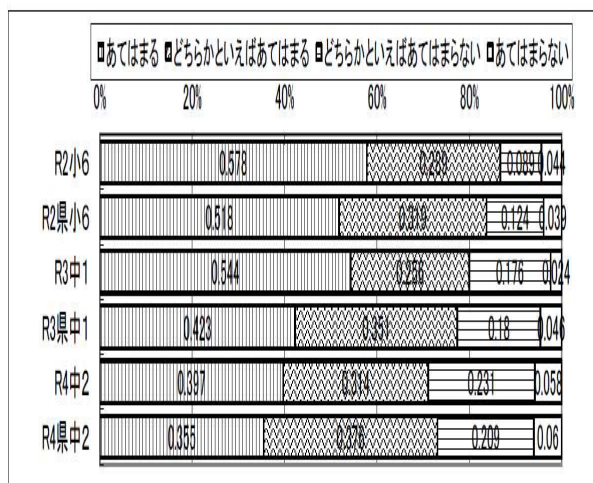
## 【考察】

「考えるのが楽しい」と答えている生徒が県平均を上回っていることから、問いを立て、それを解決することを楽しさを感じている生徒が多いことが分かる。ミエルトークや井戸端会議を通して、思考・判断・表現を重視した授業展開が影響していることが考えられる。

## 【今後の課題】

社会科は、資料を読み取ったり、そこから事実を根拠に考えたりすることに楽しさがあることを、より意識させる必要がある。

## ○2年生 「社会の勉強は好きだ」



## 社会が大好き・好きの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役に立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計
R2 小6	43.3 % ▲6.3	7.8 % ▲1.2	17.8 % 2.0	3.3 % 0.6		8.9 % ▲2.0	5.6 % ▲0.8	86.7 % 5.1
R3 中1	32 % 0.0	13.6 % 2.1	14.4 % 2.2	1.6 % ▲0.9		13.6 % 2.9	4 % ▲1.1	79.2 % 5.2
R4 中2	33.1 % 0.0	7.4 % ▲2.1	15.7 % 4.9	4.1 % 1.2		5.8 % ▲2.4	4.1 % ▲1.9	70.2 % 0.1
R5 中3								

## 社会が嫌い・大嫌いの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興味が無い	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役に立たない	⑪生活の中で役に立たない	⑫人とかかわりの中で役に立たない	⑬考えるのがめんどろ	⑭不得意	小計
R2 小6	3.3 % 0.0	2.2 % 0.8	0 % 0.2	0 % 0.3		1.1 % ▲0.1	4.4 % 3.4	11 % 4.6
R3 中1	4 % ▲0.2	4 % ▲0.2	0.8 % 0.2	0 % 0.4		1.6 % ▲0.6	8.8 % 2.9	19.2 % 2.5
R4 中2	3.3 % 2.6	1.7 % 2.5	0.8 % 0.3	0 % 1.0		0.8 % 0.8	21.5 % ▲9.4	28.1 % ▲2.2
R5 中3								

※⑮その他1.7%を除く

## 【結果】

「大好き」「好き」の割合が昨年度よりも低下し、県平均を若干下回った。また「嫌い」「大嫌い」の理由では、「不得意」を選ぶ生徒が多い傾向にある。

## 【考察】

- ・「将来役に立つ」「生活の中で役に立つ」を選ぶ生徒の割合が比較的高いことから、1年時に比べて、思考・判断・表現をより重視した授業展開で学習したことが影響していると考えられる。
- ・地理・歴史ともに、1年時に比べてより思考力を必要とする学習に内容が深化している。特に歴史分野では、歴史的事実が複雑化したことと、常用外漢字への苦手意識が感じられる。

## 【今後の課題】

思考・判断して表現する課題解決型の授業を継続しつつ、より分かりやすく参加しやすい学びの構築を追究していくことが必要と考える。

## ○3年生

3年生は客観的な数値を求める検査は行っていないが、歴史的分野（近現代）、公民的分野を指導していく中で、生徒は「物事の関係の中で理解することの大切さが分かった」「答えの出ない問いに対してグループや学級で意見を出し合ったことで考えが深まった」「公民はこれからの自分たちの生活に最も役に立つ教科だと思った」などというコメントを振り返りに残した。このことから、より良い社会を作る一員としての公民的資質を身に付けることができたと考えられる。

## IV 来年度の社会科の教科経営

## 1. テーマ・サブテーマ・教科の特質

社会的事象を時間、空間、相互関係の視点で捉える －「協働的な学び」を通して、よりよい社会の形成者を育成する－	
特質	資料を的確に選択し、読み取った事実に基づいて社会的事象等の特色や意味などを客観的に考察したり、社会に見られる課題を把握して公平・公正な解決策などを構想したりすること。

## 2. 具体的な実践事項

## (1) 「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化

① プロセスカードの活用による、学びの構造の意識化。

② 「振り返り」の具体化による、「わかる」「できる」とより感じる授業の構築（課題①）

## (2) ICTの三つの特質と対話の三つの方向性の明確化

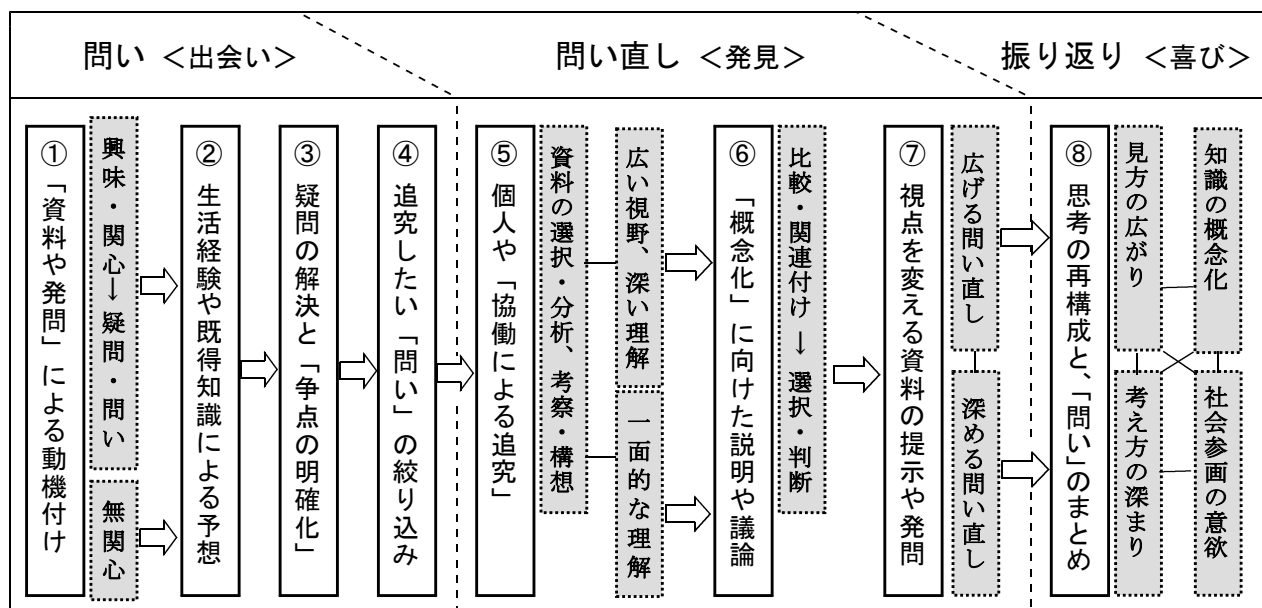
① 考の可視化・共有化できるアプリ活用による、考え方の比較・関連付け。（課題③）

② 考えを深め、視野を広げる場としての「協働的な学び」による「個別最適な学び」の実現。（課題②）

## (3) 「深い学び（学習のねらいの達成）」を目指した、瞬時の判断と柔軟な展開

生徒の将来や現在の生活との関わりに気付かせる教材開発や発問の工夫（課題②）

## 3. 学びのプロセス



## 4. 社会科で目指す子どもの姿

事実をもとに概念を捉え、よりよい社会作りのために提案する姿

（「よりよい社会作り」のために提案する生徒は、「協働的な学び」により考えを深めたり視野を広げたりし、批判的に課題を解決することで生み出される）

## 5. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	自分自身の経験と向き合い、学ぶことへの興味・関心が高まっているか	子どもの生活経験に応じた資料を準備する
		社会的事象に問題を感じ、学習への動機付けができていないか	資料により、社会的事象における矛盾や差異を示す
		追究したい「問い」を絞り込んでいるか	学習活動で解決すべきことを明示する
問 い 直 し	自 分 で 考 え る	「問い」の解決のための見通しをもっているか	「問い」への予想や、必要とするべき資料などについて見通しをもつ場を設ける
		資料を根拠に、主体的に「問い」を解決しているか	「問い」の解決に必要な資料を検討する場を設ける
		生徒同士の対話を通じ、多面的・多角的に社会的事象について考察しているか	思考・判断等を揺さぶる、事実や考察を提示し、思考を広げ深める
振 り 返 り	他 者 と 学 び 合 う	考察をつなげ、思考の再構成ができていないか	考察や意見などを比較したり、関連付けたりする視点を示す
		学習活動の意義を感じられているか	「見方・考え方」に照らした思考・判断等の価値付けを行う
		時事の学習へ向けた関心や意欲が一層高まっているか	本時の学習と次時の学習との関連を確認する



## I 今年度の数学科の教科経営

## 1. 本校の生徒の実態

諸調査の結果から、数学について肯定的な感情をもつ生徒が非常に多く、かつ数学的な知識や技能の習得率も高いため、優れた学力をもっていることがうかがえる。また、授業において数学的な事象を自分の言葉で表現しようとする姿が多く見られており、問題解決に意欲的に取り組んでいる。一方、用語の理解に関する問題や、文章の読み取りを必要とする問題についての正答率は相対的に低い。用語を適切に使用することによって、簡潔かつ分かりやすい表現をしようとする態度の育成が必要である。

## 2. テーマ・サブテーマと教科の特質

図・数式・言語で事実を数理的に解き明かす ー数学のよさを視点に「なぜ」「本当に」が飛び交う学びを通してー	
特質	既習事項を基に論理的に考え、新たな課題と関連付けること。具体的には、事象を数理的に捉えて問題を見だし、理想化したり単純化したりしながら考察した事象の本質を、数学的な表現を用いて論理的に説明すること。

## 3. 具体的な実践事項

## (1) ICTの三つの特質

- ・コラボノートを活用して自分の意見を発表したり、パワーポイントで問題を提示したりすることで、瞬時の共有化を図り、学び合いの支援ができるようにする。
- ・数学的な対象を直接操作し、条件を変えて試行を繰り返すことにより、常に言えることは何か、条件に依存する性質が何かなどについて深められるようにする。
- ・これまでの実践で効果的であった取組にとどまることなく、数学科の特質を踏まえた活用方法を積極的に取り入れる。

## (2) 対話の三つの方向性

- ・「解決を実行する段階」や「問い直しをする段階」では、数学の用語を使ったり、数学の見方・考え方およびよさと関連付けたりしながら対話する活動を取り入れる。文の数や発表時間に制約を設け、簡潔な説明で対話する力を高め合うことで、集団で省察しながら深い学びに誘う。

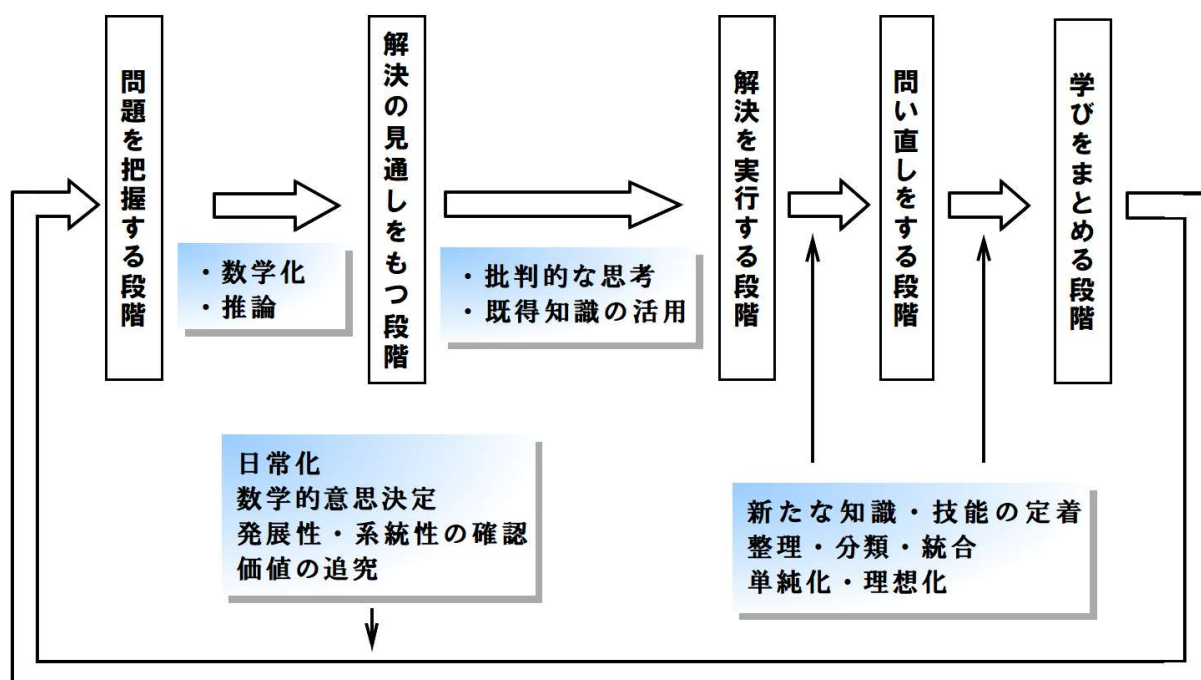
## (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

- ・「さらに言えることはどんなこと?」「どうすればよい?」「どんなことを考えてみたい?」など、生徒の認知的な側面を刺激する支援的な発問をすることで、生徒から数学的な見方・考え方を引き出し、課題解決に導く力を育成する。

## (4) 日々の授業改善

- ・「学びをまとめる段階」での生徒の振り返りから、次時へつながる問いを生徒から引き出し、次の「問題を把握する段階」へとつなげ、学びのプロセスを回す視点を常にもって授業改善にあたる。
- ・教科部内で互いの授業を見合い、子どもの姿から有効な手立てを探る。

## 4. 学びのプロセス



## 5. 数学科で目指す子どもの姿

言葉や数、式、図、表、グラフなどの意味や相互の関係を理解し、それらを使いながら根拠を明らかにして論理的に説明し合う姿

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	<p>学ぶことへの興味・関心が高まっているか</p> <p>自分たちが発した問いから学習が始まっているか</p>	<p>適度な難易度の問題を提示する</p> <p>子どもの問いを生かした問題を提示する</p>
	問 い 直 し	<p>既習事項を活用しているか</p> <p>生徒同士の対話を通じ、自己の考えを広げ深めているか</p>	<p>生徒の学習状況（解法や考え方）を把握する</p> <p>生徒から比較・検討を含めた対話の視点を引き出す</p>
振 り 返 り	ま と め る	見方・考え方と本時の活動を関連させているか	問い掛けを通して次時につながる課題を引き出す

## II 具体的な実践事項について

### (1) ICTの活用

#### ① コラボノートの活用

「問い直しの場面」や「振り返りの場面」において、コラボノートを活用した。「問い直し」の場面では、生徒が自分の考えをキーワードにして入力することで、お互いの考えが瞬時に共有され、それをヒントに新たな考え方に気が付くための手立てとすることができた。また、「振り返りの場面」では、1つのシートに学級全員の振り返りが表示されることで、感じたことや考えたことを共有化し、生徒の考え方を広げるための手立てとすることができた。

1問 生徒が自分の考えをキーワードとして入力することで、お互いの考えが瞬時に共有され、それをヒントに新たな考え方に気が付くための手立てとすることができた。	2問 生徒が自分の考えをキーワードとして入力することで、お互いの考えが瞬時に共有され、それをヒントに新たな考え方に気が付くための手立てとすることができた。	3問 生徒が自分の考えをキーワードとして入力することで、お互いの考えが瞬時に共有され、それをヒントに新たな考え方に気が付くための手立てとすることができた。
4問 生徒が自分の考えをキーワードとして入力することで、お互いの考えが瞬時に共有され、それをヒントに新たな考え方に気が付くための手立てとすることができた。	5問 生徒が自分の考えをキーワードとして入力することで、お互いの考えが瞬時に共有され、それをヒントに新たな考え方に気が付くための手立てとすることができた。	6問 生徒が自分の考えをキーワードとして入力することで、お互いの考えが瞬時に共有され、それをヒントに新たな考え方に気が付くための手立てとすることができた。
7問 生徒が自分の考えをキーワードとして入力することで、お互いの考えが瞬時に共有され、それをヒントに新たな考え方に気が付くための手立てとすることができた。	8問 生徒が自分の考えをキーワードとして入力することで、お互いの考えが瞬時に共有され、それをヒントに新たな考え方に気が付くための手立てとすることができた。	9問 生徒が自分の考えをキーワードとして入力することで、お互いの考えが瞬時に共有され、それをヒントに新たな考え方に気が付くための手立てとすることができた。

#### ② 「楽楽ヒスト」の活用

「データの分析」の単元において「楽楽ヒスト」を用いた。「楽楽ヒスト」ではデータを入力するだけでヒストグラムや度数折れ線を表したり、代表値を表したりすることができる。階級の幅を変えたり、2つのヒストグラムを同時に表したりすることもできるので、生徒がタブレット上でデータを表やグラフに整理し、それをお互いに見ながら話し合いを進めることができた。また、データをまとめる方法を簡単に設定できるため、データの様子をより表す階級の幅が何か試行錯誤することが容易になり、その分、データの傾向を読み取ったり、考察し判断したりすることに重点をおいて授業を進めることができた。



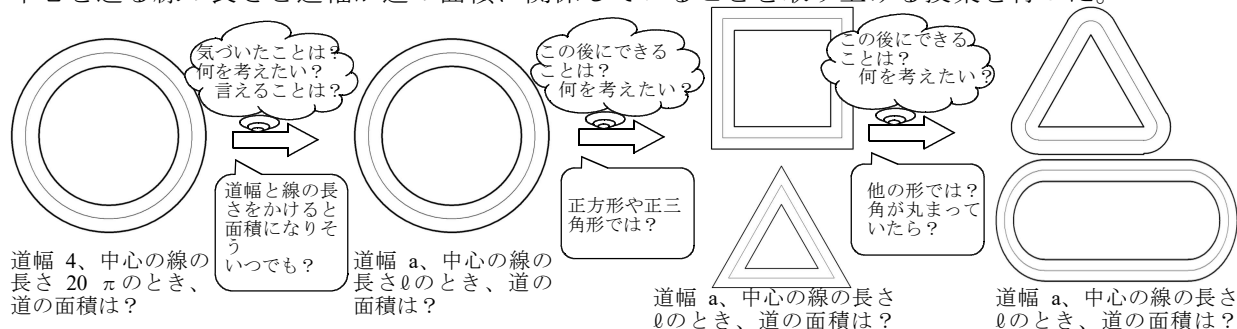
### (2) 対話の三つの方向性

前年度同様、「解決を実行する段階」や「問い直しをする段階」において、柔軟に学習形態を変化させることで、生徒の対話を活発にすることができた。また、その学習形態をとる目的を生徒に明確に伝えることにより、より主体的に学習をする様子が見られた。例えば、「解決を実行する段階」においては、対話の方向性ウ『支え合い・認め合い・教え合い』を目的とし、自由交流を行ったところ、「その考えいいね」「ここが分からないんだけど」といった発言が見られた。また、「問い直しをする段階」において、対話の方向性ア『集団での省察』および対話の方向性イ『認知過程の外化』を目的として対話をしたところ、不十分ではあるものの、自由交流でそれぞれがもっている意見を数学的見方・考え方と結びつけたり、その意見を価値づけたり、一見バラバラに見える考えを結びつけ、体系化を図ろうとしたりする姿が見られた。また、対話の中には数学的な用語を正しく活用できるよう用語の定義を確認したり、生徒の感覚的な用語を生徒と言い換えたりする活動を取り入れた。また、正しい用語使用ができていない発言を認めることで用語を正しく使おうとする態度を涵養することができた。



### (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

生徒の思考を促す「何か気付いたことは?」、「次に何を考えたい?」、「さらに言えることは?」、「今日は何を解決できればいいのかな?」などの発問に徹することで、本時で取り組む問題を生徒自身が決定できるよう心がけた。また、「さらに言えることは?」、「この後にできることは?」などの発問で発展的な考えの思考を促した。例えば、3年生の「多項式」の単元においては、道の中心を通る線の長さ $20\pi$ のとき、道の面積は?という問題を扱った。



生徒の発想に柔軟に対応すること、および一見思考停止とみられる時間であってもじっと待つことを心がけ、生徒の気づきを待ち、主体的に学ぶ授業づくりを目指して実践した。

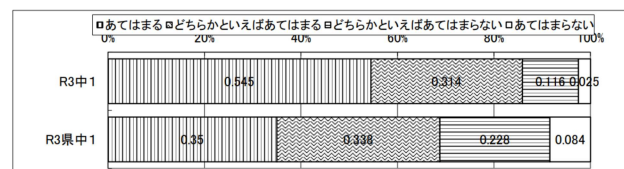


### Ⅲ 生徒の変容について

「令和4年度秋田県学習状況調査」における、1年生および2年生の結果は次の通りである。

数学に対して肯定的な感情をもっている生徒は、両学年とも全体の8割を超えており、このことは授業への積極的な態度とも結びついているものと考えられる。数学が好きな理由は、「⑥考えるのが楽しい」が両学年ともトップで、次いで「①内容に興味があつておもしろい」となった。特に、「⑥考えるのが楽しい」に関しては、全県比で約2倍、2年生は昨年比15ポイント増となり、教科の目標である「なぜ?」「本当に?」と考える授業を構築できた結果であると考えられる。また、生徒の認知的な側面を刺激する発問を繰り返したことにより、生徒が主体的に学びを作ることができるようになり、また、授業の最後に「この条件を変えたらどうなるだろう?」という問いが、次時の導入へとつながることが多くなった。結果として、より学びのプロセスが活性化したと考えられる。

#### ○1年生 「数学の勉強は好きだ」

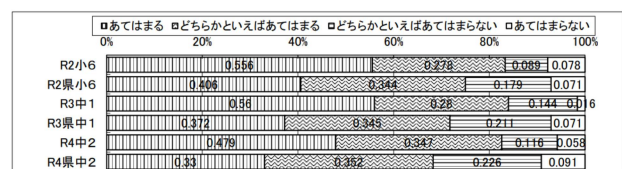


数学が大好き・好きの理由										(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)	
学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意			小計	
R3 小6											
R4 中1	11.6 %	3.8	7.4 %	▲ 2.2	12.4 %	▲ 2.4	6.6 %	▲ 2.0		35.5 %	18.6
R5 中2											
R6 中3											

数学が嫌い・大嫌いの理由										(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)	
学年	⑧内容に興味がない	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役立たない	⑪生活の中で役立たない	⑫人とかかわりの中で役立たない	⑬考えるのがめんどろ	⑭不得意			小計	
R3 小6											
R4 中1	1.7 %	0.8	0 %	0.9	0.8 %	▲ 0.2	0.8 %	▲ 0.6		1.7 %	2.2
R5 中2											
R6 中3											

※⑮その他0.8%を除く

#### ○2年生 「数学の勉強は好きだ」

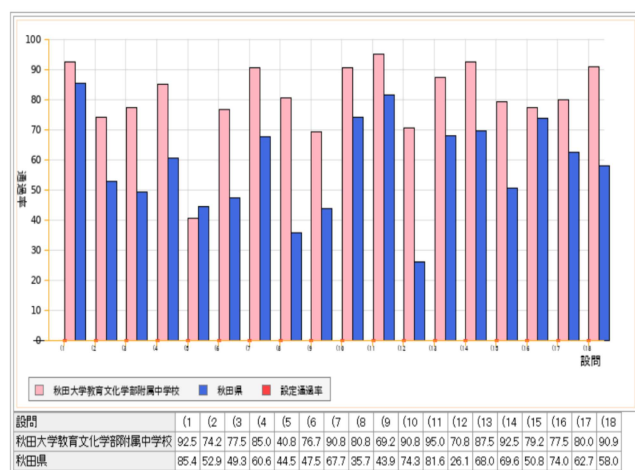
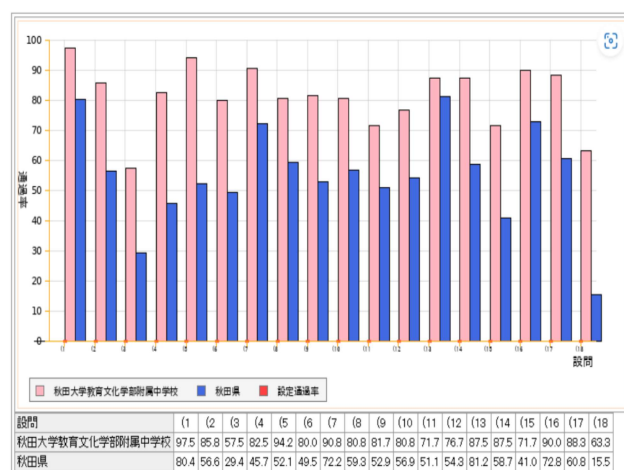


数学が大好き・好きの理由										(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)	
学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意			小計	
R2 小6	13.3 %	5.7	5.6 %	▲ 2.7	18.9 %	2.1	11.1 %	▲ 0.1		26.7 %	8.8
R3 中1	23.2 %	14.5	12 %	0.7	10.4 %	▲ 3.7	4 %	▲ 3.6		22.4 %	4.4
R4 中2	14.9 %	5.8	8.3 %	▲ 1.7	11.6 %	▲ 0.5	2.5 %	▲ 3.4		38 %	17.8
R5 中3											

数学が嫌い・大嫌いの理由										(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)	
学年	⑧内容に興味がない	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役立たない	⑪生活の中で役立たない	⑫人とかかわりの中で役立たない	⑬考えるのがめんどろ	⑭不得意			小計	
R2 小6	1.1 %	1.3	1.1 %	2.8	0 %	0.1	2.2 %	▲ 2.1		2.2 %	1.1
R3 中1	0.8 %	1.5	0.8 %	4.4	0.8 %	▲ 0.8	0 %	0.2		0.8 %	2.2
R4 中2	0.8 %	2.5	0 %	5.1	0.8 %	0.0	2.5 %	▲ 2.1		0.8 %	2.2
R5 中3											

※⑮その他2.5%を除く

また、同調査からは、数学的な知識・技能の定着度や、思考力が高いことが読み取れる。1年生ではすべての設問で、2年生においてもほぼすべての設問で県平均を大きく上回る正答率であった。表現力についても、授業において自分なりの言葉で表現しようとする姿が見られた。対話の方向性を明確にしたことに起因する結果であると考えられる。



一方で、同調査からは課題となる点についても読み取れる。情意面では、数学が嫌いな生徒が一定数いること、そしてその理由として両学年とも「⑭不得意」を上げる生徒が一番多いことが読み取れる。数学に対する苦手意識や知識等の定着の甘さが情意面に影響を与えているものと考えられる。「⑧内容に興味がない」や「⑨わかりにくい」の割合が低いことは、生徒の「分かりたい」「もっと実力をつけたい」という思いとして受け止め、より「わかった」と実感できる授業を構築する必要がある。また、用語の理解に関する設問および文章の読み取りを必要とする設問の正答率が、他の設問の全県比と比べるとやや落ち込んでおり、2年生においては、全県平均を下回っている設問も存在する。授業で見られる活発な意見交換が、まだ自分が納得する言葉にとどまっており、相手も納得する言葉になっていないことが問題点としてあげられる。

以上の課題から、対話の三つの方向性を意識する取り組みを続けながらも、より支え合ったり認め合ったりする支持的風土を醸成したり、バラバラな知識を体系化し納得感のある授業の構築したりすることや、適切な用語使用により、相手を納得する説明をする活動を取り入れることが必要であると考えられる。

## IV 来年度の数学科の教科経営

## 1. テーマ・サブテーマと教科の特質

図・数式・言語で事実を数理的に解き明かす ー数学のよさを視点に「なぜ」「本当に」が飛び交う学びを通してー	
特質	既習事項を基に論理的に考え、新たな課題と関連付けること。具体的には、事象を数理的に捉えて問題を見だし、理想化したり単純化したりしながら考察した事象の本質を、数学的な表現を用いて論理的に説明すること。

## 2. 具体的な実践事項

## (1) 学びのプロセスの活性化

- ・「次に何を考える?」「こういうときには、どんなことが考えられそう?」など、生徒の認知的な側面を刺激する発問をすることで、生徒が主体的に学習しようとする態度を育てる。
- ・「学びをまとめる段階」での生徒の振り返りから、次時へつながる問いを生徒から引き出し、次の「問題を把握する段階」へとつなげ、学びのプロセスを回す視点を常にもって授業改善にあたる。

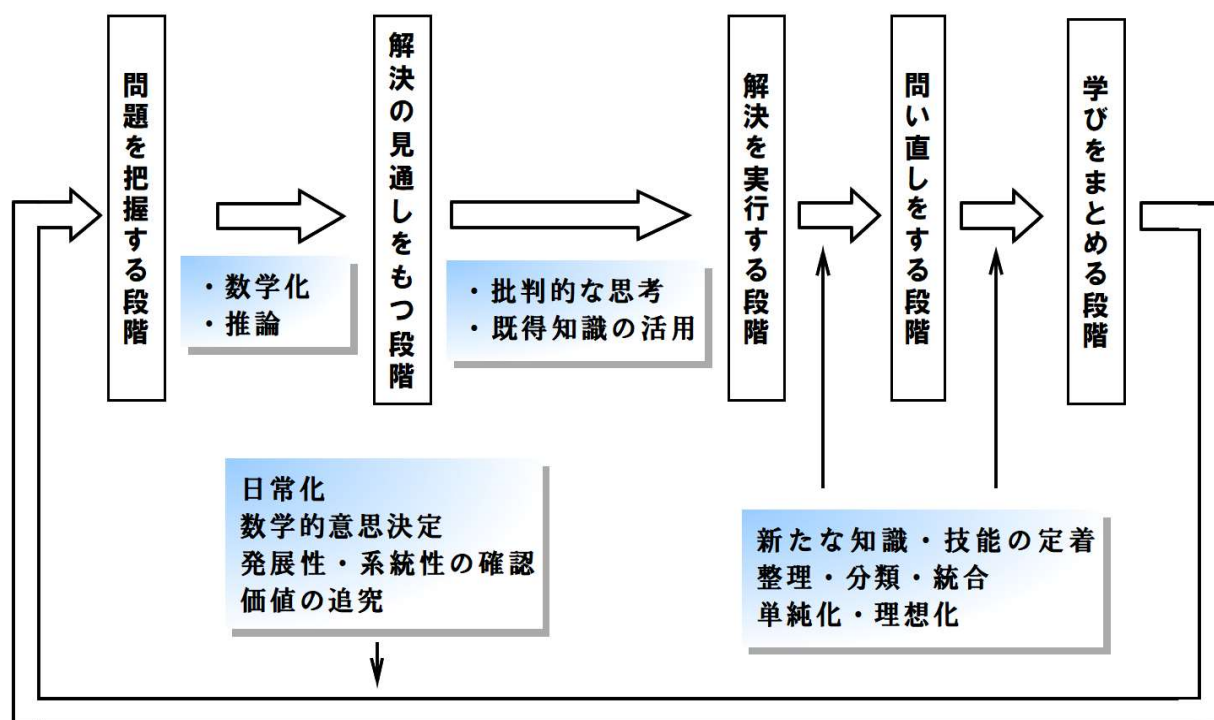
## (2) ICTの三つの特質と対話の三つの方向性の明確化

- ・コラボノートやFormsを活用して自分の意見を発表したり、パワーポイントで問題を提示したりすることで、瞬時の共有化を図り、学び合いの支援ができるようにする。
- ・GeoGebraやスグらパなどを活用して数学的な対象を直接操作し、条件を変えて試行を繰り返すことにより、常に言えることは何か、条件に依存する性質が何かなどについて深められるようにする。
- ・数学科の特質を踏まえ、数学ならではのICT活用方法を積極的に取り入れる。
- ・様々な学習形態による対話、およびその学習形態をとる目的を明確に伝えるた上での対話をする事により、集団の支持的風土を高めたり、正しい用語を使って相手を説得したりすることができるよう支援する。

## (3) 「深い学び（学習のねらいの達成）」を目指した、瞬時の判断と柔軟な授業展開

- ・生徒の認知的な側面を刺激する発問により出される生徒のアイディアを柔軟に取り入れる対応力を身につける。
- ・生徒の発言や考えをつなげ、バラバラな知識を体系化したり、数学的見方・考え方と関連づけたりすることで、深い学びへと誘う。

## 3. 学びのプロセス





#### 4. 数学科で目指す子どもの姿

言葉や数、式、図、表、グラフなどの意味や相互の関係を理解し、それらを使いながら根拠を明らかにして論理的に説明し合う姿

#### 5. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問い	問題の把握	自分たちが発した問いから学習が始まっているか	子どもの問いを生かした問題を提示する
		学ぶことへの興味・関心が高まっているか	適度な難易度の問題を提示する
	見通し	学び方を選択しているか	式・図・グラフ・ICT 等、解決に必要な必要な手立てを引き出す
問い直し	解決の実行	既習事項を活用しているか	生徒の学習状況（解法や考え方）を把握する
	問い直し	生徒同士の対話を通じ、自己の考えを広げ深めているか	生徒から比較・検討を含めた対話の視点を引き出す
振り返り	まとめ	見方・考え方と本時の活動を関連させているか	認知的な側面を刺激する発問を通して次時につながる課題を引き出す

## I 今年度の理科の教科経営

## 1. 本校の生徒の実態

諸調査から、理科が好きだと答えている生徒の割合は9割程度と高い。これは、問い直しでマーケティングディスカッションやタブレットPCを用いて意見交流を行うことで、新たな視点に気付く力や、根拠に基づいて結論を導き出す力が育ってきているからだと考えられる。また、質的・量的な関係や、時間的・空間的な関係に視点をおいた話し合い活動やICT機器の活用を繰り返す中で、仲間と共に科学的に探究していく態度も高まってきている。

しかし、まだ予習などで得た知識に頼った主張をする場面も見られるため、より確かな根拠に基づいて論理的に説明する力を育てていくことが課題である。

## 2. テーマ・サブテーマと教科の特質

自然の事物・現象を科学的な視点や方法で探究する ー観察・実験の結果を問い直し、分析・解釈を深める学びを通してー	
特質	観察・実験を通して自然の事物・現象を科学的に探究すること。具体的には、観察・実験の結果を根拠として仮説の妥当性を検討することにより、様々な知識がつながり、より科学的な概念が形成され、その概念が次の学習や日常生活などにおける課題の発見や解決の場面で働くこと。

## 3. 具体的な実践事項

## (1) ICTの三つの特質

- ・試行の繰り返しを目的に、観察・実験の過程や結果を画像や動画に記録し、より深い分析・解釈ができるようにする。
- ・瞬時の共有化を目的に資料を提示することで、知的好奇心を喚起したり、予想や仮説の妥当性の検討や他者の意見を批判的に思考したりすることにつなげる。

## (2) 対話の三つの方向性

- ・根拠をもとに科学的に分析・解釈する「問い直し」を設定し、互いに考えを広げたり深めたりしながら、集団での深い省察を促す。

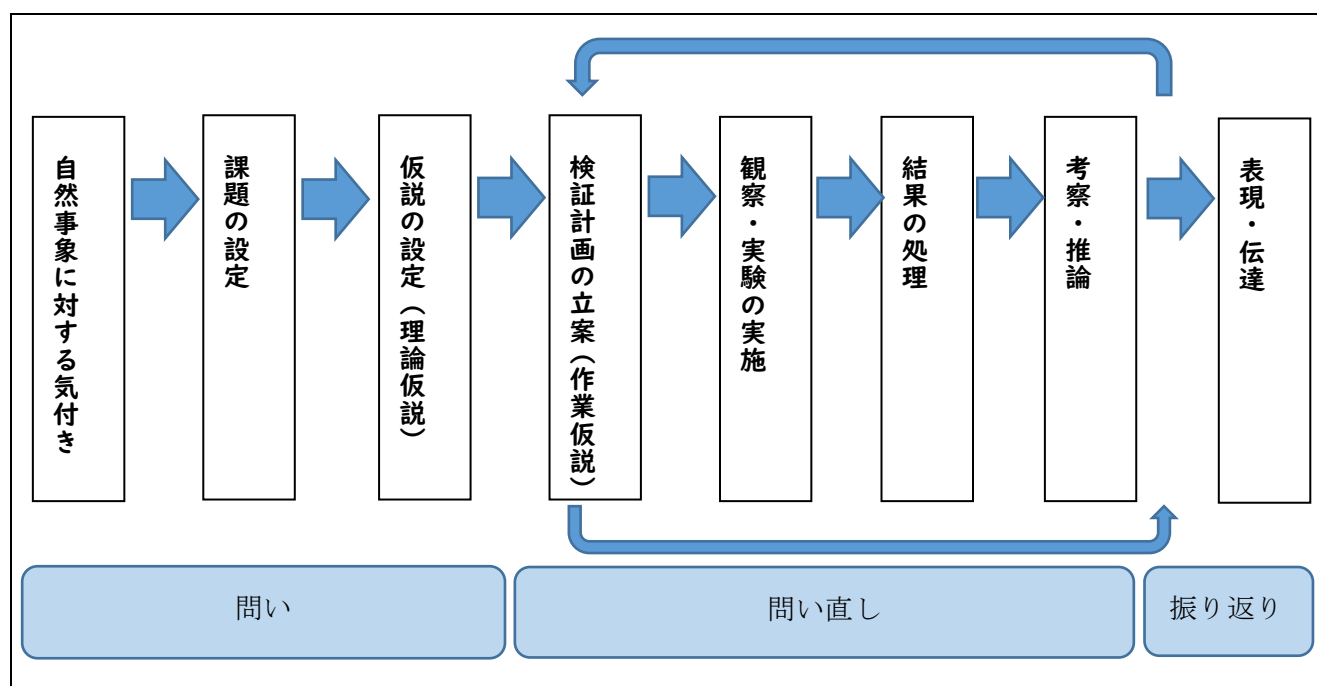
## (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

- ・集団の課題意識を損なわせない瞬時の対応の変更や、科学者の思考を追体験させるような柔軟な授業展開で理科の見方・考え方を働かせながら、課題解決に導く力を育成する。

## (4) 日々の授業改善

- ・NES評価を用いて、学びに対する自己効力感や自己有用感を見取り、高める。
- ・教科部内で互いの授業を見合い、子どもの姿を分析することで、誰にでもすぐできる効果的な実践を探る。

## 4. 学びのプロセス



## 5. 理科で目指す子どもの姿

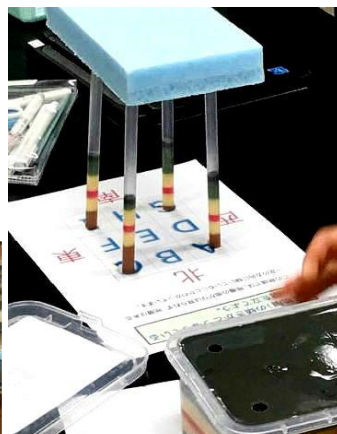
観察・実験の結果を問い直し、科学的な言葉や概念を使って考察することができる姿

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	学ぶことへの興味・関心が高まっているか	子どもの実態に応じた資料を準備し提示する
		自分自身の経験と向き合っているか	生活体験や自然事象を想起させる手立てを行う
		学習のゴールをつかむことができているか	学習活動のねらいを自らつかむようにする
問 い 直 し	自 分 で 考 え る  他 者 と 学 び 合 う	自分自身の経験や学習状況を捉えられているか	仮説や予想など、模索する学習活動を設定する
		目的意識をもって観察・実験に取り組んでいるか	観察・実験で確かめる場を設定する
		生徒同士の対話を通じ、自己の考えを広げ深めているか	考察を交流させ、思考を広げ深める
振 り 返 り	ま と め る	考察どうしをつなげているか	考察や意見などを比較したり、関連付けたりする視点を示す
		学習活動の意味を感じられているか	実生活で生かせる場を設定する
		関心や意欲が一層高まっているか	本時の学習と次時の学習との関連を確認する

## II 具体的な実践事項について

### 1 年生 「大地の変化」 秋季公開研の実践より



#### (1) 対話の三つの方向性

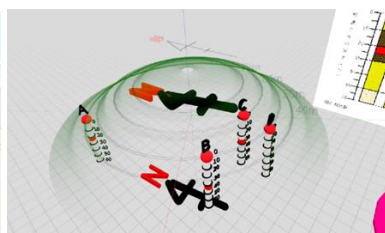
課題を解決する方法を検討し、直接体験を通して、地層の広がりや傾きの特徴を見いだす場面を設定した。生徒は、寒天で作った地層で、どの地点から採取して比較するかを意見交換し、実際に地層の様子を調べ、特徴を明らかにした。地層の傾きを知るために、どのような視点で調査すべきか何カ所を掘ることで傾きを知ることができるのかを班で意見交換し実験方法を決定した。実験では、採取した3カ所のボーリング試料を比較しながら、地層の様子について話し合った。自分たちが発想した解決の方法で調査する活動を行い、得られたデータを分析して解釈することにより、科学的に探究する力の育成を図ることができた。

「問い直し」では、自分の考えをより妥当なものにしたり、再検討したりする活動を取り入れた。地層の広がりや傾きについて、他のグループと意見交換した上で、地層を再調査する活動を行った。一度目の調査では、南北方向と東西方向を知るために、3地点の調査で検討したが、より妥当な考えにするために、地層の広がりや傾きを予想しながらもう1地点を調査して試料を得た。自分たちの立てた仮説を検証するための活動は、地下の見えない地層を推定することに非常に有効であった。目的に応じて多様な学習形態を取り入れ、生徒同士で結論を見いだす活動を設定することは、結果を分析して解釈する力の育成に結び付いた。

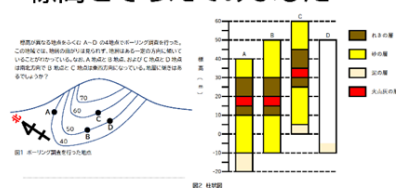
#### (2) ICT の三つの特質

コロナ禍において、現地に赴いての地層観察はなかなか行うことができない。360°

全天球カメラやVRゴーグルを活用することで、男鹿市安田海岸の地層を観察することができた。バーチャルツアーを作成することで、その場で観察を行っている感覚にさせることができ、意欲も高まった。VRゴーグルを用いて、GravitySketchで山の内部の地層の様子やボーリング調査の様子を再現することで、立体的に捉えることができ、紙の上では理解が難しかった柱状図の課題にも意欲的に取り組むことができた。今後は、地層以外にもVRを活用することで理解を助けることができるような教材を開発していきたい。



#### 標高をそろえてみました





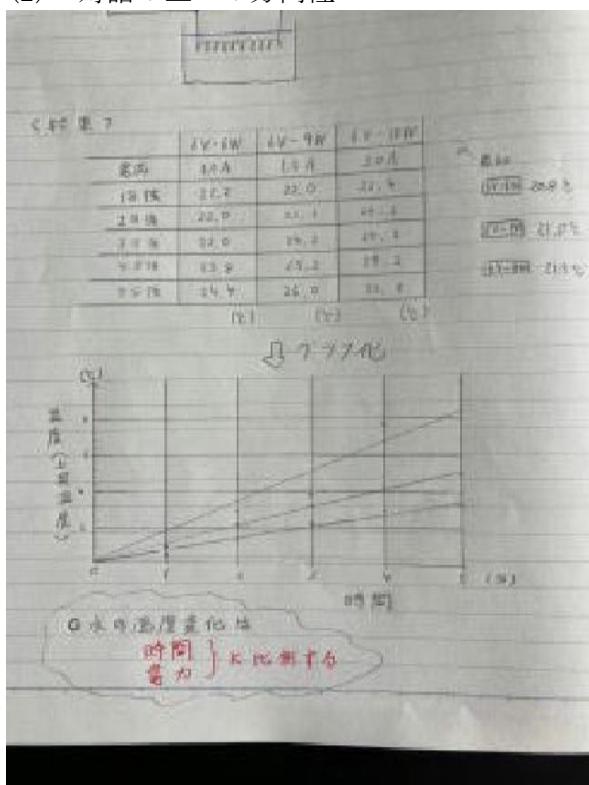
## 2年生の実践より

## (1) ICTの三つの特質



導線を中心に同心円状に広がるとともに、「右ねじの法則」に沿った方向に磁界の向きができあがることを導き出していくことは容易ではないのだが、「試行のくり返し」と十分な時間の確保によって、ほとんどの生徒が磁力線を書くことができていた。これはまさに、ICTが導き出した成果といえよう。

## (2) 対話の三つの方向性



## 「電流がつくる磁界」

「コイルのまわりの磁界はどのようなになっているのだろうか」を学習課題にして実践を行った。今回は、棒磁石がつくる、磁界の様子をもとに仮説を立て検証した。検証の方法は、コイルのまわりに鉄粉をふりかけ、その模様や方位磁針のN極の指す向きをもとに、磁力線を引いていくのだが、鉄粉の模様が出来上がる過程や、方位磁針の向きが一瞬にして変化する様子を「試行のくり返し」を目的にタブレットの動画機能を用いて撮影した。

## 「電気エネルギー」

「電熱線の発熱と電力の関係」を調べるために、水の上昇温度から発熱量を測定し、傾向を導き出すための実験を行った。

その後、データをグラフ化したのだが、A班のデータにはばらつきが見られた。グラフは一直線にすべきなのか、曲線なのか折れ線なのか、その解決に向けて話し合いが展開された。最終的には、1年生のときに行った、ばねの伸びと加えた力の関係を導き出した際の経験を生かし、誤差を見据えて一直線に引くグラフが選択された。話し合いを通じて、経験を生かした最適解が導き出されたものと考えられる。



## (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開



## 「動物のからだのつくりとはたらき」

心臓のはたらきを本物の心臓から学ばせたいと考え、食肉センターから豚の心臓を購入した。その際、すでに学習は終了していたが、動機付けにつながるものとして同時に豚の眼球や肺も購入していた。

豚の心臓、眼球、肺を見せた際、生徒が興味を示したのは、眼球だった。以前イカの解剖から、眼球の中に水晶体があることを知っていたからである。生徒からは豚の眼球も解剖したいという声があがった。急遽、心臓の学習を後回しにし、眼球の復習のための解剖を行うことに変更した。2種類の動物の眼球を比較、検討したことで、生物の共通性や多様性についての深い学びが生まれた瞬間だった。



## 3年生の実践より

## (1) ICTの三つの特質

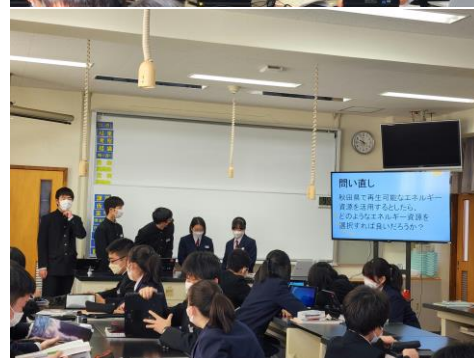
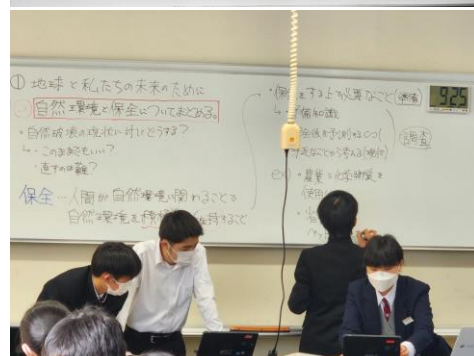
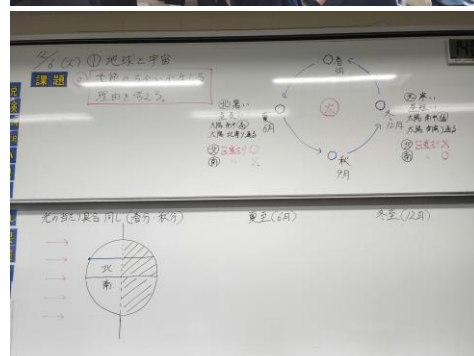
1人1台タブレットが使えるようになったことで、理科では生徒自身が学習用具の一つとして必要な時に自分の判断でICT機器を活用することができるようになった。「試行の繰り返し」ができるように、観察・実験のようすを静止画や動画で撮影したり、自分や班の考えをモニターに表示して、「思考の可視化」や「瞬時の共有化」を図ったりと、指示がなくても必要に応じてICT機器を活用する姿が見られた。活用が得意な生徒だけでなく、すべての生徒が基本操作を習得しており、学習活動に個人差が生じていないことは、これまで授業の中で、継続して当たり前にICT機器を使ってきた成果だと言える。

## (2) 対話の三つの方向性

「化学変化とイオン」をはじめ、「生命の連続性」「運動とエネルギー」「地球と宇宙」どの単位においても、根拠をもとに科学的に分析・解釈する「問い直し」を設定し、互いに考えを広げたり深めたりしながら、集団での深い省察を促す活動を行ってきた。例えば、地球上から見える太陽のようすや地上における現象をもとに地球が地軸を傾けたまま太陽の周りを公転していることを見いだすなど、それぞれの単元で古の科学者の思考を追体験する活動を重視した。既習事項をもとに理論仮説を立て、その理論を実証するための作業仮説を考え、検証実験を行い、その結果を分析・解釈して結論を導く活動は、前述の通り古の科学者の思考過程を追体験するものであり、まさしく理科の「見方・考え方」をはたらかせながら、根拠をもとに論理的に説明する力を培うことにつながったと考える。

## (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

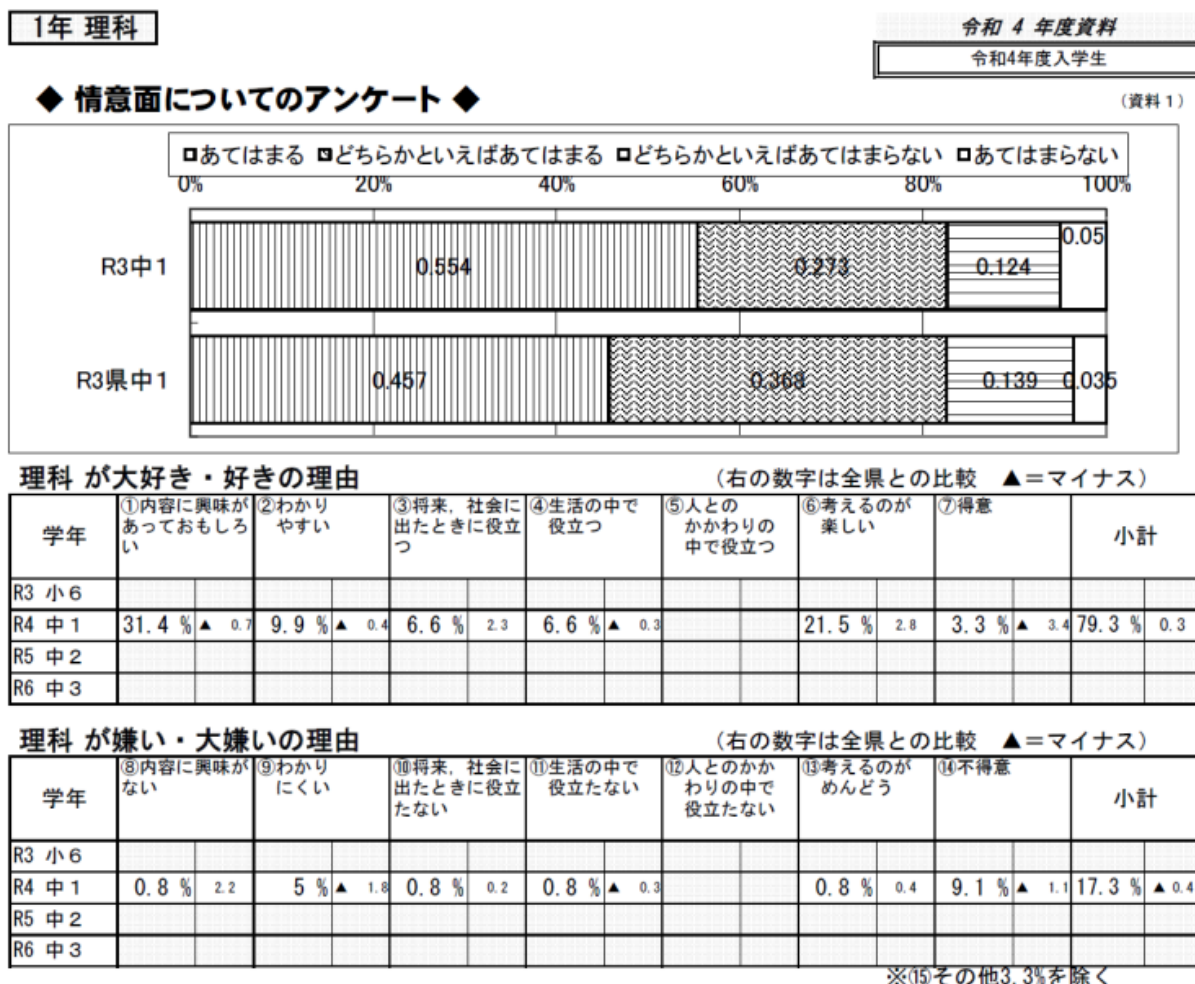
3年生では単元5「地球と私たちの未来のために」において、生徒自らが先生となって授業を行った。第2章「自然環境の調査と保全」、第3章「科学技術と人間」、終章「持続可能な社会をつくるために」の3つの章を6つに分け、それを各班に割り当てた。準備の時間を3時間設定し、①学習内容を自分たちが理解し、授業の柱を見つける。②その柱を押さえるための授業構想を練る。③役割分担し、シミュレーションを行う。という段階を経て授業に臨んだ。瞬時の判断から来る柔軟な授業展開とは異なるが、生徒自身がこれまで学んできたことをもとに、自分たちで「どう授業を展開すれば考えや理解が深まるか」を思案し授業を構築することで、単なる研究発表会ではなく、また、互いに教え合うこととも違った「授業とは何か」を実感する良い機会となった。更に、授業を受けているという意識から、授業の中で活動の意味を考えながら能動的に学習するという意識への変化が見られた。この単元は内容的にも生徒自身の力で学習を進めることが可能な題材と言うこともあり、広い意味での通常とは違った柔軟な授業展開として効果的だったと思う。



### Ⅲ 生徒の変容について

諸調査からは、観察・実験の結果から分析・解釈し結論を導く科学的思考力が高く、授業改善の成果が伺われる。また、授業においても、科学用語を用いて説明しようとする姿が見られる。しかし、実際の授業の中では正しい言葉を使って科学的事象を説明したり、器具や道具の正しい使い方に関する技能が身に付いていなかったりする場面が多く見られる。

理科に対する情意面に関する「令和4年度秋田県学習状況調査における生徒質問紙の結果」は次のようになっている。



#### ○1年生

「理科の勉強は好きだ」の質問に対して「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の割合は82.7%と、全県平均の82.5%と比べて0.2%上回った。しかし、「あてはまらない」が5.0%となっている。これは、学習内容の難易度が上がったことや質量パーセント濃度の計算など少数の割りきれない問題への苦手意識から、不得意者の割合が増加したことが原因であると考えられる。また、設問の通過率からは、うすい塩酸の働きについて、実験の結果を基に考察し、表現することに関して課題が見られた。結果からどのようなことが言えるのか、個人で考察する時間をしっかりと確保し、生徒が課題及び仮説と対応した考察を行えるよう、探究の過程の振り返りにつながる視点を与えるようにしていきたい。ICTを用いた実験の録画やプレゼンテーションは探求の課程を振り返る上でとても有効である。今後もICTのもつ特徴を、学習のねらいの達成に向けて効率よく活用していきたい。

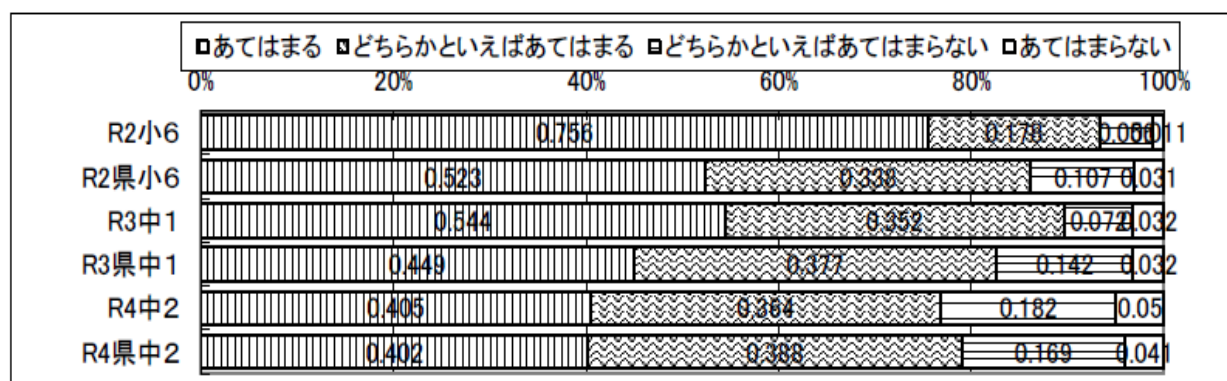
## 2年 理科

令和4年度資料

令和3年度入学生

## ◆ 情意面についてのアンケート ◆

(資料1)



## 理科 が大好き・好きの理由

(右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)

学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計
R2 小6	34.4 % 3.6	3.3 % ▲ 6.5	8.9 % 3.1	0 % ▲ 7.1		34.4 % 12.9	4.4 % ▲ 3.7	85.4 % 2.3
R3 中1	28 % ▲ 3.7	14.4 % 4.5	7.2 % 2.8	6.4 % ▲ 0.5		20 % 0.4	8 % 1.3	84 % 4.8
R4 中2	32.2 % ▲ 0.1	8.3 % ▲ 1.3	6.6 % 2.0	5 % ▲ 2.4		19 % 3.1	2.5 % ▲ 3.7	73.6 % ▲ 2.4
R5 中3								

## 理科 が嫌い・大嫌いの理由

(右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)

学年	⑧内容に興味がでない	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役立たない	⑪生活の中で役立たない	⑫人とかかわりの中で役立たない	⑬考えるのがめんどろ	⑭不得意	小計
R2 小6	1.1 % 2.1	1.1 % 1.8	0 % 0.8	0 % 0.4		1.1 % ▲ 0.3	3.3 % 1.9	6.6 % 6.7
R3 中1	0.8 % 1.8	2.4 % 0.8	0.8 % 0.0	0 % 0.3		0 % 1.1	6.4 % 2.2	10.4 % 6.2
R4 中2	3.3 % 0.0	3.3 % 0.1	0.8 % 0.3	0 % 0.3		2.5 % ▲ 0.6	13.2 % ▲ 2.9	23.1 % ▲ 2.8
R5 中3								

※⑮その他3.3%を除く

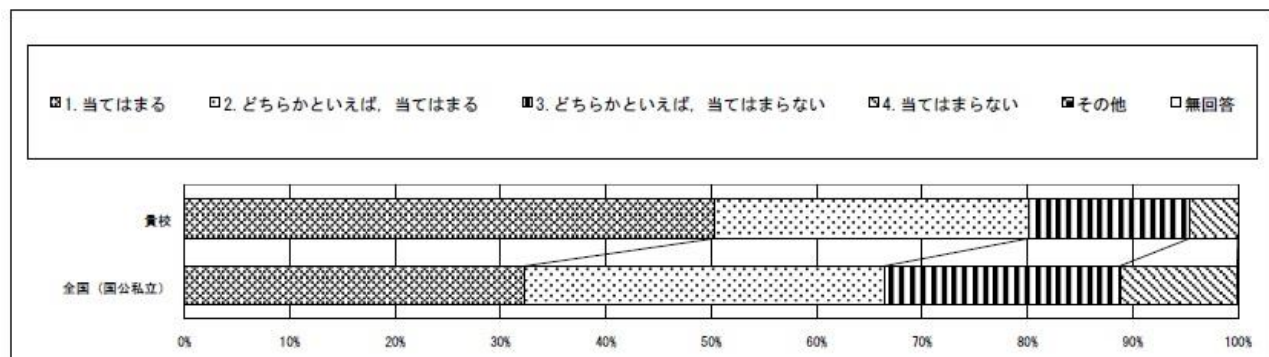
## ○ 2年生

「理科の勉強は好きだ」の質問に対して「あてはまる」のみに注目するとその割合は全県平均よりも 0.3%上回っている。しかし、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」を合わせた割合は 77.0%と、全県平均の 79.0%と比べてわずかに下回った。学習内容の難易度が上がっていることが主な原因であると考えられる。また、好きな理由は、「内容に興味がある」が最も高く 32.2%を占めているのに対し、嫌いな理由も「内容に興味がでない」が最も高くの 3.3%を占めていた。理科の学習に対する興味の2極化が進行している傾向が予測される。設問の通過率からは、光の反射の道筋を作図する技能や還元の実験に関する技能の習得に課題が見られた。今後の学習の中で、随時1・2年生の学習内容を復習する時間を取りながら定着を図りたい。

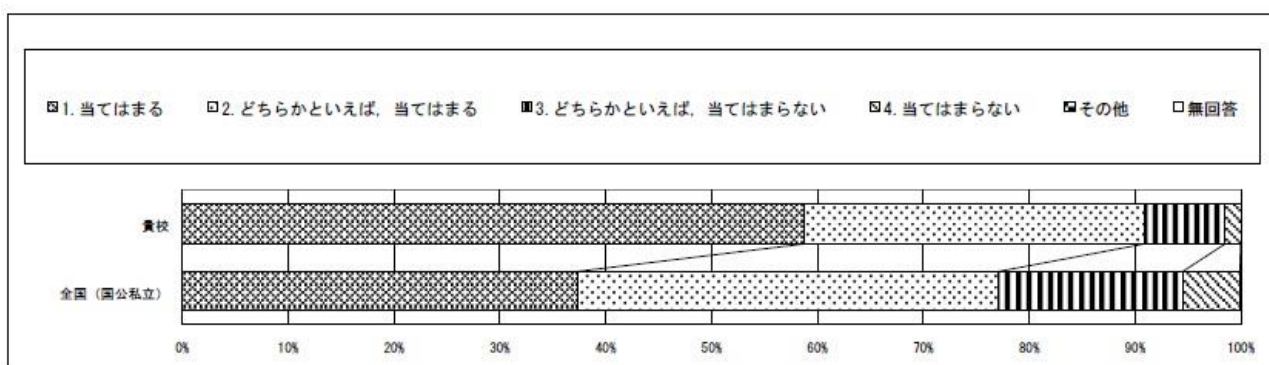


## ○全国学テの結果から（３年生）

質問番号	質問事項										
（６１）	理科の勉強は好きですか										
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他	無回答
貴校	50.4	29.8	15.3	4.6						0.0	0.0
全国（国公立）	32.3	34.1	22.3	11.1						0.0	0.1



質問番号	質問事項										
（６２）	理科の勉強は大切だと思いますか										
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他	無回答
貴校	58.8	32.1	7.6	1.5						0.0	0.0
全国（国公立）	37.3	39.8	17.4	5.4						0.0	0.1



「理科の勉強は好きですか」の質問に対して「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」を合わせた割合は 80.2%と、全国平均の 66.4%を大きく上回った。また、「理科の勉強は大切だと思いますか」という質問に対しては「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」を合わせた割合は 90.9%と全国平均の 77.1%をこちらも大きく上回るなど、その他、すべての質問項目において全国平均を大きく上回る結果となった。中学校３年間の理科で身のまわりの事象と関連付けながら、科学者の思考過程を追体験する授業展開をしてきた成果であると考え。設問で見ると、前線の種類とそこにできる雲の種類(名前)が一致せず、定着が不十分だったことが明らかになったので、再確認した。



## IV 来年度の理科の教科経営

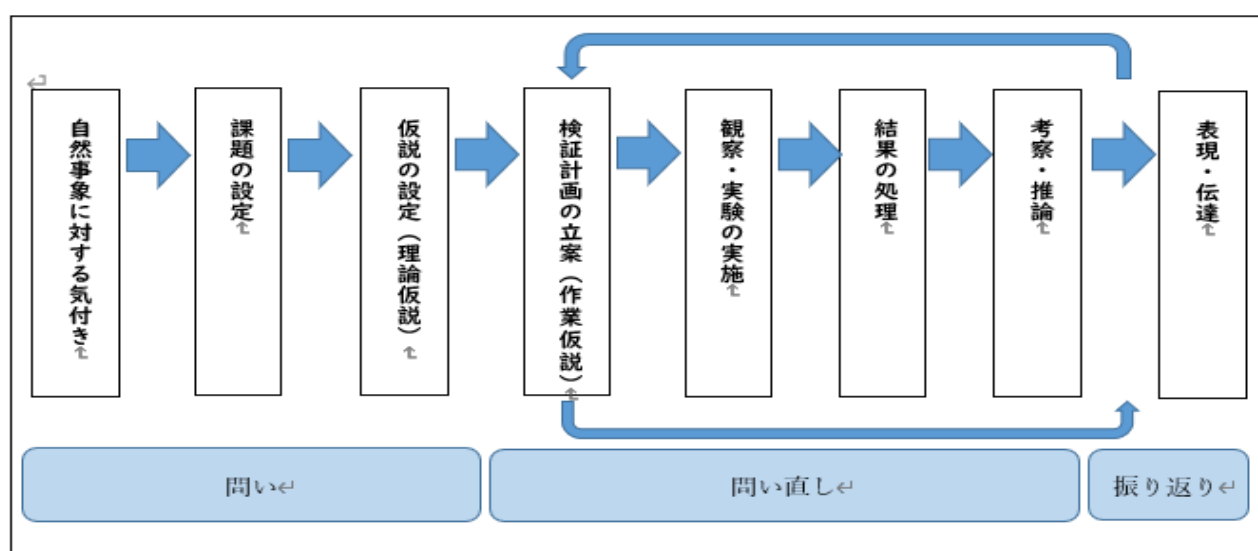
## 1. テーマ・サブテーマと教科の特質

自然の事物・現象を科学的な視点や方法で探究する －観察・実験の結果を問い直し、分析・解釈を深める学びを通して－	
特質	観察・実験を通して自然の事物・現象を科学的に探究すること。具体的には、観察・実験の結果を根拠として仮説の妥当性を検討することにより、様々な知識がつながり、より科学的な概念が形成され、その概念が次の学習や日常生活などにおける課題の発見や解決の場面で働くこと。

## 2. 具体的な実践事項

- (1) 「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化
  - ・学習集団全体の課題意識を高めるために、適度な困難さを伴う課題提示を工夫したり、既習内容を科学的根拠として課題解決の見通しをもたせたりする。また、科学者の思考を追体験させることで、理科の見方・考え方を働かせながら、根拠を元に論理的に説明する力を育成する。
  - ・「問い直し」で根拠を示して科学的に分析・解釈する機会を設定し、自分の考えを整理したり、説明したりすることができるように、図やモデルなどのツールを工夫する。また、見方・考え方のカードを活用し、どの視点で「問い直し」をしたのかを可視化できるようにする。
- (2) ICTの三つの特質と対話の三つの方向性の明確化
  - ・ICTを活用し、実生活では見ることのできない視点を提示することで、知的好奇心を喚起したり、予想や仮説の妥当性の検討や他者の意見を批判的に思考したりすることにつなげる。
  - ・試行の繰り返しを行うことを目的に、観察・実験の過程や結果を画像や動画に記録し、より深い分析・解釈ができるようにする。
  - ・根拠をもとに科学的に分析・解釈する「問い直し」を設定し、互いに考えを広げたり深めたりしながら、集団での深い省察を促す。
- (3) 「深い学び（学習のねらいの達成）」を目指した、瞬時の判断と柔軟な展開
  - ・集団の課題意識を損なわせない瞬時の対応の変更や、科学者の思考を追体験させるような柔軟な授業展開で理科の見方・考え方を働かせながら、課題解決に導く力を育成する。

## 3. 学びのプロセス



#### 4. 理科で目指す子どもの姿

観察・実験の結果を問い直し、科学的な言葉や概念を使って考察することができる姿

#### 5. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	学ぶことへの興味・関心が高まっているか	子どもの実態に応じた資料を準備し提示する
		自分自身の経験と向き合っているか	生活体験や自然事象を想起させる手立てを行う
		学習のゴールをつかむことができているか	学習活動のねらいを自らつかむようにする
問 い 直 し	自 分 で 考 え る  他 者 と 学 び 合 う	自分自身の経験や学習状況を捉えられているか	仮説や予想など、模索する学習活動を設定する
		目的意識をもって観察・実験に取り組んでいるか	観察・実験で確かめる場を設定する
		生徒同士の対話を通じ、自己の考えを広げ深めているか	考察を交流させ、思考を広げ深める
振 り 返 り	ま と め る	考察どうしをつなげているか	考察や意見などを比較したり、関連付けたりする視点を示す
		学習活動の意味を感じられているか	実生活で生かせる場を設定する
		関心や意欲が一層高まっているか	本時の学習と次時の学習との関連を確認する

## I 今年度の音楽科の教科経営

## 1. テーマ・サブテーマと教科の特質

美的情操を働かせ、豊かな音楽表現を追究する ー知覚・感受を支えとして音や音楽を捉えていく学びを通してー	
特 質	音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音や音楽、言葉によるコミュニケーションを通して、美しいものや、優れたものに接して感動できる、豊かな心を養うこと。

## 2. 具体的な実践事項

## (1) ICTの三つの特質

- ・タブレットPCやデジタルコンテンツ（Flat education、ボーカロイド教育版など）を活用して、楽曲の仕組みや音の動きを視覚的に提示したり歌詞をそのままAIに歌わせて作品にしたりするなど、自らの表現や鑑賞の活動に生かすことができるようにする。
- ・他者の考えを共有して共感したり批評したりすることがより円滑に行われるように、瞬時にお互いの考えを共有して自分の考えをより深めることができるコラボノートを活用していく。

## (2) 対話の三つの方向性

- ・表現や鑑賞の学習を深めていく過程において、音楽に対する思いや意図、感じ取ったことや創造したことを音や言葉で伝え合う活動を大切にする。

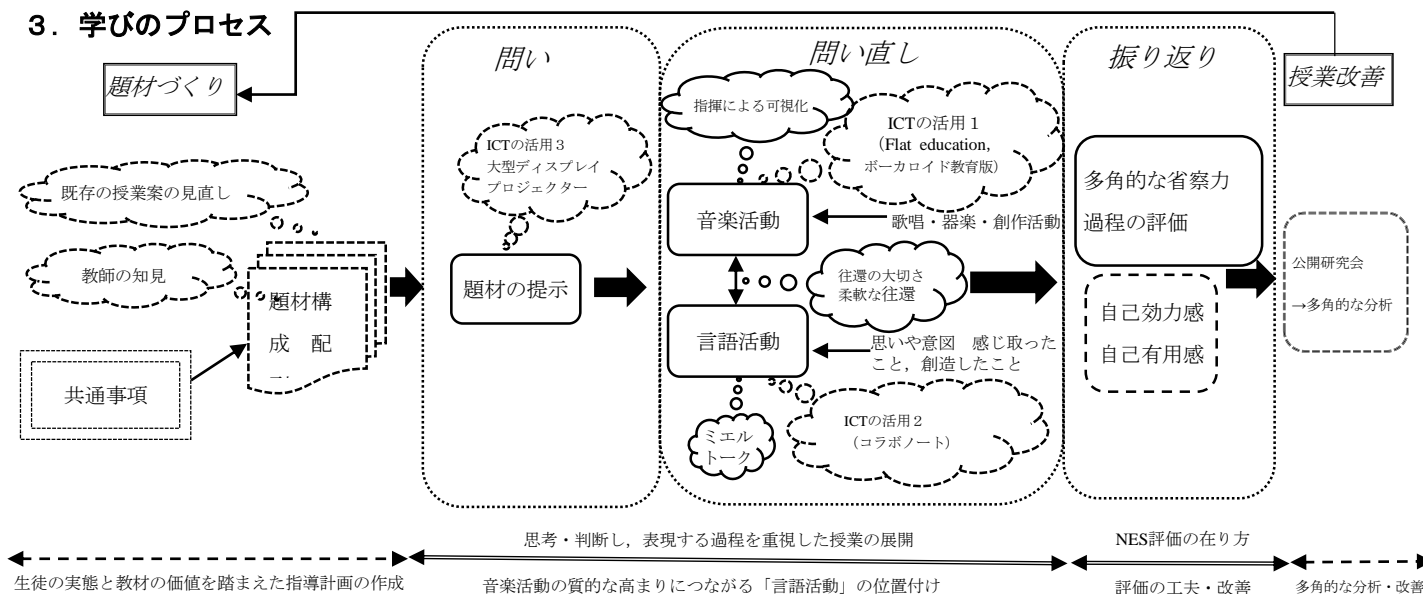
## (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

- ・音楽活動と言語活動の往還を柔軟に行い、状況に応じた即興的な授業展開を行う。

## (4) 日々の授業改善

- ・NES評価を用いて、学びに対する自己効力感や自己有用感を高める。
- ・附属校を中心とした公開研究会に参加し、自校の授業を多角的に分析することで、誰がやっても効果的な実践を探る。

## 3. 学びのプロセス



## 5. 音楽で目指す子どもの姿

知覚・感受を支えとして音や音楽を捉えていく学びを通して、豊かな音楽表現を追究しようとする姿

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問い	見 通 し を 立 て る	<p>学ぶことへの興味・関心が高まっているか</p> <p>自分自身の経験と向き合っているか</p> <p>知識や技能が定着しているか</p>	<p>子どもの実態に応じた題材を準備する</p> <p>今までの音楽活動を想起させる手立てを行う</p> <p>本時の学習に関連する表現や技能の確認を行う</p>
	問 い 直 し	<p>自分自身の経験や学習状況を捉えられているか</p> <p>目的意識をもって表現や鑑賞活動に取り組んでいるか</p> <p>生徒同士の対話を通じ、自己の考えを広げ深めているか</p> <p>考えや思いを基に、美的意識を大切に表現しようとしているか</p>	<p>音楽活動と言語活動の往還の場面を考え、学習活動を設定する</p> <p>目標とする表現の達成度や鑑賞活動の到達点を明確化する</p> <p>お互いの考えを共有することを通して、より豊かな表現や鑑賞活動につなげる</p> <p>お互いの学びの成果を学級全体で共有する表現活動を設定する</p>
	振 り 返 り	<p>学習活動の意味を感じられているか</p> <p>関心や意欲が一層高まっているか</p>	<p>既習の活動と照らし合わせて、感性がいかに関ぎ澄まされたか自己評価する</p> <p>本時の学習と次時の学習との関連を確認する</p>



## II 具体的な実践事項について

### ICTの三つの特質

- ・タブレットPCやデジタルコンテンツ（Flat education、ボーカロイド教育版など）を活用して、楽曲の仕組みや音の動きを視覚的に提示したり歌詞をそのままAIに歌わせて作品にしたりするなど、自らの表現や鑑賞の活動に生かすことができるようにする。
- ・他者の考えを共有して共感したり批評したりすることがより円滑に行われるように、瞬時にお互いの考えを共有して自分の考えをより深めることができるコラボノートを活用していく。

### ①2、3年 「詩のイメージに合った歌をつくろう」

#### ・実践内容

今年度は「詩のイメージに合った歌をつくろう」という題材で、創作活動を2、3年生で行った。2年生は、グループでの活動、3年生は、個人での活動で進めた。自分たちで工藤直子、谷川俊太郎、金子みすゞの詩集から気に入った詩を選び、その詩の一節を用いて、詩のイメージを基に歌を創作するという活動を行った。その際、生徒各自のタブレットにボーカロイド教育版を導入し、それを活用して作品の作成を行った。

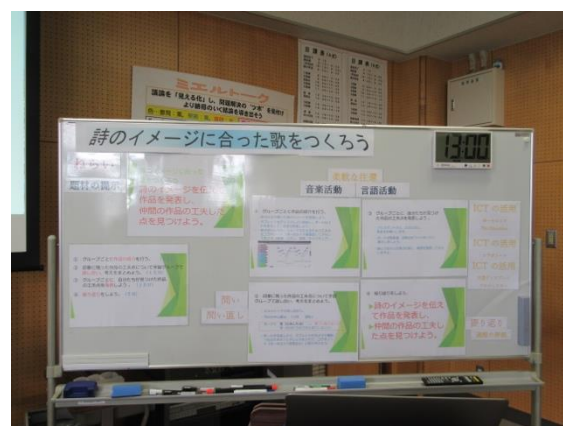
ボーカロイド教育版は、ヤマハが開発したボーカロイドのソフトを基に、操作を簡易化し、楽譜の知識や音楽経験に乏しい人でも、気軽に創作活動に取り組むことができるようにしたソフトウェアである。自分が歌わせたい歌詞や旋律を入力することで、ボーカロイドが実際に歌ってくれる機能が特徴である。

また、本題材では昨年度より導入したコラボノートも活用した。各自が選んだ詩の歌詞や感じ取ったイメージを入力して全体で共有した。あるいは、従来から本校で取り組んでいるミエルトークの活動を行い、ホワイトボードに書いた内容をタブレットのカメラで撮影し、その画像データをコラボノートに貼り付けることで、全体で考えを共有した。

そして、作品に関しては、Teams<sup>1</sup>に各グループが投稿することで互いの作品を聴き合い、自由に意見を述べ合うことができたようにした。

#### ・教育的効果の検証

ボーカロイド教育版の活用に関しては、歌を創作するために超えなければいけないハードルの高さを低くすることに大いに貢献したと考えられる。根拠は、全てのグループにおいて作品を完成させることができたということ。作品の完成度も、自由な創作活動の中で、反復や変化を考えている作品になっていたこと。詩のイメージと合わせた伴奏の選択や旋律やリズムの工夫がしっかりと反映されていたこと。あるいは、昨年度取り組んだ順次進行や跳躍進行、音域の選択を意識して旋律の流れを考えていたことが、各グループの作品から推察される。

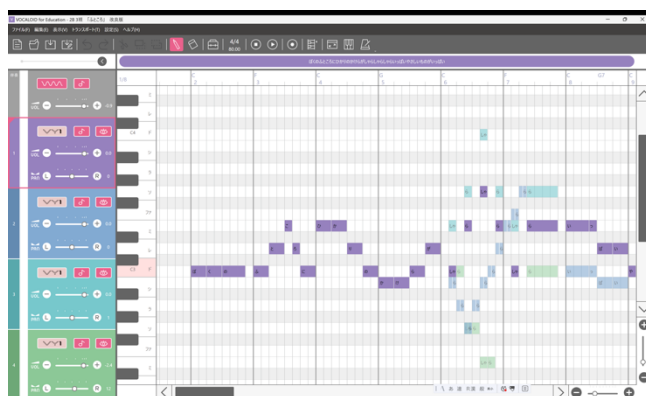
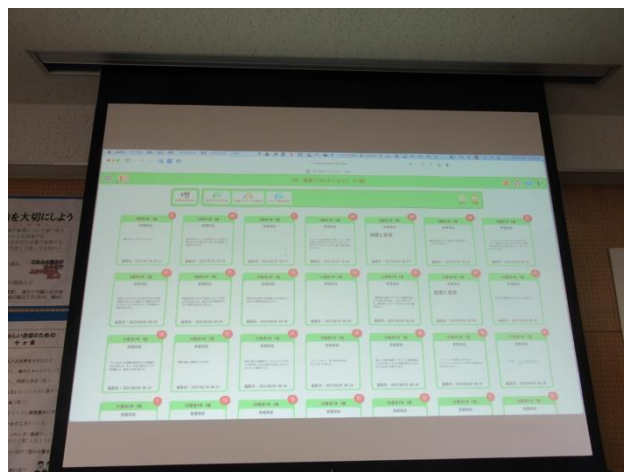


<sup>1</sup> マイクロソフトがWindows、macOS、Linux、iOS及びAndroid向けに開発・提供するコラボレーションプラットフォームのこと。

また、五線という楽譜上でなく、ブロックを用いた入力画面の形式も、創作への取り組みやすさに大きく貢献していたと考えられる。生徒の感想からの引用であるが「私は音楽の知識が全くないけれど、ボカロのアプリがとても使いやすくて夢中になって作業を進めることができました。」「初めてボーカロイドのソフトを操作したが、入力の方がとても分かりやすくて楽しかった。また、ハモリの音を教えてくれるのは本当に便利だと思ったし、できることが増えそうだった。」「初めてボーカロイドに触りましたが、思っていた以上に操作はシンプルで驚きました。楽器が弾けなくても、音程さえ合わせれば誰でも簡単に曲を作れるのが魅力的だなと思いました。」などの振り返りからも、ボーカロイドを使うことで、より自分の伝えたいイメージを考えながら、歌をつくることに没頭することができた生徒が多かったと推察される。特に、楽譜に苦手意識をもっている生徒にとっては、大変効果的であったと考える。そして、今回ボーカロイド教育版をつかって最も創作活動の幅を広げたのは、生徒たちの振り返りの中にもあったように、旋律を重ねてつくることが容易なことと考えられる。これは、ボーカロイド教育版を使った創作活動の大きな効果であると考えられる。旋律を重ねてきれいに響かせることは、紙の五線上のみで行うとすれば、和声の知識や音感をもっていないとなかなかできないと推察される。もし、ボーカロイド教育版でなければ、五線を使って鍵盤楽器で音を鳴らしながら創作活動を行う活動が想定される。単旋律は創作することができるかもしれないが、和音の構成から協音程を考え複数の旋律を考えていくことは、大変困難だと推察される。しかし、ボーカロイド教育版を使うことで、和音の音を上手く使いながら、旋律を容易に考えることができた生徒が多かった。それは、生徒の作品が実証している。生徒達の作品は、単旋律で仕上げた素晴らしい作品もあるが、複数の旋律を重ねて仕上げている作品が多々見受けられた。中には、女性と男性の声に分けて互いの旋律が掛け合うような曲や、それぞれのパートが独立して動き、合唱を作り上げている高度な作品もあった。生徒たちも、このハモリをつくったり他の旋律との掛け合いを考えたりすることが大変面白く感じていると推察する。生徒の感想からの引用であるが、「和音を使ってきれいな音色を出せました。」「伴奏が短かったけれど、パートを重ねてすべての歌詞を歌わせることができた。重なりがきれいになるようにつくることができた。歌詞の意味を考えながらつくるのが楽しかった。」これらの感想からも、旋律の重なりを考えて創作できたことが、創作活動をより楽しく、学びの深さにつながる活動になったと推察される。ICTの三つの特質で考えるならば、「思考の可視化」「試行の繰り返し」に当てはまるであろう。

コラボノートの活用については、互いの考えを瞬時に確認でいることが効果的であった。また、その記録はデータとして残るので、次の時間確認もできる。作業が遅れてしまって、その場で確認できなかった生徒は、後日確認できることも利点であると考えられる。

Teamsに作品を投稿することで、より短い時間で多くの作品を聴き合って感想や意見を共有することも効果的であった。特に、3年生は各自が曲をつくったこともあり、一人一人発表する時間を取ることは、大変長い時間をかけなければならない。それを、Teamsを利用することで、少しでも短い時間で互いの曲を共有することが実証できたと考えられる。ICTの三つの特質で考えるならば、「瞬時の共有化」「思考の可視化」に当てはまると



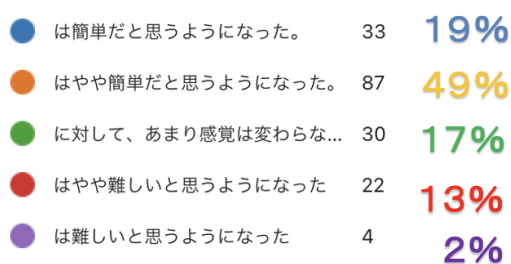
推察する。

最後に、3年生にアンケートを検証してみる。質問は、「ボーカロイド教育版を使ってみて、ボーカロイドを使う前より創作が簡単だと思うようになったから、難しいと思うようになった」を5段階にして、回答を得た。その結果、「簡単だと思うようになった」が19%、「やや簡単だと思うようになった」が49%、合わせて68%が以前よりも創作のハードルが下がったことになると考えられる。「以前と変わらない」が17%、「以前よりやや難しいと思うようになった」が13%、「以前より難しいと思うようになった」が2%、合わせて15%は以前よりハードルが高くなったと考えられる。

この結果から、ICTの活用、とりわけこのボーカロイド教育版の活用は多くの生徒に創作のハードルを低くする効果があったと推察される。

#### 4. ボーカロイド教育版を使ってみて、ボーカロイドを使う前より創作

##### 詳細



ハードルが低くなった 68%

ハードルが高くなった 15%

## ②自己評価のICT機器活用

### ・実践内容

昨年度から自己評価におけるICT機器の活用を行っている。今年度は、Formsを使った集計と一覧化に取り組んだ。入力、各生徒のタブレット端末を通して行う。生徒は、毎時間の振り返りをForms<sup>2</sup>上で記入して提出する。それらの提出を教師側で一元化し、全体で共有できる形で行った。生徒は、いつでも自分の振り返りを確認できる。また、仲間の振り返りも参考にして、どのような学びがあったのかを確認することができるようにした。

10月20日	10月28日
この日は、一回聞いたことがある気がするので、物語は考えやすかった。『でも、私の考えが持っているのはわからないけど...』でも、『何が面白いこと、面白いこと』を教している曲とは理解できた。	自分の予想では、最後、父が息子どちらかが不幸な目に合うと予想していたがまさか息子が死んでしまうとは思っていませんでした。『魔王の考え方リズムと音でうまく表現されているな』と思った。
音楽だけを聞いて物語を考えるというのは初めてだったけど、とても面白いなと思いました。自分なりに考えをまとめることが出来たので良かったです。来週以降の授業も楽しみです。	
今日はことばのわからない曲について読み取ることができました。なんとなく、ドラゴンクエストのような、ファンタジーの曲から主人公を導き出すような曲、と思いました。	『魔王』という曲を聞いて思ったよりももっと素晴らしいお話をしました。言葉がわからないうちからいろいろな曲のイメージが湧いてくる感じが良かったです。『魔王』という曲のイメージが湧いてくる感じが良かったです。
ドイツ語の音楽は、初めて聞いたのでとても面白かったです。1度だけドイツに行った時があるけど全然知らない単語がいっぱい出てきてびっくりしました。	知っているドイツ語が意外なところで使われていた。それに最後の息子の言葉が予想していたのと少しずれていて驚きました。
聞き取れない言語でも想像すると、なにを話しているかわかってくる。	わからない言語で話している曲などが出てくる。お話を想像することができると分かった。
今日はシェンベルクの魔王を聞き曲からしっかりと物語の感じることができました。	今日の授業では曲から魔王の登場人物を読み取ることができました。登場人物の行動に合わせて曲もへんかしていきながら聞いていました。
分からない言語で歌われている曲から物語を想像するのがとても難しかったです。でも、分からない言語だからこそ本当の『物語』が聞き取りやすかったと思いました。言葉がなくても音だけで物語を想像できるように耳と想像力を鍛えたいです。	歌や曲でそれぞれの曲のイメージがわいてくる感じが良かったです。ただ歌詞を読むのと比べて、曲やメロディーを付けて歌うのでは物語の伝え方が全然違うのではなかなと思うので音楽の効果は偉大だと感じました。

### ・教育的効果の検証

自分の振り返りを確認できることは今までと同じであるが、仲間の振り返りを参考にして、互いがどのように考えているかを確認することで、様々な学びがあったことを吸収できることが成果で

<sup>2</sup> Office 365が提供する、アンケート作成ツールである。このアプリでは、教師が問題やテストなどを作成し、作成したデータや回答してデータをMicrosoft Excelにエクスポートすることができる。



59



合う場面になったと推察される。

### ※課題と改善策、今後への展望

課題としては、作品の完成を通して、次にどのような活動につなげていくかを明確化することである。ボーカロイドは大変興味深いものであるが、そこに更なる表現を求めるとすれば、実際に歌ったり演奏したりする活動が伴わないとできないと考えられる。本格的なボーカロイドであれば、もう少し作品の表現を深めることはできるかもしれないが、ボーカロイド教育版ではあくまでも機械的な歌い方のみで、それ以上の表現は難しいと考えられる。創作としての表現の可能性はあるが、音楽本来がもつ音の美しさや豊かな表現という点では、物足りないと推察される。本題材の活動を通して、さらに創作の内容を深めていくのであれば、本ソフトの更なる活用もあるだろうし、更に別のICT機器を活用した可能性を探っていくことが必要であると考えられる。あるいは、表現としての可能性を追究するならば、表現活動とのリンクといったことも視野に入れることが必要であると考えられる。いずれにせよ、今後どのような視点を関連付けて学習計画を練っていくかが課題であると推察される。

もう一つの課題は、キーボードを使って文字を入力するスキルに個人差があることである。本校のように生徒が持っている端末がキーボード入力主体のものであれば、文字を入力する時にキーボードを使うことは必需である。しかし、生徒たちのキーボード操作は、基本独学で学んできた生徒が多いと考えられる。家庭でPCを触る機会が多くあり慣れている生徒は流暢に使うことができると推察される。しかし、そのような経験に乏しい生徒は、苦勞してキーボード操作を行わなければならないと推察される。当然、入力する速度にも大きな差がある。それは、言い換えると入力にかかる時間の幅が大きいということになる。授業の振り返りをICT機器で行う際は、キーボード入力になる。ある内容を5分でできる生徒もいれば、15分経っても同じ内容ができない生徒も出てくるということである。キーボードの操作を全ての生徒が同じ技量で使うことができるようにする方法を見いだしていくことが、今後の課題である。

### 対話の三つの方向性

- ・表現や鑑賞の学習を深めていく過程において、音楽に対する思いや意図、感じ取ったことや創造したことを音や言葉で伝え合う活動を大切にする。

### ・実践内容

各学年における歌唱活動「混声合唱の響きⅠ～Ⅲ」では、感染対策に留意しながら、歌唱活動を中心とした学習活動を行った。今年度は、芸術祭（合唱コンクール）も全校がそろった形で行うことができた。合唱活動では、パートリーダーを中心としたグループ活動が行われている。その中で、リーダーを中心とした学習活動が進められた。そこでは、まず自分達が目指す理想の響きを共有し、それを言葉で具現化して伝え合う活動を行った。また、練習を進めていく上で、録音した音を聴き直す活動を通して自分達の歌声がどのように変容していったかについて、随時リフレクションする活動を行った。言語活動と歌唱活動の往還が行われていたことになる。



## ・教育的効果の検証

本校の生徒は、音楽的な能力が高い生徒が多く、自主的に表現活動の取り組むことができる生徒が多い。パートリーダーを中心に、音取りの活動なども、自分達でキーボードを使いながらパートの音をしっかり確認して、覚えることができる。また、自らの表現したい思いや意図をしっかりもっている生徒も多く、それらを言葉で表しそれを基に音で表現するという活動、言い換えると言語活動と音楽活動の往還ができています。本研究の具体的な実践事項が実現できている。

## ※課題と改善策、今後への展望

課題としては、表現活動における歌唱活動を更に多く取り入れていくことである。新型コロナウイルス感染拡大防止対策として限定された表現活動が少しずつ緩和され、以前の様な活動が少しずつ戻ってきている。表現活動の中での歌唱を、以前のような形に戻していくことが今後の課題である。マスクを外した歌唱活動は、まだしばらく先であることは推察される。しかし、早く生徒たちが生き生きとした表情を互いに共有して歌うことができる日が来ることを願ってやまない。

## 瞬時の判断と柔軟な授業展開

- ・音楽活動と言語活動の往還を柔軟に行い、状況に応じた即興的な授業展開を行う。

## ・実践内容

### 1、2年生「アルトリコーダーに挑戦しよう」～リコーダーの達人になろう～

## ・実践内容

新型コロナウイルス感染拡大防止対策の中、数年間行うことがなかったリコーダーを使った器楽の授業を、今年度は1、2年生で実施した。生徒たちは、小学校の時にソプラノリコーダーを演奏した経験はあるが、高学年ではほとんど演奏しなかったもので、本当に久しぶりの管楽器体験になる。6時間ほどの題材計画を立てて教員が見本演奏を示しながら実習を進めていくが、生徒たちの演奏の状況をみながら内容を臨機応変に変更して授業を展開した。また、昨年度の箏の授業のように、ペアでチームを組むことで、お互いに言葉や音で教え合う姿が見受けられた。左手の運指だけを使った演奏は、ほぼ全員が体得することができたので、次のリコーダー実習では、右手も含めた運指を使った実習を行う。そして、最終的には自分たちでグループを決めて、楽曲を選んで演奏を楽しむ段階まで進みたい。

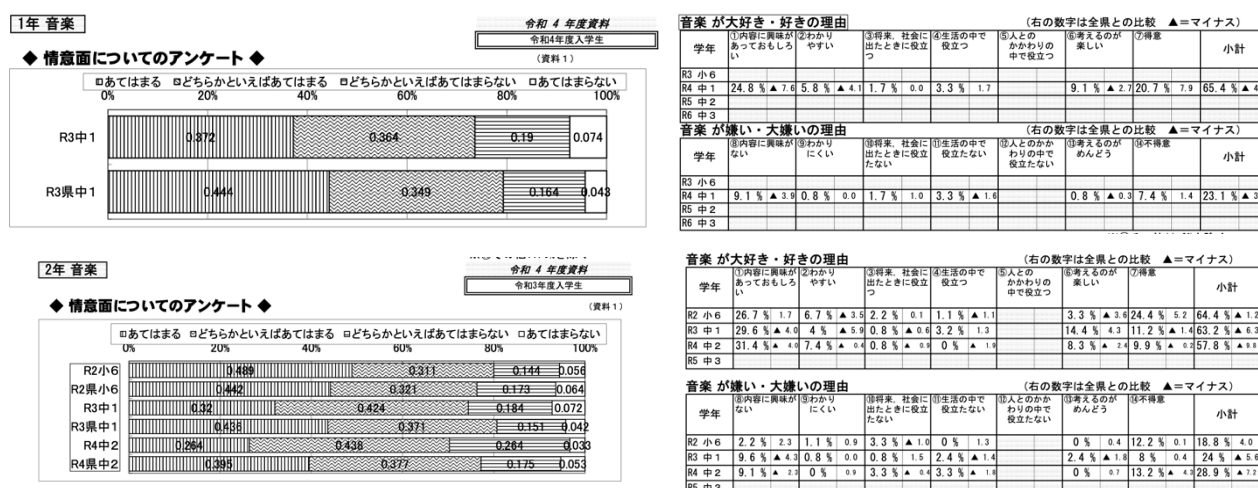
## ・教育的効果の検証

この授業では、生徒の演奏技能の取得状態を見極めて、臨機応変に授業を進めていくことが大切な点であり、その効果があってよりよい学びにつながったと考えられる。また、ペアを組んだ同士で、互いに言語活動と音楽活動の往還ができており、よりよい学びにつながっていると考えられる。本校の教育目標でもある「批判的思考力を磨く」ことにもつながっていると推察される。



### Ⅲ 生徒の変容について

今年度は、コロナ禍であったが少しずつ歌唱活動もできるようになってきた。どうやって表現の工夫や鑑賞の質を高めるかを常に課題として取り組んできた。その中において、コロナ禍における表現活動の一環として、創作活動を積極的に取り入れ表現活動の活性化を図った。また、ICT機器の活用にも力を入れ、それらを活用した創作活動を多く行うことで、新たな表現活動の可能性を追究してきた。それによって、創作活動で大きな壁となる記譜するというのに、抵抗をあまり感じないで授業に取り組む姿が見受けられた。また、自分の思いや意図をもって表現活動に一生懸命に取り組む様子も多くなることができた。しかし、表現や創作活動に抵抗を感じている生徒も見受けられた。「音楽に対する情意面に関する「令和4年度秋田県学習状況調査における生徒質問用紙の結果」は、次のようである。



#### 「1年」

好きな理由を「得意」と挙げた生徒が多く、県平均を約7%上回っている。反面、嫌いな理由に「内容に興味がなくない」を挙げている生徒もいる。表現活動と鑑賞活動のバランスが悪くなってしまったこともあり、感じ取ることや表現することに楽しさを見いだせない生徒がいることが考えられる。

#### 「2年」

嫌いな理由に「内容に興味がなくない」「不得意」を挙げている生徒がいる。知識として理解していても、感じ取ることや表現することに楽しさを見いだせない生徒がいることが考えられる。

#### 【結果からみえる来年度への課題】

##### 「1年」

今年度は合唱や器楽などの演奏体験が少なかったもので、なるべく表現活動の幅を広げ、リコーダーを使った器楽活動などの演奏活動を多く取り入れて、より生徒の興味・関心を引き出したい。そして、みんなで演奏を共有する体験から、感性を高め価値を見いだしていく題材構成を工夫していきたい。

##### 「2年」

鑑賞活動、あるいは創作活動において、音について心から向き合うことを面倒、不得意と感じている生徒がいることも否めない。鑑賞では、日本の伝統音楽をはじめ、世界の様々な音楽に心から向き合う題材設定をする。また、表現活動では、演奏体験をなるべく多くし、音を奏でる活動を通して感性を高めていく題材構成を工夫していきたい。

## IV 来年度の音楽科の教科経営

## 1. 本校の生徒の実態

音楽の授業に意欲的に向かう生徒が多い。特に歌唱活動では、楽曲の特徴に合った表現を考え、歌唱能力も高い生徒が多い。また、鑑賞活動では、知覚したことと感受したこととの関わりを考えて、楽曲の特徴を捉えようとする姿が見られる。昨年度は、創作活動にも取り組み、ボーカロイドを授業で使ったり、ICT機器を使ったりしながら一人一人の独創性を発揮して作品づくりに取り組むことができた。

課題は、新型コロナウイルスの状況が緩やかになる中、歌唱活動を中心として表現活動を活性化させることである。

## 2. テーマ・サブテーマと教科の特質

美的情操を働かせ、豊かな音楽表現を追究する ー知覚・感受を支えとして音や音楽を捉えていく学びを通してー	
特 質	音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音や音楽、言葉によるコミュニケーションを通して、美しいものや、優れたものに接して感動できる、豊かな心を養うこと。

## 3. 具体的な実践事項

## (1) 「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化

ー学びのプロセスを支える必要感のある「問い」につなげるー

- ・教師の知見を十分に生かして、題材で学ばせたいことは何か、そのために最適な教材曲は何か、そのためにどのような学習方法をとるかを明確にする。その上で、必要感のある「問い」を構想していく。

## (2) ICTの三つの特質と対話の三つの方向性の明確化

ー言語活動と音楽活動の柔軟な往還とICTの活用推進ー

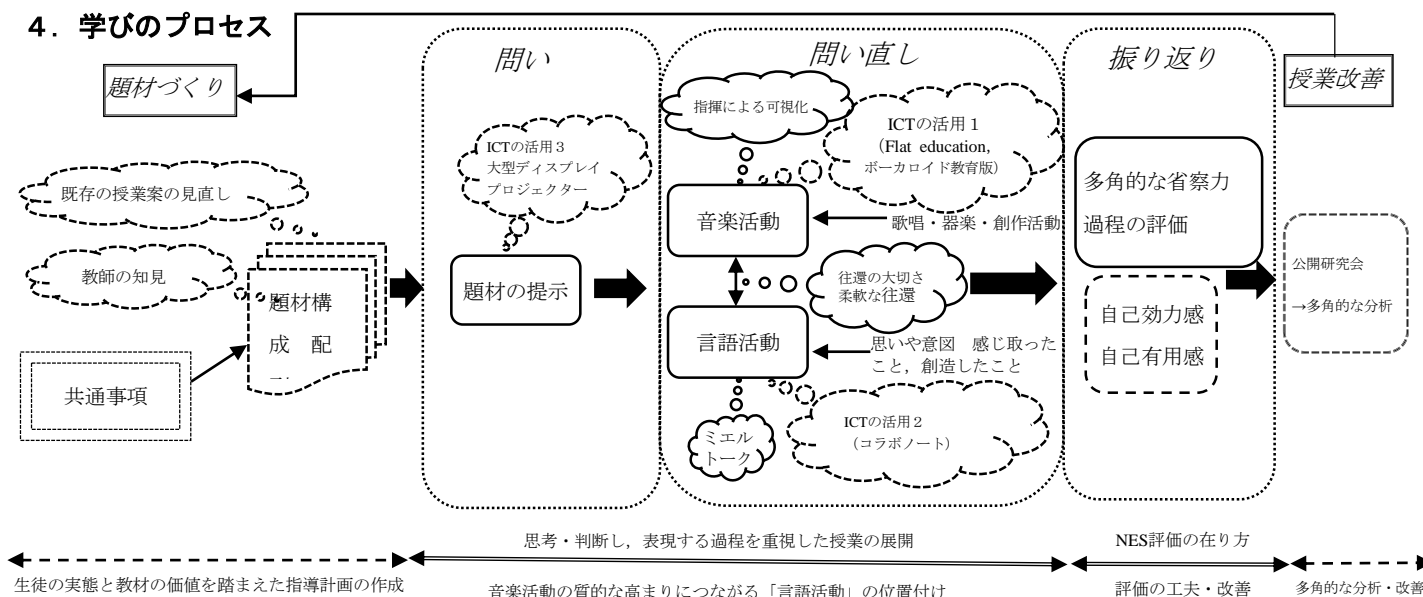
- ・表現活動における音楽活動と言語活動の往還を活性化させ、表現力の伸長につなげる。
- ・鑑賞活動や表現活動における知覚と感受の視点を明確にして、授業を展開する。
- ・ICTを活用したツールの特徴を生かし、より音楽活動の活性化や学びにつながる活用をする。

## (3) 深い学び（学習のねらいの達成）を目指した、瞬時の判断と柔軟な展開

ー生徒の状況に応じたフレキシブルな授業展開と計画の再構築ー

- ・歌唱活動において、各クラスの生徒の表現力に応じた授業計画を練り、状況によって即興的な授業展開をいれながら学習のねらいに迫る。

## 4. 学びのプロセス





## 5. 音楽で目指す子どもの姿

知覚・感受を支えとして音や音楽を捉えていく学びを通して、豊かな音楽表現を追究しようとする姿

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問い	見通しを立てる	<p>学ぶことへの興味・関心が高まっているか</p> <p>自分自身の経験と向き合っているか</p> <p>知識や技能が定着しているか</p>	<p>子どもの実態に応じた題材を準備する</p> <p>今までの音楽活動を想起させる手立てを行う</p> <p>本時の学習に関連する表現や技能の確認を行う</p>
	自分で考える	<p>自分自身の経験や学習状況を捉えられているか</p> <p>目的意識をもって表現や鑑賞活動に取り組んでいるか</p> <p>生徒同士の対話を通じ、自己の考えを広げ深めているか</p> <p>考えや思いを基に、美的意識を大切に表現しようとしているか</p>	<p>音楽活動と言語活動の往還の場面を考え、学習活動を設定する</p> <p>目標とする表現の達成度や鑑賞活動の到達点を明確化する</p> <p>お互いの考えを共有することを通して、より豊かな表現や鑑賞活動につなげる</p> <p>お互いの学びの成果を学級全体で共有する表現活動を設定する</p>
	振り返り	<p>学習活動の意味を感じられているか</p> <p>関心や意欲が一層高まっているか</p>	<p>既習の活動と照らし合わせて、感性がいかに関ぎ澄まされたか自己評価する</p> <p>本時の学習と次時の学習との関連を確認する</p>

## I 今年度の美術科の教科経営

## 1. 本校の生徒の実態

本校の生徒たちは学ぶ意欲や探究心が高く、知識を貪欲に求めていく姿勢がある。授業において他教科と関連付けながら学ぶことができるようにしたり、ICTを活用して様々な表現に取り組むことができるようにしたりすることで、視野を広げ表現力を高めることができる。一方で、物事への強いこだわりや失敗を怖れる慎重な一面もあり、その強い思いが美術の制作においてブレーキとなり、自己の思いを表現することに対して臆病になってしまっている生徒も見られる。

## 2. テーマ・サブテーマと教科の特質

思いを形や色彩で表現し、発信する －発見・ひらめき・共感が生まれる学びを通して－	
特 質	一人一人の個性を造形の力で社会とつなぎ合わせていくこと。具体的には様々な形や色彩などの造形と想像や心精神感情などの心の働きとを造形の要素を介して行き来しながら深めることを通して、漠然と見ているだけでは気付かなかった身の回りの形や色彩などの働きに気付いたりよさや美しさなどを感じ取ったりすることができるようにすること。

## 3. 具体的な実践事項

## (1) ICTの三つの特質

- ・課題や作品を効果的に提示したり表現の可能性を広げたりするためのツールとして活用する。制作のアイデアを練ったり編集したりする発想や構想の場面や作品を大型モニターやプロジェクターで映し出したりする活動などで活用する。
- ・作品の制作過程を毎時間撮影することで客観的な視点で作品を見つめ直す機会となる。また作品のプレゼンテーションを作成することで、個々のポートフォリオとなる。

## (2) 対話の三つの方向性

- ・主体的・対話的な話し合い活動から自分の思いや願い他者への気持ちあこがれなどの心情を明確にしながら独創的なひらめきが生じるようにする。

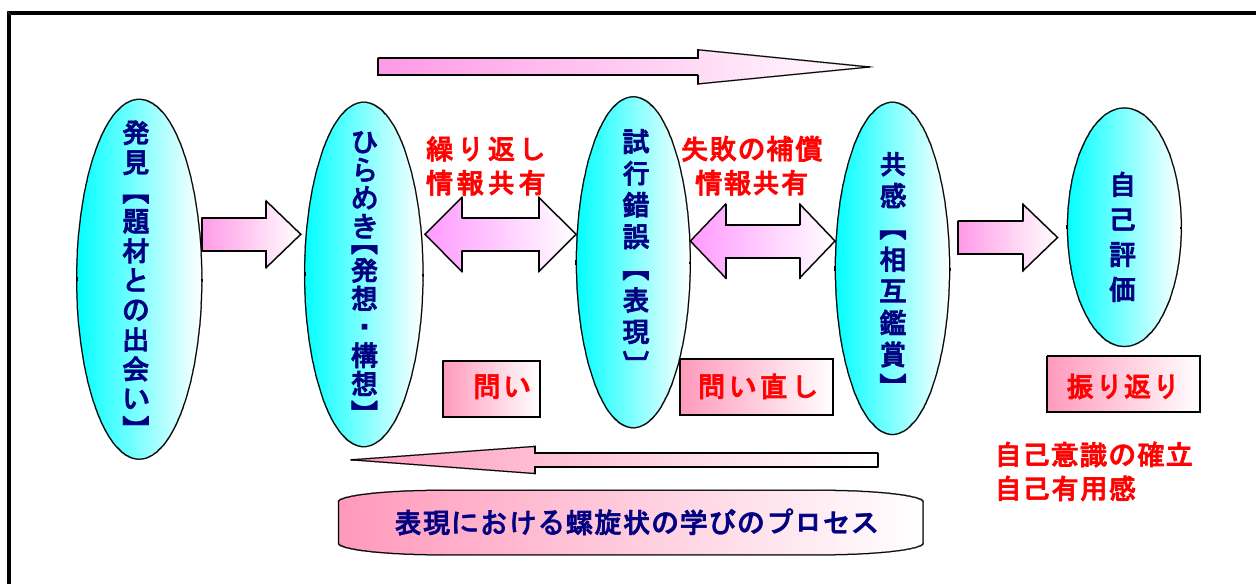
## (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

- ・魅力的な題材を開発し選択することで多様な表現や材料体験をし社会の中の美術や美術文化の世界を発見することができるようにする。

## (4) 日々の授業改善

- ・**発想・構想** ⇔ **表現** ⇔ **相互鑑賞** の学びのプロセスを行き来しながら学ぶことにより螺旋状に思考力・判断力・表現力が向上し自他の想像や心精神感情などの心の働きを感じ取り共感することができるようにする。

## 4. 学びのプロセス



## 5. 美術科で目指す子どもの姿

感じ取ったことや考えを基に試行錯誤し螺旋状に思考力・判断力を働かせながら表現する姿

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問	見 通 し を 立 て る	表現や鑑賞への興味・関心や意欲が高まっているか  自分自身の経験と向き合っているか  知識・技能などが定着しているか	子どもの実態に応じた題材の選択と材料や参考作品等の準備をし提示する  生活体験や自分を取り巻く環境や社会の中の様々な事象を想起させる  本時の学習に関連する既得の知識・技能等を確認する
問	自 分 で 考 え る	自分自身の経験値やスキルを認識し現状を捉えているか  追究課題が明らかになっているか  自分のよさや特徴を捉えているか  自分らしさを発揮しているか	発想やひらめき試行錯誤など自分で模索する学習活動を設定する  互いの思考・判断知識・技能や感性の違いを焦点化する  個々の思考・判断知識・技能や感性の奨励し価値付ける  思考・判断や説明・レポート等のよさや課題を計画的に把握する
直	他 者 と 学 び 合 う	学び合いの成果を伝え合っているか  感じ取ったことや考え思いを表現しているか	多様な意見や表現の多様性をつなぎ学習のねらいに迫る意図的な指名をする  学び合いの成果を集団で共有するために言語活動を行う
振 り 返 り	ま と め る	自分の進歩を捉え自己肯定感を高めているか  学び合いのよさを実感しているか  学習活動の意義を確かめているか	課題やめあてに照らした観点別評価や個人内評価を行う  互いの変容や学習の成果を認め合う相互評価を行う  教科で育む資質・能力に照らした自己評価を行う

## II 具体的な実践事項について

### (1) 発見・ひらめき・共感が生まれる学びを生む実践

1年生 「絵文字がしゃべりだす ～文字のデザイン～」

#### ■ 具体的実践

##### 1 タイトル文字からの発見

- (1) ドラマや映画のタイトル文字の鑑賞と考察
  - ・タイトル文字の形や色の役割や効果をミエルトークで考える。
  - ・社会の中における「文字のデザイン」の役割について考え、発表する。

##### (2) 身の周りの文字のデザイン

- ・いろいろな文字のデザインを発見する。
- ・自分の名前を、ソフトの機能を活用してデザインする。色や形、フォント（字体）を工夫して作成し、紹介する。

##### 2 明朝体とゴシック体で名前を書く

##### (1) 明朝体とゴシック体の特徴を発見

- ・代表的な書体である明朝体とゴシック体の特徴を知り、自分の手で、明朝体とゴシック体で自分の名前を書いてみる。

##### 3 テーマを設定し絵文字を作成する。

##### (1) 絵文字の発想・構想

- ・漢字の意味と関連付けて、様々な絵文字を発想する。（アイディアスケッチ）
- ・表現方法を選択する。（貼る、切る、描く）

##### (2) 絵文字を作成する。

- ・色画用紙、布、ひも、モールなどを貼ったり、クーピーやクレヨン、ポスカなど様々な画材を活用するなど表現方法を工夫する。



<タブレットを活用しての発想・構想>



<制作過程をミエル化するプロセスカード>

<生徒作品「絵文字」>  
「鶯の浸食」 「狭い」



「燕の巣」 「引くを引く」

#### ■ 検証と改善策

##### ○ 成果

- ・タブレットを活用することにより、表現の幅が広ると同時に時間短縮にもつながった。特にデザイン分野のように柔軟な発想を必要とする題材の際、タブレットは発想の助けとなる有効なツールとなった。
- ・作品をタブレットのカメラ機能で撮影し、ポートフォリオとして保存することで、自分の作品を客観的な視点で見直すことができ、その思考が作品のレベルアップにつながった。
- ・アナログ作業である手作業でのレタリングとタブレットを活用したデジタル作業の同時進行により、手作業の味わいや大切さを改めて実感することになった。

##### ○ 改善策

- ・発想や構想、表現と鑑賞、カメラ撮影とポートフォリオ編集などの時間の確保が最大の課題である。限られた時数での効果的な実践方法の検討が必要である。
- ・効果的な活用には「慣れ」も必要と考えられる。とにかく毎時間記録として撮影するよう習慣化したり、その都度加工技術や編集技術を紹介しながら実践を重ねていきたい。

<振り返り（コラボノートより）>

- ・レタリングは、全体のバランスを見ながら書くのが難しかった。
- ・その絵文字を一目見るだけで、意味を理解しやすいように工夫した。
- ・絵文字は、想像はできても実際に作ることは難しいと感じた。
- ・「兜」の漢字を兜の形にした。完成はできなかったが、デザイン（発想）はよかった。
- ・レタリングでは明朝体しか書けなかったが、文字のバランスの難しさを改めて知ることができた。また、漢字のそれぞれの意味を生かしてイラストにすると、改めて漢字の意味を理解することができた。
- ・絵文字では、漢字を自分で工夫して、発想力をもって描くことができた。
- ・文字のデザインなどは結構好きなので、授業があつて嬉しかった。絵文字、家で暇な時やろうかなと思った。
- ・漢字の意味を考えて、形を変えたりしたらうまくできたので良かった。

**2年生** 「心の模様を刻む ～抽象表現によるレリーフ～」

■ 具体的実践

1 抽象表現と具象表現を知る

- (1) 喜怒哀楽などの感情や目に見えない事象を、イメージして線、色、形で表現する。

2 表現テーマの設定とアイディアスケッチ

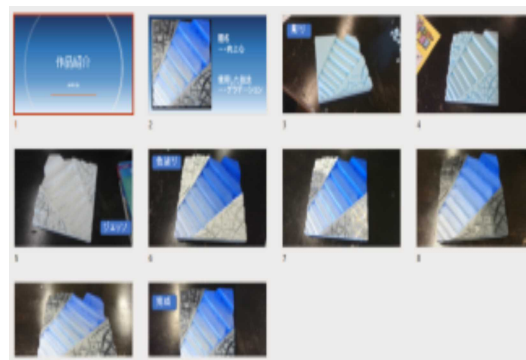
(1) 半立体の表現方法の実践

厚さ3センチのスタイロフォームをカッターを用いて、様々な形で彫ってみる。

〔薬研彫り、片切り彫り、菱合い彫りなど〕

- (2) 表現テーマを設定し、彫り方を考えながら、線と形でデザインし、レリーフの設計図を作成する。

<作品プレゼン（ポートフォリオ）>



表現テーマ「向上心」

<抽象表現レリーフ（生徒作品）>

◆ 表現テーマ

「ヘリテージ」

「銀河」



「おばけのじかん」

「夏の侵略」

3 レリーフ制作をする。

- (1) カッターの進入角度や深さに留意し、デザインに従ってカットする。
- (2) ジェッソ（地塗用アクリル樹脂絵の具）をレリーフ本体（スタイロフォーム）に塗り、表面を滑らかにすると同時に発色をよくする。

4 レリーフ作品のプレゼンテーションをする。

- (1) 作品テーマ（題名）とその設定理由を説明する。
- (2) 活用した表現技法や工夫、見どころを教科言語を用いて説明する。

5 質疑応答をする。

- (1) グループ内で話し合い、質問や意見を出し、考えをまとめ、発表者に質問する。

■ 検証と改善策

○ 成果

- ・プレゼンテーション後に質疑応答の場を設定することにより、双方向の対話的な学びが生まれた。また、授業後のコラボノートへの記入により、作品への思いや感動、考えや意見をシェアリングすることが可能となり、個々の視野が広がった。

○ 改善策

- ・制作時間の確保が課題である。カットに時間を要するので、作業手順や授業展開の工夫が必要である。



<振り返り（コラボノートより抜粋）>

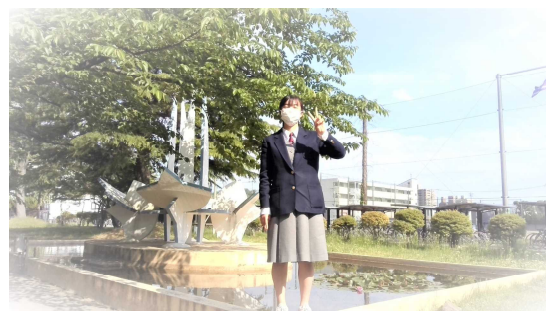
- ・最初は、あまりカッターを使っの作業に慣れなかったが、回数を重ねていくうちに慣れることができた。真ん中を目立たせるために周りを濃い青にした。
- ・円状にカッターで切るのがとても難しかった。色はその日その日で作った青で塗っているのによく見ると違うようにできてよかった。
- ・丸を彫るのが難しかった。なめらかな曲線は結構うまくできた。イメージと合うような色合いになったし、グラデーションもきれいにできたので、とてもよかったと思う。
- ・レリーフは、カッターで切るところが一番難しかった。シンメトリーを意識して、うまく作ることができてよかった。
- ・丸いところを彫るのが難しく、失敗したなと感じるところもあったけれど、色塗りなどの工程を重ねるうちに、それをカバーしたり、結果的にいい方向に働いたこともあったのでよかった。今回のレリーフでよかったところや改善点を、これからの作品作りに生かしていきたい。
- ・「天才」をモチーフにして、他の人が思いつかない作品を作ろうとしたら、思ったより良くなった。レリーフの形に捉われないで、色と形は別物として考えたら、絵みたいになった。
- ・自分の思いを色のテンプレートを使って表すことはこれまでもやっていたけれど、形や凹凸で表すという試みが面白かった。
- ・カッターでなめらかに彫っていくところが難しかった。でも、自分の力できちんと終わることができた。もう少し多くの色を使って合わせてみればよかったかなと思う。鑑賞も頑張りたい。
- ・友人の作品を褒めるためによく見ると、いいところがたくさん見つかりました。個人的に〇〇さんの作品が好きで、水色と光沢のバランスが良かった。
- ・オレンジと黄色のグラデーションでは、自然になるように色を調整しながら頑張った。一番頑張ったところは、右上のしずくのようなところで、なるべく滑らかになるようにした。
- ・彫るのが難しかったが、真っすぐに常に意識して彫った。色使いは、見ている人の目に留まるように、コントラストを使ったことで、メリハリのある作品となった
- ・やっていくうちにどんどんアイディアがわいてきて、とても楽しかった。
- ・彫り方によって、作品の見え方が変わって面白いと思った。失敗から生まれる成功を生み出したのでよかった。

### 3年生 「〇歳の自画像」

#### ■ 具体的実践

- 1 人物が大きく描かれた名画を鑑賞する。
  - (1) 自画像や肖像画を鑑賞し、描かれている人物の内面について考える。
  - (2) 外面ににじみ出る人物の内面性や一緒に描かれている物や背景に着目して絵を鑑賞する。
- 2 自分らしさを表現する自画像の構想を練る。
  - (1) 自分の外見的特徴を鏡で観察し、イメージマップを作成する。
  - (2) 自分の内面性を考えて、イメージマップに自分らしさを表す言葉を付け加える。
  - (3) 自分らしさを表現するための背景や服装、ポーズ表情、一緒に描く小物等を考える。
- 3 人体の比率を知る。
  - (1) 頭部と人体の比率とバランス、顔の目鼻、耳、口等の比率とバランスを知る。
  - (2) 比率に気を付けながら、自分の顔を実際に描いてみる。
- 4 アイディアスケッチする。
  - (1) 自画像作成のもととなる自分の写真を撮影する。
    - ・自分で撮影してもいいし、友人から撮影してもらってよい。また、カメラは使用せず、鏡をじっくりと観察しながら描いてもよいこととする。

<タブレット PC でのアイディアスケッチ>



※構想を練り屋外で撮影

- (2) スケッチブックに描いてもいいし、タブレットを活用して、写真映像を用いてのアイディアスケッチでもよいこととする。

## 5 自画像を制作する。

- (1) 様々な画材や表現技法を活用し、自画像制作をする。

小学校6年間と中学校での2年間で習得した、全ての表現技法を選択しながら活用する。様々な画材や表現技法を必要に応じて活用して描くだけでなく、タブレットPCによるデジタル加工やそれらをプリントしての活用など、表現の可能性を追究する。

<自画像生徒作品>



「僕だけが知らない僕」



作品テーマ「6年間の努力」

### レイアウト〔構成〕要素

- ・シンメトリー
- ・アクセント
- ・コントラスト
- ・ムーブメント
- ・リピテーション
- ・バランス、アンバランス
- ・グラデーション
- など

### 彩色表現技法

- ・混色
- ・点描
- ・にじみ
- ・コラーージュ
- ・重色
- ・線描
- ・ぼかし
- ・スタンピング
- ・グラデーション
- ・ドライブラシ
- ・スパッタリング
- など

### 描画画材

- ：水彩絵の具
- ・クレヨン
- ・ポスカ
- ・色鉛筆
- ・クーピー
- ・アクリルガッシュ
- ・水彩色鉛筆
- ・カラーペン
- など

## 6 自画像作品のプレゼンテーションをする。

- (1) 作品テーマ（題名）とその設定理由、どんな自分の姿を描こうとしたのか等を説明する。
- (2) 活用した表現技法や工夫、見どころを教科言語を用いて説明する。

## 7 質疑応答をする。

- (1) グループ内で話し合い、質問や意見を出し、考えをまとめ、発表者に質問する。
- (2) 予期せぬ質問にも、全て臨機応変に対応しながら、作品について肯定的に説明する。

## ■検証と改善策

### ○成果

- ・タブレットのカメラ機能を活用することにより、鏡では見ることのできない自分の表情やポーズを撮影し、画像として見ながら描くことができた。
- (後ろ姿や横顔、下向きの角度の顔やスポーツをしている動きのある空中姿勢など)
- ・スケッチブック上でのアイディアスケッチをできる限り省略し、タブレット画面上でのアイディアスケッチにすることにより、発想・構想時間の短縮にもつながった。また、多様な視点から自分を描くことができ、前年度と比較してより多様な表現が見られた。

### ○改善策

- ・今年度はタブレットの活用により、発想やアイディアスケッチの時間を短縮することができたが、さらに授業展開の工夫や効果的な資料提示により、制作時間の確保ができるのではと考える。

<振り返り（コラボノート、Teams より抜粋）>

- ・幼い頃、物語の世界に入りたいという夢があったから、好きなジブリ風にした。柔らかい色になるように塗り、背景はきれいな青空にしたい。自分らしさを出していきたい。ジブリの中でも、内気な主人公が新しい自分を見つけていくハウルの動く城が好きなので、自分も周りの環境にとらわれずに生きていきたいと思った。
- ・色を塗りながら自分の好きなものを付け足していきたい。服装に悩んでいるが、アンティークな感じにしたい。
- ・題名を「努力と思い出」にした。題名の設定理由は、3年間水泳の努力をし続けたと思ったからだ。その努力してきた中に思い出もあったし、自分の好きなゲームなどを仲間と一緒にやった思い出もあったので、「努力と思い出」にした。最初はプールの水だけを描いていたけれど、そのままではシンプルで絵が目立たなかったので、コースロープ（赤と青）を入れて絵が目立つように工夫した。
- ・将来について考える機会が増えた。そこで「時の流れ」を線路に見立てて描いた。
- ・部活動での努力を絵で表すことができたのでこの題名にした。
- ・工夫・頑張ったところは、にじみやグラデーションのところ。また、なるべく暖色で描いたり、にじみを使って表現したこと、光を反射しているような絵にしたことだ。見どころは、クラリネットの部分。
- ・本を読むことは、私にとって「自分探し」だという思いで描いた。本を読むことが現実逃避になったりマイナスになったりすることもあるので、二面性が伝わるような構図にした。
- ・自分の好きなものを描いて理想の一日を作った。こんな一日を過ごしたいと思った。
- ・「前髪の乱れは心の乱れ」という題名にした。見た目を気にするようになった心の成長を表現した。前髪が決まらない日は、一日中気分が上がらない女子特有の悩みを表現した。手前の私（前髪が決まって心が軽い私）と奥の私（前髪を直す私）に違いが出るように工夫した。
- ・まだ完成していない自分を表現したい。まだ完成していない自分自身の姿を、完成していないソフトやアプリに重ね、このような題名にした。しかし自分は、どのようになったら「完成」になるのかはわかりません。人間はどうかすれば「完成」になるんですかね。
- ・0歳から15歳までの成長の変化を絵に表したいと思った。成長の変化を対極に描いた。
- ・「家電」に対する熱い思いを認められ、敬愛するヤマダ電機様から自発的に暖簾分けさせて頂きたいなという思いが込められている。（絵のコンセプトにも合わせて）自分の好きな物や関心のあることにワクワクしている自分を表現した。作品の特徴の一つである、「広告」風を出すために、背景に実際の広告を貼り付けたこと（コラージュ）。広告もすべて家電等をはじめとした電化製品、機械製品で統一した。
- ・髪の毛をパステルで一本一本描いた。一本一本の微妙な色の違いや向きを丁寧に表し、髪に躍動感をもたせた。また、肌の色を部分ごとに濃さを変えた。微妙な影を濃淡で上手く表現することが出来た。

## (2) ICT の活用によるポートフォリオと鑑賞

### ○成果

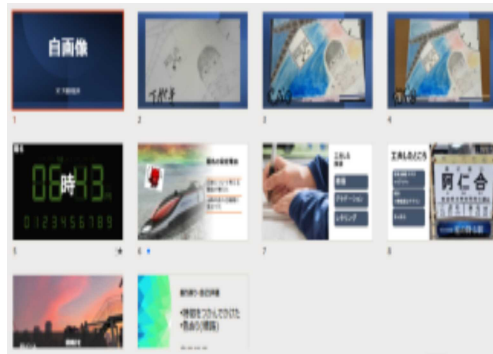
#### 発想や構想時間の短縮

昨年度から生徒一人一台タブレットを使用できるようになったことで、発想や構想場面における授業展開と鑑賞活動が大きく変化した。表現したい画像を検索したり、カメラ機能で自分で撮影した写真から発想したりと、想像以上のプラス効果があり、各学年に表現力の向上が見られた。

#### 自己肯定感の向上

絵画、工芸、デザイン等、どの制作においても、作品の制作過程を記録として残すことは大切なことである。自分の作品を客観的な視点で見ることができ、作品の構想を練り直すこともできる。また、作品を様々な背景で撮影することにより、自分の作品に愛着がわき、自己肯定感を高めることにもつながった。

### <作品プレゼンテーション（部分）>





作品プレゼンテーションをパワーポイント等で作成することで、言葉と作品のみでの発表よりも、より深く自分の思いや考えを具体的に伝えることができるようになった。そして簡潔に整理された思考が視覚化され、人生観までも感じられる双方向の鑑賞活動の場が生まれた。

### ○改善策

制作時間の確保が最大の課題である。作品作りと作品写真撮影、プレゼンテーション作成の3つを限られた時間内にこなすには、「慣れ」も必要となる。まだ不慣れな生徒おり時間を要したが、繰り返し実践することで、スピードアップにつながるものと考えられる。

＜アート加工によるコラージュ作品＞



あおばる  
「青晴 world」

### Ⅲ 生徒の変容について

各学年の振り返りや制作中のコメントを、「コラボノート」や「teams」で見ると、美術の制作を通して、表現力や発想力だけでなく、観察力や思考力を高めようとする記述が見られる。授業においても、作品プレゼンテーションで、美術用語を意図的に用いて説明しようとする姿が見られる。しかし、学力が高く知識を求めるあまり、正解が無く答えの出ない教科である美術を不得意とする生徒が、本校の生徒には多く見られる。

美術科に対する情意面に関する「令和4年度秋田県学習状況調査における生徒質問紙の結果」は次のようになっている。

### ○1年生 「美術の勉強は好きだ」

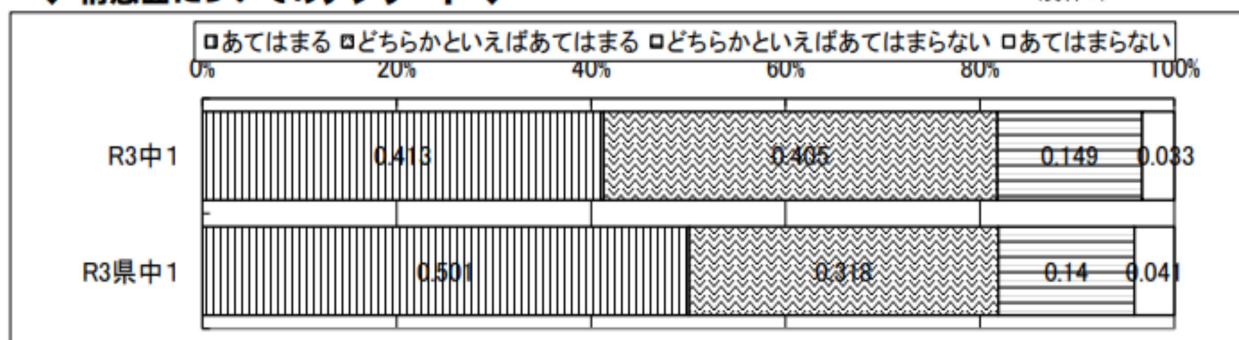
#### 1年 美術

令和4年度資料

令和4年度入学生

#### ◆ 情意面についてのアンケート ◆

(資料1)



#### 美術 が大好き・好きの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とのかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計
R3 小6								
R4 中1	26.4 % ▲3.9	8.3 % 2.6	2.5 % 0.7	3.3 % 1.3		26.4 % 3.0	9.1 % ▲3.7	76 % 0.0
R5 中2								
R6 中3								

#### 美術 が嫌い・大嫌いの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興味がなく	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役立つたない	⑪生活の中で役立つたない	⑫人とのかわりの中で役立つたない	⑬考えるのがめんどろ	⑭不得意	小計
R3 小6								
R4 中1	0.8 % 2.5	0.8 % ▲0.4	1.7 % 0.0	3.3 % ▲2.3		0.8 % ▲0.1	8.3 % 2.0	15.7 % 1.7
R5 中2								
R6 中3								

※⑮その他8.3%を除く



○ 2 年生 「美術の勉強は好きだ」

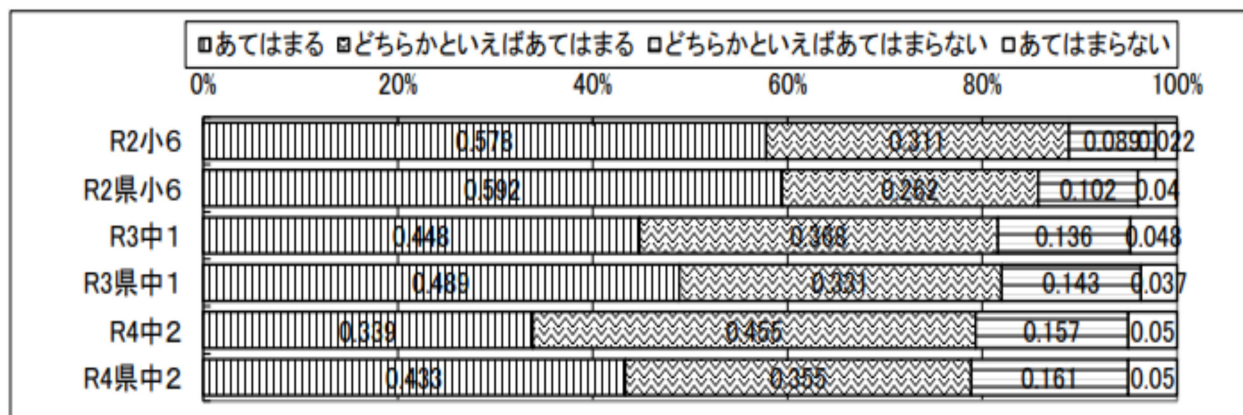
**2年 美術**

令和 4 年度資料

令和3年度入学生

## ◆ 情意面についてのアンケート ◆

(資料 1)



## 美術 が大好き・好きの理由

(右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)

学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人のかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計
R2 小 6	25.6 % ▲1.3	2.2 % ▲2.2	0 % ▲2.3	1.1 % ▲2.2		35.6 % 9.2	16.7 % 0.1	81.2 % 1.3
R3 中 1	32.8 % 2.3	2.4 % ▲3.3	0 % ▲1.6	0.8 % ▲1.7		32 % 10.7	8 % ▲4.5	76 % 1.9
R4 中 2	20.7 % ▲9.4	5 % 0.2	1.7 % 0.2	0.8 % ▲1.2		31.4 % 8.6	14 % 3.3	73.6 % 1.7
R5 中 3								

## 美術 が嫌い・大嫌いの理由

(右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)

学年	⑧内容に興味が無い	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役立たない	⑪生活の中で役立たない	⑫人のかかわりの中で役立たない	⑬考えるのがめんどろ	⑭不得意	小計
R2 小 6	1.1 % 1.0	1.1 % ▲0.7	2.2 % ▲1.2	0 % 0.6		0 % 0.9	6.7 % 1.6	11.1 % 2.2
R3 中 1	1.6 % 1.9	0 % 0.5	3.2 % ▲1.6	0.8 % 0.1		2.4 % ▲1.5	10.4 % ▲1.0	18.4 % ▲1.6
R4 中 2	1.7 % 2.8	0.8 % ▲0.1	1.7 % 0.1	1.7 % ▲0.5		1.7 % ▲0.8	14.9 % ▲3.9	22.5 % ▲2.4
R5 中 3								

※⑮その他4.1%を除く

上記の結果から、生徒のやる気を引き出す「題材の魅力」の大切さ、「社会の中における美術の役割」を考える必要性、そして美術を不得意とする生徒の心情面のケアがキーポイントとして読み取れる。「美術が不得意」という認識の生徒に、「正解も無いが失敗も無い」という感覚を、少しずつでも認識することができるような制作時のサポートや声掛け、授業展開の工夫が課題である。

○「①内容に興味があつておもしろい」	1 年 26、4%	2 年 20.7%
○「⑥考えるのが楽しい」	1 年 26、4%	2 年 31、4%

## 「考えるのが楽しい」

2 年生においては、「内容に興味があつておもしろい」という項目の数値よりも、「⑥考えるのが楽しい」という項目の数値が高い。これは、頭を使って考えるのが好きな附属中生ならではの結果と言えるかもしれない。いろいろと思考をめぐらせながら、作品の発想・構想に取り組んだり、どうやって自分の作品の魅力聞き手に分かりやすいように伝えるか、作品プレゼンテーションを作成したりする授業による成果と推測される。「分かりやすさ」「思考力」「社会に出たときに役立つ」「生活の中で役立つ」などをキーワードとして、題材設定、授業展開の工夫に取り組みたい。

## 「将来、社会に出たときに役立つ」「内容に興味があつておもしろい」

2 年生の「③将来、社会に出たときに役立つ」という質問に対しての回答が、昨年度の中 1 のときには 0 % であったが、1.7 % と上昇した。僅かな数値ではあるが、これは、大きな意識の変化ではないかと感じている。察するに、立体題材における制作においての様々な用具や素材の取り扱いの学習と、鑑賞活動におけるプレゼンテーションの成果ではないかと考えている。また、タブレット PC を活用しての、動画やデジタル加工と音声などを活用しての映像づくりと発表などの題材も、意欲を高めるきっかけとなったと思われる。

## IV 来年度の美術科の教科経営

## 1. テーマ・サブテーマと教科の特質

思いを形や色彩で表現し、発信する ー発見・ひらめき・共感が生まれる学びを通してー	
特 質	一人一人の個性を造形の力で社会とつなぎ合わせていくことである。具体的には、様々な形や色彩などの造形と、想像や心、精神、感情などの心の働きとを、造形の要素を介して行き来しながら深めることを通して、漠然と見ているだけでは気付かなかった身の回りの形や色彩などの働きに気付いたり、よさや美しさなどを感じ取ったりすることができるようにすることである。

## 2. 具体的な実践事項

## (1) 「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化

- ・発想・構想 ⇄ 表現 ⇄ 相互鑑賞 の学びのプロセスを行き来しながら学ぶことにより、螺旋状に思考力・判断力・表現力が向上し自他の想像や心精神感情などの心の働きを感じ取り共感することができるようにする。
- ・作品の制作過程の記録や制作過程の作品写真を、ICT 機器を活用しながら記録することで、自分の発想・構想、作品を客観的に見つめることが出来るようにする。視覚化された友人の発想や作品を見ることで、自己を振り返ることが出来、より効果的な 自己評価 となるようにする。

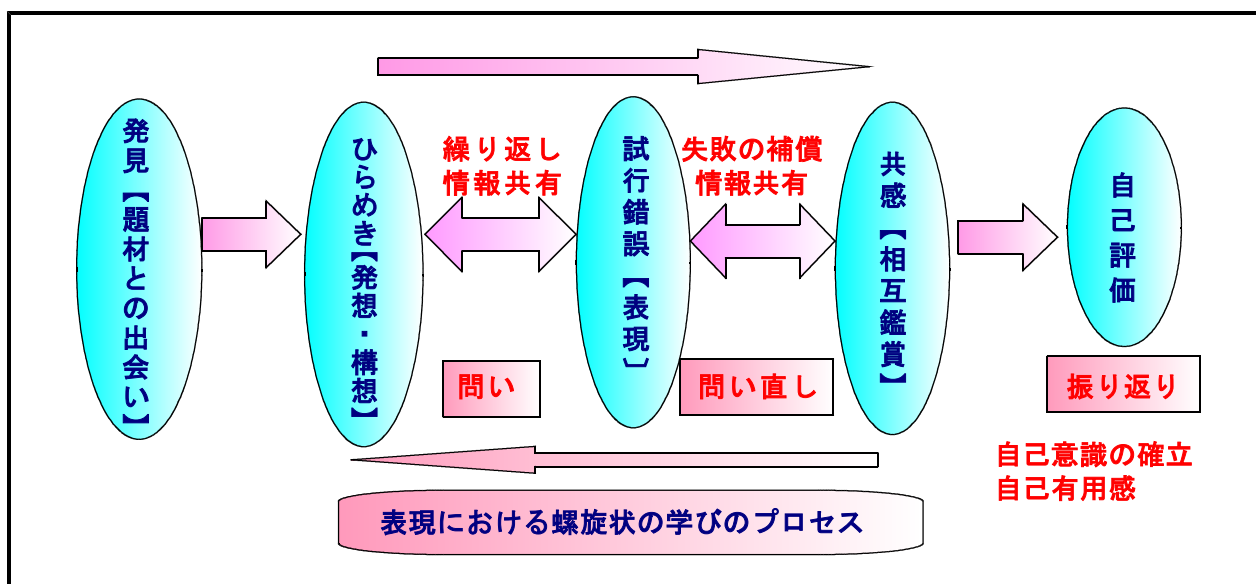
## (2) ICT の三つの特質と対話の三つの方向性の明確化

- ・課題や作品を効果的に提示したり表現の可能性を広げたりするためのツールとして活用する。制作のアイデアを練ったり編集したりする発想や構想の場面や作品を大型モニターやプロジェクターで映し出したりする活動などで活用する。
- ・作品の制作過程を毎時間撮影することで客観的な視点で作品を見つめ直す機会となる。また作品のプレゼンテーションを作成することで、個々のポートフォリオとなる。
- ・主体的・対話的な話し合い活動から自分の思いや願い他者への気持ちあこがれなどの心情を明確にしながら独創的なひらめきが生じるようにする。

## (3) 「深い学び（学習のねらいの達成）」を目指した、瞬時の判断と柔軟な展開

- ・魅力的な題材を開発し選択することで多様な表現や材料体験をし社会の中の美術や美術文化の世界を発見することができるようにする。
- ・生徒一人一人の「こだわり」を追究する授業展開の工夫、美術の得意不得意に関わらず、「考えるのが楽しい」「表現するのが楽しい」と感じることが出来るような授業展開の工夫に取り組む。

## 3. 学びのプロセス



#### 4. 美術科で目指す子どもの姿

感じ取ったことや考えを基に試行錯誤し螺旋状に思考力・判断力を働かせながら表現する姿

#### 5. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	表現や鑑賞への興味・関心や意欲が高まっているか	子どもの実態に応じた題材の選択と材料や参考作品等の準備をし提示する
		自分自身の経験と向き合っているか	生活体験や自分を取り巻く環境や社会の中の様々な事象を想起させる
		知識・技能などが定着しているか	本時の学習に関連する既得の知識・技能等を確認する
問 い 直 し	自 分 で 考 え る	自分自身の経験値やスキルを認識し現状を捉えているか	発想やひらめき試行錯誤など自分で模索する学習活動を設定する
		追究課題が明らかになっているか	互いの思考・判断知識・技能や感性の違いを焦点化する
		自分のよさや特徴を捉えているか	個々の思考・判断知識・技能や感性の奨励し価値付ける
振 り 返 り	他 者 と 学 び 合 う	自分らしさを発揮しているか	思考・判断や説明・レポート等のよさや課題を計画的に把握する
		学び合いの成果を伝え合っているか	多様な意見や表現の多様性をつなぎ学習のねらいに迫る意図的な指名をする
		感じ取ったことや考え思いを表現しているか	学び合いの成果を集団で共有するために言語活動を行う
振 り 返 り	ま と め る	自分の進歩を捉え自己肯定感を高めているか	課題やめあてに照らした観点別評価や個人内評価を行う
		学び合いのよさを実感しているか	互いの変容や学習の成果を認め合う相互評価を行う
		学習活動の意義を確かめているか	教科で育む資質・能力に照らした自己評価を行う

## I 今年度の保健体育科の教科経営

## 1. 本校の生徒の実態

運動すること自体が好きかどうかという点については、運動が得意かそうでないかということに起因する生徒が多い。その一方で、保健体育の授業が楽しいと感じている生徒は、得意・不得意に関係なく、関わり合いながら活動すること自体に充実感を得ている。「する・みる・支える・知る」といった運動への多様な取組によって、自分に合った運動との関わり方を見付けようとする姿が見られる。また、自分やグループの活動を様々な視点から振り返り、学習活動をとおして得られたことを互いに共有したり、伝え合ったりすることができる力がある。

## 2. テーマ・サブテーマと教科の特質

運動を「する・みる・支える・知る」楽しさや喜びを味わう - 仲間と共に、心と体の心地よさを体感できる学びを通して -	
特質	生涯にわたり楽しく明るい生活を営むことができるよう、運動を通して体力を養うとともに健康的な生活習慣を形成すること。具体的には、運動の楽しさや健康の意義などを実感できるよう、基本的な運動の技能や知識を確実に身に付けるとともに、それらを活用して、自他の運動や健康の課題を解決するなどの学習をバランスよく行うこと。

## 3. 具体的な実践事項

## (1) ICTの三つの特質

- ・自他の動きを客観的に見合い、考えを伝え合いながら課題に迫ることができるようにする。
- ・前時の振り返りによって本時との連結を高め、視覚的にも自他の実態やコツ、ポイント、既習内容をつかみやすくする。

## (2) 対話の三つの方向性

- ・グループ内や全体での振り返りの共有により、関わり合う力と多角的な省察力を鍛える。
- ・他者の様々な見方・考え方に触れ、自分たち考えについての問い直しを図る。

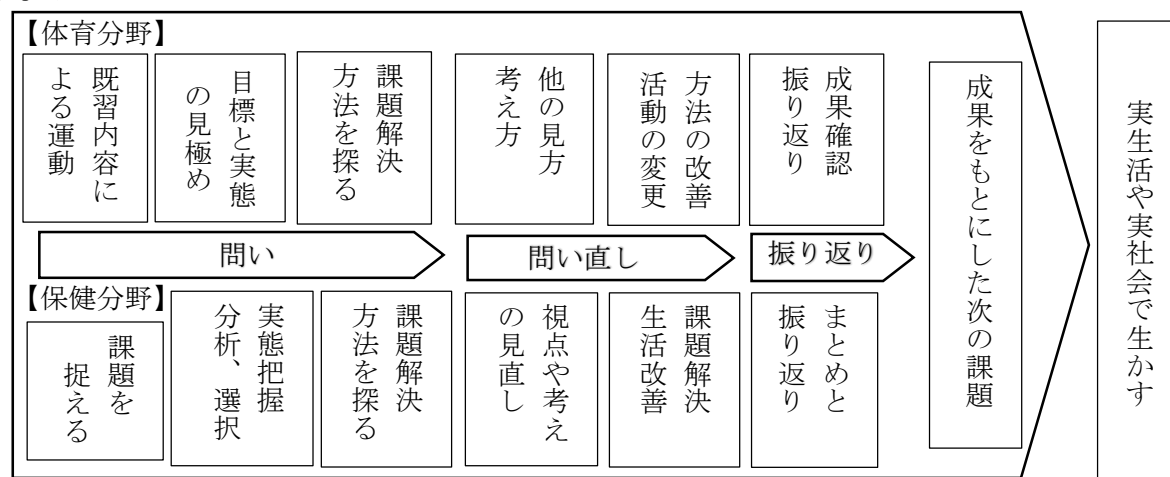
## (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

- ・活動の進め方やルールづくりなどにおいて、生徒自身の思考や判断、表現を取り入れる。
- ・グループや個における課題解決の取組や進捗状況を踏まえ、視点の共有や提示を行う。

## (4) 授業の再デザイン

- ・NES評価や振り返りを生かし、実態に即した目標を明示する。
- ・達成型ゲームやスモールステップ等により、前向きな振り返りができるようにする。
- ・健康と安全に気を配り、十分な運動量によってのびのびと活動ができる場をつくる。

## 4. 学びのプロセス





## 5. 保健体育科で目指す子どもの姿

仲間と共に、心と体の心地よさを体感し、言葉や運動で表現できる姿

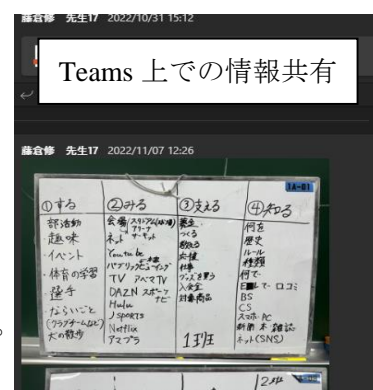
## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程	瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問い	見通しを立てる	
	互いに関わり合いながら運動を行い、知識・技能について確認できている。	前時と本時の学習をつなぎ、既習内容の確認ができるようにする。
	自分のことだけではなく、グループや全体の実態を把握できている。	前時の活動内容等をもとにして、それぞれができていることと課題としていることについて把握できるようにする。
	課題解決について具体的なイメージをもち、意欲が高まっている。	集団や個の実態を踏まえ、全体にとって適切な学習課題を設定する。
問い直し	自分で考える 他者と学び合う	
	自分を含めたグループの実態から課題について言葉や運動で表現している。	子ども一人一人と集団の実態や学習活動を確認し、瞬時の判断と柔軟な授業展開ができるようにする。
	具体的な視点をもちながら、互いに考えや動きを伝え合うことができている。	コツやポイントなどについて、具体的な言葉や運動で共有できるようにする。
	取組について考え直したり、他者の活動例を参考にしたりしている。	子どもの発言や運動例に触れる機会を設け、思考・判断等を揺さぶる問い直しを行う。
振り返り	まとめる	
	互いの変容や学び合いの成果を伝え合いながら、そのよさを認め合うことができている。	他者評価によって客観的な視点を与え合いながら、自分自身のことについて振り返ることができるようにする。
	集団全体で本時の成果を確認することができ、次時の活動に対する意欲が高まっている。	子ども一人一人やグループの活動について達成感や得られた視点を伝え合い、次時との関連性をもてるようにする。

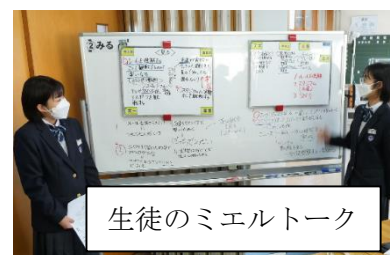
## II 具体的な実践事項について

### (1) ICTの三つの特質

学習活動を通して得た知識や生活経験、運動経験について、個人でしっかりと考える時間を確保した。個人の考えを明確にもった上で、ミエルトークを行い、多様な考え方について触れられるようにした。瞬時の共有場面としては、ミエルトークの話合い結果を Teams 上で各自がタブレット PC で確認できるようにし、自分たちの話し合い結果と見比べることができるようにした。それにより、生活体験等の違いによる情報不足を補うことにもなった。また、C-ラーニングでの事前のアンケートや振り返りにより、



自他の考えについて多角的・多面的な情報共有を行うことができた。自宅からZOOMで参加する生徒については、ダンスの練習場面においてグループメンバーのダンスの出来栄えについてコメントしたり、自らも音に合わせて一緒にダンスのパート練習を行ったりすることができていた。



生徒のミエルトーク

## (2) 対話の三つの方向性

「集団での省察」が効果的に進められるようにするために、生徒の実態や声を反映した学習課題を明確に提示しながら、個人のシンキングタイムと少人数対話の機会を確保した。また、ウォーミングアップタイムや実態に応じた学習活動による基本的な技能の定着、用語や動き方などの知識の習得を図ることで、話し合いをする際の基本的な材料を全員がもつことができるようにした。

また、「体育理論」における多様な関わり方の学習によって「する」以外の活動にも生徒が着目するようになり、活動を支えるような協力をする場面が多く見られたり、相手のよさを見つけて伝え合ったりするなどの「運動や話し合いで関わり合う」という姿が見られた。

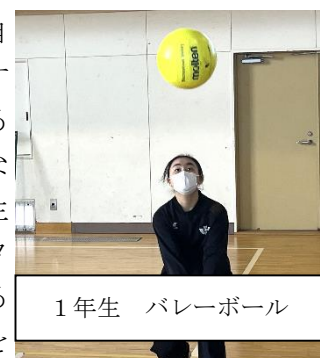
1A 10月31日(月) 振り返り文(運動の必要性和楽しさ)①		
no		
N (もっとよくしたいところがあった)	3.3%	
E (素晴らしい発見や活動ができた)	26.7%	
S (満足した活動ができた)	70.0%	
1	運動やスポーツにはたくさんの良さがあって健康だけでなく外見や顔、心もよくなるのが分かった。みんなにスポーツをしている人は上のように思われているのだから分かった。	
2	毎朝、登校するときに歩いている。休みの日は自転車に乗って色んな所に行くようにしている。運動量としては十分かと思えます。寒くなってくると運動量が減ってしまうので、どう維持していくか考えてみたいと思います。	
3	いつも運動をするスポーツをし	
4	運動をすることができた。また、	
5	運動に対してやる気を起こすことが難しいときもありますが、自分の体の健康のためやいざというときのためなどに少しでも体を動かしておくことが大切だと改めて分かったので、できることからやっていきたいと思いました。	
7	運動やスポーツをすることで嫌な言いことがあると知りました。これからは、たくさん運動やスポーツをしていきたいです。	
8	朝でも運動はしていただけど、「なぜ？」と聞かれると分からなかった。今回の授業で改めて、運動の大切さを知ること	

### Cーラーニングによる振り返りの共有

振り返りの場面においては、各運動領域のもつ特性とICTと紙媒体のそれぞれの利点を踏まえた上で使い方を選択し、コミュニケーションの活性化による「認知過程の外化」がスムーズに進められることを目指した。運動そのものが苦手であっても、教え合ったり支え合ったりする活動に楽しさを感じることで、保健体育に対してポジティブな情意面をもつ生徒が増加した。

## (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

生徒の考えや話し合い結果を生かした授業を展開することで、生徒が自分事として捉えたり、実生活への関わり方について具体的に考えたりすることができた。授業で提示した課題についても、学習活動状況による実態から修正を図ったり、課題に対する「問い直し」を行ったりするなどして、集団にとって有益な活動が進められるように心掛けた。1年生のバレーボールの授業においては、その実態からウォーミングアップタイムを多めにとり、ルールを決める際にもゲームを楽しむことができるように「ワンバウンドOK」等の今の自分たちに合ったものに自由度をもたせて自分たちで決めるようにした。それによって、ボールの接触回数が増え、以前よりも声を掛け合ったりし、歓声が響き合うことになった。そして、何よりも次は「〇〇をしたい」という生徒自らの主張も増え、自分たちの手で授業をつくろうという雰囲気の高まりにもつながった。



1年生 バレーボール

## (4) 授業の再デザイン

前時までの学習活動を取り入れたウォーミングアップを行うことにより、知識・技能の定着を図りながら、生徒にとって必要感のある課題を提示することができた。また、課題について自分で考える時間、グループや全体で考える時間を確保することにより、学習課題を自分事と捉えて学習活動に取り組むことができた。

観察やタブレットPCでの撮影等の客観的材料を基にして、視覚的に運動のコツやポイントなどを確認したり、互いの考えを伝え合ったりすることで、「わかる」「できる」きっかけにすることができた。望ましい人間関係が構築されている集団であることが、その充実した学習活動を支えている。授業における共通実践事項やマナーなどの徹底によって、生徒の学習がさらに主体的なものとなっている。



ダンス発表会より

## Ⅲ 生徒の変容について

「令和元年～令和４年度秋田県学習状況調査における生徒質問紙」における保体の情意面

(１・２年生)

(1)保健体育が大好き、好きな生徒の割合から ( )内数字は、前年度当該学年との比較

		R 4	R 3	R 2	R 1
小学 6 年	附属小		<b>84.6%</b>	<b>82.2%</b>	<b>88.4%</b>
	秋田県		83.0%	85.5%	87.0%
1 年生	附属中	<b>87.6% (+3.0)</b>	<b>78.4% (-3.8)</b>	<b>83.3% (-5.1)</b>	<b>81.6% (-13.6)</b>
	秋田県	85.9% (+2.9)	85.9% (+0.4)	85.2% (-1.8)	87.2% (-0.5)
2 年	附属中	<b>77.7% (-0.7)</b>	<b>80.0% (-3.3)</b>	<b>79.2% (-2.4)</b>	<b>86.0% (-1.4)</b>
	秋田県	85.4% (-0.5)	86.4% (+1.2)	83.8% (-3.4)	85.9% (-1.2)

(2)保健体育の情意面に対する理由

(○内数字は項目割合の多い順)

	大好き、好きな理由			嫌い、大嫌いな理由	
	1 年生	2 年生		1 年生	2 年生
得意	①35.5	②22.3	不得意	①11.9	①14.9
内容に興味があつて面白い	②20.7	①24.8	考えるのが面倒	② 9.1	0
生活の中で役立つ	③ 9.9	④ 6.6	内容に興味が無い	③ 0.8	② 4.1
考えるのが楽しい	④ 5.0	③11.6	わかりにくい	③ 0.8	0
将来、社会に出たときに役立つ	⑤ 4.1	⑥ 1.7	生活の中で役立たない	0	0
わかりやすい	⑥ 2.5	⑤ 4.1	将来、社会に出たときに役立たない	0	③ 1.7
人との関わりの中で役立つ	0	0	人とのかかわりの中で役立たない	0	0

「好き・嫌い」の小6と中1の比較では、附属小単独のデータと附属中（附属小＋公立小）の単純比較は難しいものではあるが、ここ数年の全体的な傾向としては減少が見られる。今年度の中1に関しては、87.6%という近年で最大の数値となり、前年度からは3.0%の増加となった。中2に関してはこれまで最大で-3.3の減少も見られたが、今年度は前年度比-0.7の77.7%と緩やかな減少傾向にとどめることができた。全体的には学年が上がる若干ではあるが、好きな割合は減少する傾向にあると言える。「好き」と「嫌い」を左右するものとしては、2学年ともに「得意」か「不得意」かという点が大半を占めている。その解消に向けては、知識・技能面の活動に偏ることがないように三観点のバランスをとりながらの学習内容を進め、課題について話合ったり関わり合ったりする場面等によって、「する、みる、支える、知る」といった多様な関わり方ができる生徒の育成に努めたい。そのために、自他の観察にICT機器の活用を加えた多面的・多角的な「みる」、友だちやグループでの関わり合いによる「支える」、動きのヒントや知識の習得による「知る」、などのような場づくりの継続を進めたい。それにより、運動を通して体力を養うとともに、健康的な生活習慣を形成し、生涯にわたり楽しく明るい生活を営むことができるようにしたい。

## IV 来年度の保健体育科の教科経営案

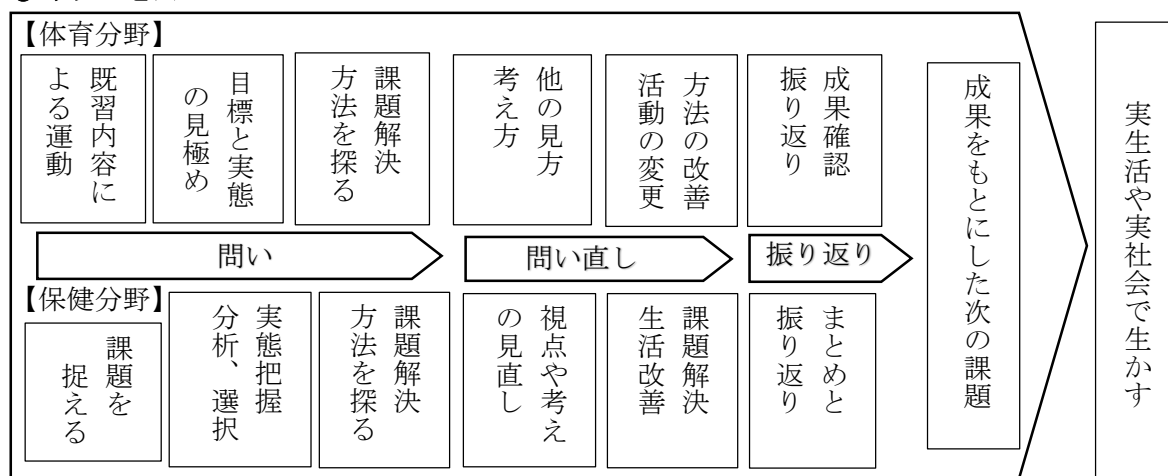
## 1. テーマ・サブテーマと教科の特質

運動を「する・みる・支える・知る」楽しさや喜びを味わう - 多様な関わりによって、心と体の心地よさを体感できる学びを通して -	
特質	生涯にわたり楽しく明るい生活を営むことができるよう、運動を通して体力を養うとともに健康的な生活習慣を形成すること。具体的には、運動の楽しさや健康の意義などを実感できるよう、基本的な運動の技能や知識を確実に身に付けるとともに、それらを活用して、自他の運動や健康の課題を解決するなどの学習をバランスよく行うこと。

## 2. 具体的な実践事項

- (1) 「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化
  - ・「問い」に対して自分の考えを明確にもてるように、基本的な知識・技能の定着を図る。
  - ・様々な見方・考え方に触れる機会を通して、「問い直し」を図りながら考えが深められるようにする。
  - ・NE S評価や振り返り等の生徒の声を生かし、実態を踏まえた必要感のある課題を明示する。
- (2) ICTの三つの特質と対話の三つの方向性の明確化
  - ・前時とのつながりをもたせ、コツやポイント、既習内容を視覚的にもわかるようにする。
  - ・自他の動きや考えを客観的に捉え、関わり合いながら課題に迫ることができるようにする。
  - ・グループ内や全体での思考の共有により、自他を認め合える支持的風土を醸成する。
- (3) 「深い学び（学習のねらいの達成）」を目指した、瞬時の判断と柔軟な授業展開
  - ・進め方やルールづくりなどにおいて、生徒自身の実態や思考・判断、表現を取り入れる。
  - ・運動への多様な関わり方を設け、自分に合った楽しみ方を見付けられるようにする。
  - ・生徒の健康と安全への意識を高め、運動量と関わり合いバランスよく保つ。

## 3. 学びのプロセス



## 4. 保健体育科で目指す子どもの姿

多様な関わりによって、心と体の心地よさを体感し、言葉や運動で表現できる姿



## 5. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問い	見通しを立てる	<p>互いに関わり合いながら運動を行い、知識・技能について確認できている。</p> <p>自分のこと、グループや全体の実態を把握できている。</p> <p>課題解決について具体的なイメージをもとうとしている。</p>	<p>前時と本時の学習をつなぎ、既習内容の確認ができるようにする。</p> <p>できていることと、課題となっていることについて把握できるようにする。</p> <p>集団や個の実態を踏まえ、全体にとって適切な学習課題を設定する。</p>
問い直し	自分で考える 他者と学び合う	<p>自分やグループ内において、課題解決に向けた言葉や運動で表現している。</p> <p>具体的な視点で、互いに考えや動きを伝え合うことができている。</p> <p>取組について考え直したり、他者の活動例を参考にしたりしている。</p>	<p>個と集団の実態と学習活動を確認し、柔軟に授業を展開する。</p> <p>コツやポイントなどについて、具体的な言葉や運動で共有できるようにする。</p> <p>生徒の発言や運動例を紹介しながら、思考・判断等を揺さぶる問い直しを行う。</p>
振り返り	まとめる	<p>互いの変容や学び合いの成果を伝え合いながら、自分たちの高まりを認め合うことができている。</p> <p>集団全体で本時の成果を確認することができ、次時の活動に対する意欲が高まっている。</p>	<p>他者評価によって客観的な視点を与え合いながら、自分自身のことについても振り返ることができるようにする。</p> <p>個やグループの活動により、達成感や得られた視点を伝え合い、次時との関連性をもてるようにする。</p>

## I 今年度の技術・家庭科の教科経営

### 1. 本校の生徒の実態

本校の生徒は、題材に興味をもち、実習や製作に意欲的に取り組む生徒が多い。家庭科では題材として、現在の生活の身近なものに焦点を当ててきた。その中で、題材や授業の単位で問い直しをさせることにより、単に知識や技能を習得するのではなく、その活用の仕方や実生活について考えを深めることができた生徒も多い。技術科では、「エネルギー変換に関する技術」の単元で、SDGsに向けての取り組みと、自分自身の未来の生活の双方をイメージしながら、課題に取り組めた生徒が多く見られた。また、家庭科では学びのプロセスを大切にしてきたことから、学習した内容と実生活の現状を関連させることができる生徒が増えたと感じている。

よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築につなげる題材を工夫するとともに、多くの場で生活や将来につながる実感をもたせていきたい。

### 2. テーマ・サブテーマと教科の特質

よりよい生活を工夫し、創造する ー実生活を検証・評価し、計画・実践する学びを通してー	
特質	生活や社会の問題を、実践的・体験的な活動から解決する力を養うこと。具体的には、実践的・体験的活動を通して、生活に必要な知識及び技能を身に付けさせ、生活や社会の中から問題を見いだして解決する力を養うことによって、現在及び将来にわたる実際の生活の場で学習したことを生きて働く力とすること。

### 3. 具体的な実践事項

#### (1) ICT三つの特質

- ・製作活動や実践活動の中で、ミエルトークを行ったり資料や手順の提示をしたりする際にICTを効果的に活用する。
- ・製作や栽培の過程を動画や静止画で記録したりするなど、生徒が学習の過程を記録出来るようなICTの活用を図る。

#### (2) 対話の三つの方向性

- ・ペアやグループ、全体などで実践的・体験的な活動の成果と課題を共有し、新たな気づきや理解の深化を促す検証・評価と修正・改善のサイクルを重視した授業を展開する。また、授業や題材全体を通しての問い、問い直しも重視する。

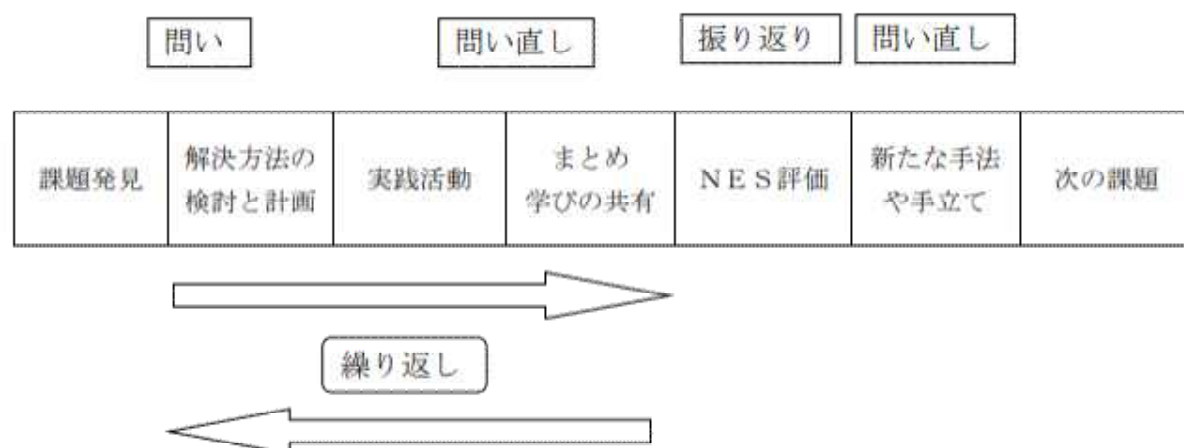
#### (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

- ・題材によって、生徒それぞれの興味や関心に応じて、技術科では既習事項を活用し、学びを深める場を設定する。家庭科では生活の課題と実践に取り組んだ成果を学級全体で共有し、更なる学びの深まりを生み出す。

#### (4) 授業の再デザイン

- ・学びのプロセスの終末部分においてNES評価を活用し、新たな手法や手立てを試み、さらによいものをつくりあげようとしている姿を見取り、生徒が実生活の場に生かそうとする行動につなげる。

#### 4. 学びのプロセス



#### 5. 技術・家庭科で目指す子どもの姿

教科の見方・考え方を働かせながら、問題解決に向けて他者と協働したり、意見を共有したりする中で、考えを広げ深めている姿

#### 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	学ぶことへの興味・関心が高まっているか  自分自身と向き合っているか  学習のゴールをつかむことができているか	子どもの実態に応じた資料を準備し提示する  生活体験や既習事項などを想起させる手立てを行う  学習活動のねらいを自らつかむようにする
	自 分 で 考 え る	追究課題が明らかになっているか	学習活動の目的や内容に応じた教材や教具等を提示する
	他 者 と 学 び 合 う	考えや思いをつなげることができているか	意見などを比較したり関連付けたりする視点等を明示する
振 り 返 り	ま と め る	学習活動の意味を感じられているか  関心や意欲が一層高まっているか	実生活で生かせる場を設定する  本時の学習と次時の学習との関連を確認する

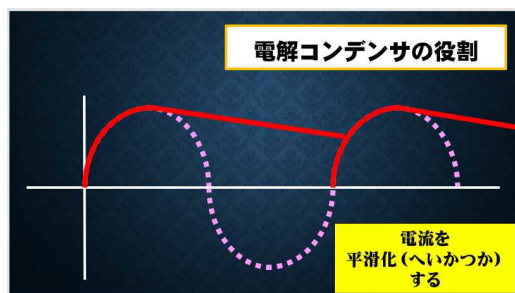
## II 具体的な実践事項について（技術分野）

### (1) 授業を見合う会での授業について（1月30日 1年A組）

- ・題 材 LEDを点灯させるための、それぞれの部品の役割を知ろう。
- ・ねらい プリント基板に電気回路をはんだづけしながら、交流電流を回路内で平滑化するための部品の役割を知ることができる。
- ・展開例

過程	学習活動・主な疑問等	想定される生徒の学習状況
問 い 通 し	1 前時の学習内容の確認をする。 なぜ片方のLEDしか点灯しないのか？	・「抵抗器の役割は、最近理科でも学習した。」
	2 本時の学習課題の確認をする。 LEDを点灯させるための、それぞれの部品の役割を知ろう。	・「抵抗器以外の部品もあるんだな。」 ・「はんだづけする際は、方向性に気を付けなければならないな。」
課 題 解 決 の た め の 製 作 直 観 考 察	3 メッキ線をはんだづけした後、LEDの点滅を観察する。	・「メッキ線は部品ではないな。」 ・「LEDが2つとも点灯するようになった。なぜだろう。」
	4 回路図で電流の流れや回路について知る。	・「点灯ではなく点滅しているんだな。」 ・「LEDをそれぞれプラスマイナス逆に取り付けた意味が分かった。」 ・「ハンドルを早く回すと光量が増し、回すのをやめると、すぐに消える。」
	5 整流用ダイオードと電解コンデンサをはんだづけした後、LEDの点滅を観察する。	・「1つのLEDしか点灯しなくなった。」 ・「LEDの消え方がゆっくりになった。」
	6 電流波形で電流の平滑化について知る。	・「整流用ダイオードと電解コンデンサには、そんな役割があるんだな。」
	7 プリント基板が使用されている電化製品について、グループで予想し、コラボノートに入力する。 プリント基板が使用されているであろう電化製品を挙げてみよう。	・「どんな電化製品があるだろうか。」 ・「他のグループは、どんな例を挙げたのかな。」 ・「そんな製品にも使われているんだな。」
振 り 返 り	8 片付けをする。	
	9 本時の学習を通して学んだことを、リフレクションシートに入力する。 電流の流れや電流の平滑化、部品の役割などについて、学んだことや気付いたことに特化して、振り返りをしましょう。	・「電流の平滑化のイメージがもてた。」 ・「電子部品には様々な役割があるんだな。」 ・「他にどんな部品があるのか、知りたい。」 ・「安全に作業を進めることができた。」

### 【使用したプレゼン】



- ・日常生活で使用している電化製品には、多数の電子部品が使用されているが、それを直接目にしたり、機能性を感じたりする機会はほとんど無い。そのため、複数の電子部品を使用して役割を確認する機会を設けた。
- ・電気エネルギーと一言にいても、直流と交流があり、電流と電圧の区別も必要である。理科で同時期に電気の単元の学習が行われていることもあり、学習内容についての情報交換をした上で、電流の平滑化にスポットを当てた。並列回路における電流の流れ方や電圧のかかり方も学習済みであったため、イメージしやすいようであった。
- ・はんだづけの作業については、前時までに練習用題材を使用したり、抵抗器を取り付けたりしていたため、滞りなく進めることができていた。
- ・電解コンデンサを小学校の理科の学習でふれた学校があり、役割のイメージをもっていた生徒もいた。



## 【授業を参観された先生方からの指導助言】

- ・生徒が楽しそうな表情をして授業を受けていた。
- ・教科横断的な内容となっていて、来年度以降も電気の学習の時期を合わせられると、効果的だと思われる。
- ・道具の扱いや片付けの際、生徒一人一人が安心、安全に配慮しており、普段からの指導の様子が見られた。

## (2) ICTを活用した取り組みについて

## ① 木工加工に関する技術

## ○Microsoft PowerPoint機能を活用した資料提示

- ・作業についての資料（材料の取り方や道具の使用方法についての動画）を活用することにより、生徒が適切な使用による安全な作業を進めることができた。
- ・教師が制作したプレゼン資料をOne Driveに保存しており、資料によっては生徒にTeamsからダウンロードして活用できるようにした。これにより生徒は、一過性の資料でも繰り返し目にすることができるようになり、理解が深まっているように感じている。

## ② エネルギー変換に関する技術

## ○表計算アプリ(Excel)を活用した自由製作とリフレクション

- ・生徒個々が日常生活の中から課題を見付け、表計算アプリを活用して解決を図った。学習した内容を超えた関数(MAXやMIN、COUNTIFなど)を使用する生徒もあり、活用能力の高さに驚かされた。
- ・学校を欠席した場合にも、生徒は自宅で作業をすることができた。
- ・リフレクションシートをデジタル化することにより、データとして一括管理することができた。また、生徒の授業の振り返りや、疑問等に対する教師からのコメントも容易に記録することができた。

## ③ 情報に関する技術

## ○動画編集アプリ(フォトエディター)を活用してのストップモーションムービーの作成

- ・個人で簡単なムービーを製作しながら、アプリの操作方法を学習した後、学習班で役割分担をして作成し、発表会を行った。生徒の操作方法的習得は驚くほど早く、クオリティの高い作品が多数完成した。

## (3) 技術・家庭科の見方・考え方をはたらかせている、具体的な生徒の様子

- ・題材や授業の単位で問い直しをさせることにより、単に知識や技能を習得するのではなく、その活用の仕方や実生活について考えを深めることができた生徒が多い。
- ・「エネルギー変換に関する技術」では、実生活の中から課題を探したり、解決方法を探ったりする学習を展開し、日常生活を見直す機会を多く設けた。その結果、電化製品の機能や消費電力量などに興味をもち、考えたことを実践しようとする姿勢が見られるようになった。
- ・生徒のICTに関わる技能の習得は予想以上の速さである反面、個人差も見られる。できる生徒と苦手としている生徒の双方が満足できるような課題の設定や授業展開が出来るよう、今後も研鑽を積みたい。
- ・工具や機械を安心、安全に使用するために、副教材による練習を重ねたり、ペアやグループ単位の作業を義務付けてきた結果、重大なケガや事故が起こることがなく、無事に学習を進めることができた。

### （家庭分野）「幼児との関わり」

- (1) 生活や社会の中から問題を見だし課題を設定するという力を育成するために、同じ課題意識をもった生徒で話し合うことで、幼児とのよりよい関わり方について深い学びにつなげた。



幼児とどんな関わり方をして、自分たちが設定した幼児に関する課題に迫っていくかについて、ミエルトークを活用し話し合った。実際に幼稚園を訪問し「幼児と関わる」ということを前提とした話し合いが進められた。学習した知識や技能を実践に生かされる場がこの先に設定されていることで、生徒が活動に意欲的であった。自分たちが習ったことや知っていることだけでは解決できないため、できることは何か、多様な意見を集め、そこからまた新たな視点を得ていた。話し合う際のヒントとなるよう既習内容である幼児の発達段階に関わる内容について、ホワイトボードや教室に掲示した。

- (2) 問い直しの場面では幼稚園教諭の助言を視聴することで、その気づきを生かして、これまでの自分の考えを見直したり深めたりできた。



生徒は幼稚園教諭からの助言を聞くことで、関わる対象となる幼児のイメージを膨らましていた。年齢別の関わり方を聞くことで、その違いや共通点に目を向けることができた。幼稚園教諭から「5歳児ダイナミックな動きをする」という言葉を聞くと、「ダイナミックとはどんな動きなんだろう」と幼児の特性について深掘りしたいことが生まれていた。また、幼稚園を訪問する意欲をさらに高めることができたと考ええる。

幼稚園教諭からの助言は、幼児の年齢別になっている。Teamsで共有し、今回の授業時だけでなく必要な時に繰り返し視聴できるようにした。

- (3) 製作過程や振り返り場面におけるICT活用



製作品の記録や動画視聴にタブレットを活用した。昨年度からはTeamsを活用し、各クラスのチームをつくり、ファイルの共有を行っている。また、実践活動や製作のまとめにコラボノートを活用することで、他者の活動内容や考えを瞬時に共有することができた。冬期休業中の家庭での実践についても、適宜経過を見ることができ、生徒の頑張りを見取る一端となった。

### Ⅲ 生徒の変容について

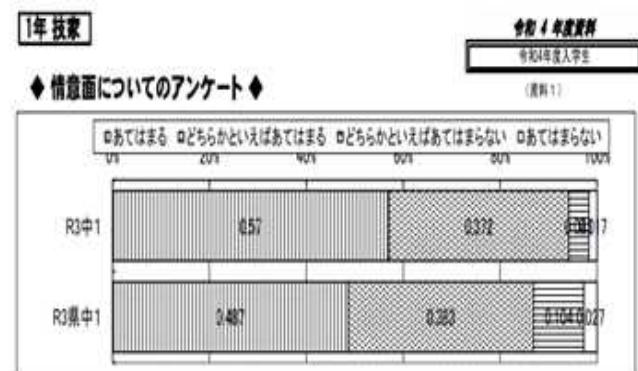
技術・家庭科の情意面に関する「令和4年度秋田県学習状況調査における生徒質問紙の結果」は次のようになっている。1年生では「内容に興味がありおもしろい」についてのポイントが全県と比較するとマイナスが目立つ。日常生活と結びつく題材設定や自分事として捉えられるような内容を工夫していく必要がある。一方で「考えるのが楽しい」の項目は全県と比較するとポイントが高い。話し合いの手立てとしてミエルトークを活用しており、多様な意見に触れる機会を今後も継続したい。2年生では、昨年度に比べ「将来社会に出たときに役立つ」のポイントがアップしている。技術では一方、生活体験のなさからか、製作活動が不得意とする生徒も見られ、副題材や練習用教材を準備することで、その克服に努めた結果、1、2年生ほぼ全員が作品を完成させることができた。3年生はプログラミングについての学習が主であり、技能の個人差が大きく見られたが、グループやペア学習の場を多く設定することで、生徒がその差を生かしながら課題に取り組むことができたのではないかと感じている。

家庭科では、「家族家庭生活と自立」の題材で、幼稚園訪問を行い、幼児との関わり体験を行った。コロナ禍にあり、配慮しなければいけない点が多々あったが、生徒にとっては他者を思いやる場面がたくさん生まれ、幼児に対して肯定的な受け止めをする様子が伺えた。異年齢と触れ合う中で「子どもを育てる環境」についても理解を深めることができ、将来の家庭生活や職業との関わりなどを見通して学習に取り組む生徒が見られた。

技術科では、「エネルギー変換に関する技術」「情報に関する技術」の題材で、それまでの学習事項を活用した自由研究の時間を確保した。具体的には表計算ソフトを活用した、日常生活で利用できる表の作成、フローチャートや各種センサを活用した未来の電化製品の設計である。この内容が題材を通しての「問い直し」にあたると考えている。生徒は自分ができるレベルを踏まえて、実生活を意識した課題解決に取り組んでいた。次年度も加味した流れを継続して設定したいと考えている。

次年度にあたり、引き続き実践的・体験的活動の機会を確保し、生徒の理解や技能を深められるようにしていきたい。そのためにも、生活や将来につながる実感をもたせられるような題材を工夫する。

#### ○1年生 「技・家の勉強は好きだ」



**技家 が大好き・好きの理由** (右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)

学年	1内容に興味がありあつておもしろい	2わかりやすい	3将来、技術に出たときに役立つ	4生活の中で役立つ	5人とかかわりの中で役立つ	6考えものが楽しい	7満足	小計
R3 小6								
R4 中1	20.7 % ▲1.4	4.1 % ▲0.7	16.5 % ▲0.9	24.8 % ▲3.0		14.9 % ▲0.2	10.7 % ▲2.9	91.7 % ▲6.0
R5 中2								
R5 中3								

**技家 が嫌い・大嫌いの理由** (右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)

学年	1内容に興味がない	2わかりにくい	3将来、技術に出たときに役立つ	4生活の中で役立つ	5人とかかわりの中で役立つ	6考えものがめんどろ	7満足	小計
R3 小6								
R4 中1	2.5 % ▲1.4	0 % ▲1.1	0 % ▲0.3	0 % ▲0.2		0.8 % ▲0.2	2.5 % ▲3.1	5.8 % ▲6.3
R5 中2								
R5 中3								

※空手の練習が多いため

#### ○2年生 「技・家の勉強は好きだ」



**技家 が大好き・好きの理由** (右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)

学年	1内容に興味がありあつておもしろい	2わかりやすい	3将来、技術に出たときに役立つ	4生活の中で役立つ	5人とかかわりの中で役立つ	6考えものが楽しい	7満足	小計
R2 小6	11.1 % ▲6.1	4.4 % ▲0.9	23.3 % ▲4.6	43.3 % ▲9.1		4.4 % ▲1.4	6.7 % ▲1.4	93.2 % ▲5.7
R3 中1	21.6 % ▲1.8	7.2 % ▲1.7	12 % ▲3.9	21.6 % ▲6.6		11.2 % ▲2.8	5.6 % ▲1.8	79.2 % ▲8.1
R4 中2	21.5 % ▲1.5	5 % ▲0.9	18.2 % ▲4.4	20.7 % ▲1.4		9.1 % ▲1.9	5.8 % ▲1.1	80.3 % ▲11.1
R5 中3								

**技家 が嫌い・大嫌いの理由** (右の数字は全県との比較 ▲＝マイナス)

学年	1内容に興味がない	2わかりにくい	3将来、技術に出たときに役立つ	4生活の中で役立つ	5人とかかわりの中で役立つ	6考えものがめんどろ	7満足	小計
R2 小6	1.1 % ▲1.2	0 % ▲0.9	0 % ▲0.2	0 % ▲0.1		0 % ▲0.5	4.4 % ▲1.1	5.5 % ▲4.1
R3 中1	3.2 % ▲0.4	0 % ▲0.8	0 % ▲0.3	0 % ▲0.2		0.8 % ▲0.9	9.6 % ▲4.4	13.6 % ▲2.8
R4 中2	2.5 % ▲0.3	0 % ▲1.6	0.8 % ▲1.1	0 % ▲1.1		1.7 % ▲1.6	9.9 % ▲1.4	14.9 % ▲1.1
R5 中3								

※空手の練習を除く



## IV 来年度の技術・家庭科の教科経営

## 1. テーマ・サブテーマと教科の特質

よりよい生活を工夫し、創造する ー 実生活を検証・評価し、計画・実践する学びを通してー	
特 質	生活や社会の問題を、実践的・体験的な活動から解決する力を養うこと。具体的には、実践的・体験的活動を通して、生活に必要な知識及び技能を身に付けさせ、生活や社会の中から問題を見いだして解決する力を養うことによって、現在及び将来にわたる実際の生活の場で学習したことを生きて働く力とすること。

## 2. 具体的な実践事項

## (1) 「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化

- ・ペアやグループ、全体などで実践的・体験的な活動の成果と課題を共有し、新たな気づきや理解の深化を促す検証・評価と修正・改善のサイクルを重視した授業を展開する。また、授業や題材全体を通しての問い、問い直しを重視する。

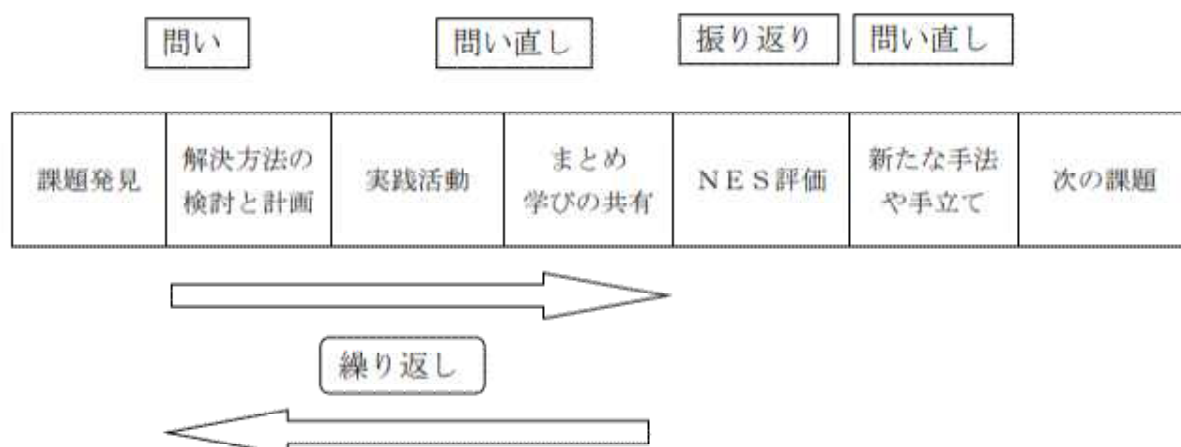
## (2) ICTの三つの特質と対話の三つの方向性の明確化

- ・製作活動や実践活動の中で、ミエルトーク、資料や手順の提示、活動のまとめなどの際にICT機器を効果的に活用する。
- ・製作や栽培の過程を動画や静止画で記録したりするなど、生徒が学習の過程を記録し繰り返し確認できるようなICT機器の活用を図る。
- ・日常生活に即した課題を設定し、他人と意見を比較検討しながら自分なりに解決できる場を設定し、個々の考えを深める。多様な意見が出るような資料や教材も用意し、未来を創造しようとする姿勢を育む。
- ・個々の考えを全体で視覚的に共有できるように、協働学習アプリを活用する。

## (3) 「深い学び」を目指した、瞬時の判断と柔軟な展開

- ・題材によって、生徒それぞれの興味や関心に応じて、自由研究の場を設定する。その成果を学級全体で共有し、更なる学びの深まりを生み出す。

## 3. 学びのプロセス





## 5. 技術・家庭科で目指す子どもの姿

教科の見方・考え方を働かせながら、問題解決に向けて他者と協働したり、意見を共有したりする中で、考えを広げ深めている姿

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	<p>学ぶことへの興味・関心が高まっているか</p> <p>自分自身と向き合っているか</p> <p>学習のゴールをつかむことができているか</p>	<p>子どもの実態に応じた資料を準備し提示する</p> <p>生活体験や既習事項などを想起させる手立てを行う</p> <p>学習活動のねらいを自らつかむようにする</p>
	問 い 直 し	<p>自分で考える</p> <p>他者と学び合う</p> <p>追究課題が明らかになっているか</p> <p>考えや思いをつなげることができているか</p>	<p>学習活動の目的や内容に応じた教材や教具等を提示する</p> <p>意見などを比較したり関連付けたりする視点等を明示する</p>
	振 り 返 り	<p>ま と め る</p> <p>学習活動の意味を感じられているか</p> <p>関心や意欲が一層高まっているか</p>	<p>実生活で生かせる場を設定する</p> <p>本時の学習と次時の学習との関連を確認する</p>



## 5. 英語で目指す子どもの姿

相手を思い、相手に伝わるように表現を選んで発することができる姿

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	学ぶことへの興味・関心が高まっているか	子どもの実態に応じた資料を準備し提示する
		共通点や相違点をつかむことができるか	互いの思考・判断、知識・技能等の比較や可視化を行う
		知識・技能などを活用する	本時の学習に関連する既得の知識・技能等を確認する
問 い 直 し	自 分 で 考 え る  他 者 と 学 び 合 う	自分自身の経験や学習状況を捉えられているか	予想や意見など、模索する学習活動を設定する
		考えや思いを表現できているか	学び合いの成果を学級全体で共有する
		互いの考えや思いをつなげているか	意見などを比較したり関連付けたりする視点等を明示する
振 り 返 り	ま と め る	学び合いのよさを実感できているか	互いの変容や学習の成果を認め合う相互評価を行う
		関心や意欲が一層高まっているか	本時の学習と次時の学習との関連を確認する

## II 具体的な実践事項について

### (1) ICTの三つの特質

中学校の英語の授業において、タブレット機器は教科書、ノート、プレゼンテーションの資料として、適切な場面で使い分けることができる。

まず、タブレット機器を教科書として使用する場合、今年度は文部科学省で英語の教科書のデジタル版を無償で使用できたため、この恩恵を大いに活用した。しかし、生徒によってはタブレット



機器を使用したい生徒もいれば、紙媒体を使用したい生徒もいるため、電子媒体の使用は強制せず、個々の判断に任せることにした。電子媒体のメリットは、画面上にメモを貼り付けたり、はがしたりすることができる点である。一方、紙媒体では、直接書き込みがしやすいことから、視覚的なアプローチで学習する生徒にとっては有効である。生徒一人ひとりの学習スタイルやニーズに合わせた授業展開が求められるだろう。

ノートとしての使用については、タブレット機器が全てをまかなうことはできなかった。例えば、メモをとったりアイデアをまとめたりする場合、Microsoft のサービスにある OneNote を活用することができるが、タブレット機器に負担が大きいと、利便性はあまり高くなかった。

そのため、実際の授業で生徒たちが取り入れた方法として、紙媒体とタブレット機器のいいとこどりをした活用方法があった。例えば、紙のノートにメモをとって、それを撮影して画像を保存しておくという方法がある。この方法であれば、紙で書くことで自由度が高く、タブレット機器を活用することで後で確認する際に便利に利用することができる。実際、生徒たちはこの方法を積極的に取り入れており、友人と情報を共有したり、授業の復習に活用したりしていた。

また、PowerPoint を使用して、アイデアや考えを相手に伝える場合には、準備に必要な時間は活動によって異なる。話に重点を置く場合には、資料作成にはあまり時間を割きたくないため、シンプルなスライドにまとめることが多い。一方で、視覚的に情報を伝えたい場合には、数時間かけて資料を充実させることもある。

これらの経験から、必要に応じて時間をかけて準備を行うことで、より質の高いプレゼンテーションを作成できるようになった。

また、生徒たちは、試行錯誤を繰り返すことを目的として、相手からコメントをもらい、資料や発表原稿を改善した。最終的には、改善された資料を提出することになっていたが、この活動によって、生徒たちは相手に自分の思いをより明確に伝えるために改善を重ねることができた。

### (2) 対話の三つの方向性

円滑なコミュニケーションを実現するためには、相手への反応に注目することが重要である。相手が話をしているときは、適切なタイミングでうなずくことが大切で、相手に自分が理解していることを示すことができる。短い文で返答することも有効で、相手からの質問や話題に対して、簡潔な返答をすることでコミュニケーションがスムーズに進む。さらに、リテリングをすることで、相手の発言を自分の言葉でまとめることができ、教科書の内容を自分の言葉で説明したり、相手の発言を理解したかどうかを確認したり、コミュニケーションの質を高めることができた。

生徒たちの振り返りから、英語の授業では実践的な方法を学ぶことができたようである。例えば、調べた情報をキーワードでまとめて話すことや、留学生と会話することなど、具体的な場面を想定した練習が多かったことから、実際の場面を想定して相手とのやりとりをすることができたようである。生徒たちは、友達のよい表現を真似することで、文法の理解を深めたり、相手に理解してもらえたという実感を得たりした。その一方で、相手に理解してなかなか実感を得られ





ない場合は、相手に伝わるように表現を調べたり、構成を修正したりして、より相手に伝わるような内容を再構築することができた。書くことについては、より論理的な構成をすることができるようになった。

リテリングについては、生徒たちにとって非常に効果的だったようである。題材の内容を自分の言葉で相手に伝わるように考えて話すことで、生徒自身がどの程度題材について深く学んでいるかをセルフチェックできた。また、相手の発言を自分の言葉でまとめることで、相手に正確な情報を伝えることができた。また、相手に対して自分が真剣に向き合っている姿勢を示すことができるため、相手との信頼関係を築くことにもつながった。

以上から、英語の授業では、相手と円滑なコミュニケーションを実現するための方法を学び、それを実践することで、実際の場面でのコミュニケーション能力を向上させることができた。

< 2年生の振り返りから >

N E S ⑤ 自分の選んだ料理について、起源を知ることができたので、英語ですらすら言えるようになりました。 Good! 今から学ぶ2大事	Teacher's Check
N E S ⑤ 友達の良い表現をまねたり、質問を考えたことで、どんな言葉で表現したらいいか、慣れない表現でも相手に理解してもらったり、コメントしてもらったりすると、会話が楽しく感じることができました。	Teacher's Check
N E S ⑤ だんだん文法上手にアドリブで話することができてよかったです。	Teacher's Check
N E S ⑤ 初めて留学生と話しましたが、簡単に伝えることができたと思います。また、留学生が話している内容も、簡単な単語だけできると、会話しることができました。	Teacher's Check

### (3) 瞬時の判断と柔軟な授業展開

生徒たちに新しい表現や単語を使ってコミュニケーションすることを促し、それによって、生徒たちは隣の席の人にもっと自由に話しかけることができるようになり、同じ趣味や興味を持つ人と交流することができた。このようなコミュニケーションの場が提供されることで、生徒たちは英語を話すことが楽しくなり、自然と自信を持って表現することができた。

また、「昨日のことを友だちに伝えよう」の活動では、生徒たちが英語の基礎力をつけることに焦点を当てた。最初は、生徒たちが何を書けばいいのかわからなかったようだが、教師が例文を示し、アイデアを出すことを促すことで、生徒たちは自分自身の体験や考えを英語で表現することができた。このような取り組みによって、生徒たちは自分のアイデアを整理し、自信を持って表現することができるようになった。

さらに、夏休みにしたことを英語で話し合った際には、生徒たちは、自分自身の経験を英語で表現することで、より深いコミュニケーションをとることができた。このような授業を通じて、生徒たちは英語を実際に使うことの重要性を学び、自分自身で学習を進めていく意欲を高めることができた。

教師は、生徒たちが自分自身で学習を進めるために、英語の基礎力をしっかりと身につけることを促し、生徒たちは、自分自身のアイデアや経験を英語で表現することができるようになった。また、自分自身で英語の学習を進めることを意識するようになり、家でも積極的に文法や単語の練習を行いたいという意欲を持つようになった。

このような授業は、生徒たちが英語の学習に対する興味や自信を高め、将来的に英語を自由自在に使えるようになるために非常に重要である。教師は、生徒たちが自分自身で学習を進められるように、基礎的な文法や単語を相手とのやりとりの中で習得することを重視し、生徒たちはその基礎をもとに自分自身のアイデアや経験を英語で表現することで、より深いコミュニケーションをとることができた。今後も、生徒たちが英語の学習に対する意欲や自信を高め、将来的にグローバルな社会で活躍するためのスキルを身につけられるようにしていきたい。



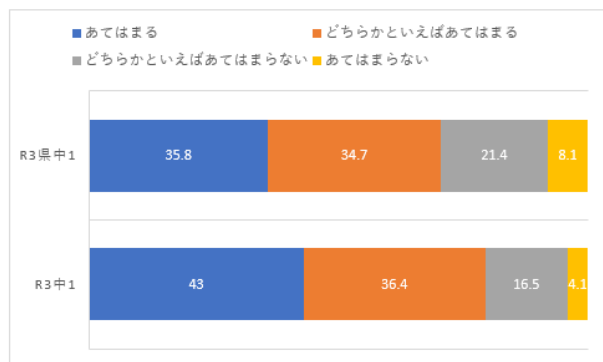
＜1年生の振り返りから＞

- ・新しい表現を使って隣の席の人に伝えることができました。楽しんだことが同じ「走る」だったのですが走ったところが違ったので面白かったです。
- ・最初は4文になにを書けばいいのかわからなかったけれど、1文書くとどんどん進めることができて楽しかったです。
- ・夏休みにしたことを英語にすることができ、友達とスムーズに話し合えました。家でも文法や単語練習をしていきたいです。
- ・自分のしたことを表す表現を確認することができた。
- ・動詞を変化させるのを忘れそうになるので気を付けていきたいと思った。
- ・過去形で不規則に変化する動詞をできるだけ覚えていきたいと思った。

### Ⅲ 生徒の変容について

英語に対する情意面に関する「令和3年度秋田県学習状況調査における生徒質問紙の結果」は次のようになっている。

#### ○1年生 「英語の勉強は好きだ」



#### 英語が大好き・好きの理由

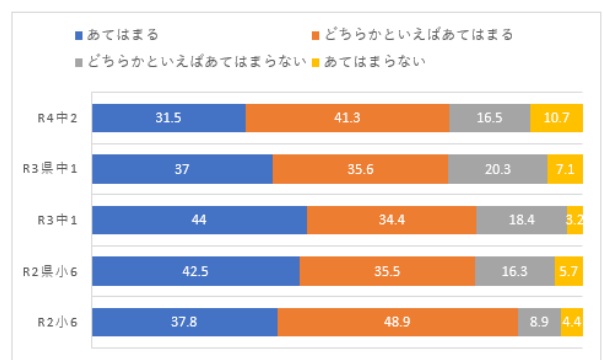
学年	①内容に興味 あっている 割合	②わかり やすい 割合	③将来、社会に 出たときに役 立つ割合	④生活の中 で役立つ 割合	⑤人との かわりの中 で役立つ 割合	⑥考えるのが 楽しい 割合	⑦得意 割合	小計
R3 小6								
R4 中1	8.3 % ▲ 1.7	5.8 % ▲ 2.0	37.2 % 7.6	7.4 % 2.4		5.8 % 0.0	11.6 % 3.1	76.1 % 9.4
R5 中2								
R6 中3								

#### 英語が嫌い・大嫌いの理由

学年	①内容に興味がない	②内容がわからない	③将来、社会に出たときに役立たない	④生活の中で役立たない	⑤人とのかわりの中で役立たない	⑥考えるのがめんどう	⑦不得意	小計
R3 小6								
R4 中1	5 ▲ 2.7	2.5 2.9	0 0.0	1.7 ▲ 1.1		0.8 0.6	9.1 8.6	19.1 9.6
R5 中2								
R6 中3								

※⑦その他5%を除く

#### ○2年生 「英語の勉強は好きだ」



#### 英語が大好き・好きの理由

学年	①内容に興味がある あって内視鏡が わかる	②わかり やすい	③将来、社会に 出たときに役立つ	④生活の中で 役立つ	⑤人との かわり の中で役立つ	⑥考えるのが 楽しい	⑦得意	小計
R2 小6	13.3 % 1.3	6.7 % ▲ 1.5	40 % 6.7	6.7 % 1.1	2.2 % ▲ 5.3	13.3 % 4.9	82.2 % 7.4	
R3 中1	16 % 5.2	4.8 % ▲ 2.4	37.6 % 7.5	3.2 % ▲ 1.2	3.2 % ▲ 3.7	9.6 % 1.0	74.4 % 5.2	
R4 中2	9.9 % ▲ 0.4	0 % ▲ 0.0	33.9 % 4.8	4.1 % ▲ 0.4	6.6 % 1.3	15.7 % 9.8	70.2 % 8.0	
R5 中3								

#### 英語が嫌い・大嫌いの理由

学年	①内容に興味がない	②内容がわからない	③将来、社会に出たときに役立たない	④生活の中で役立たない	⑤人とのかわりの中で役立たない	⑥考えるのがめんどう	⑦不得意	小計
R2 小6	1.1 % 2.5	0 % 5.6	1.1 % ▲ 0.6	0 % 0.3	2.2 % ▲ 1.3	7.8 % 2.3	12.2 % 8.8	
R3 中1	4 % ▲ 1.5	2.4 % 2.9	0 % 0.5	0.8 % ▲ 0.5	0.8 % 0.4	13.6 % 2.7	21.6 % 4.7	
R4 中2	3.3 % 0.5	3.3 % 2.4	0.8 % ▲ 0.5	0.8 % 0.5	1.7 % 0.2	16.5 % 5.1	26.4 % 7.8	
R5 中3								

※⑦その他3.3%を除く

このアンケート結果からは、英語が好きな生徒の割合が中学1年生よりも小学6年生の方が高く、また、英語が嫌いな生徒の割合が中学2年生で最も高いことがわかる。また、1年生が英語が好きな理由の中で最も多かったのは「得意」という回答で、2年生では「将来、社会に出たときに役立つ」という回答が最も多くなっている。英語が嫌いな理由については、1年生と2年生とでも「不得意」が一番多い。

これらの傾向から、英語の授業に対して生徒がもっと積極的に取り組めるようにすることが求められる。例えば、英語が好きな生徒には、授業内でより興味深い内容を提供するようにしたり、より具体的な場面を想定した授業を心がけたりすることが必要である。また、英語が嫌いな生徒には、授業内でより理解しやすいように説明を工夫したり、学習内容が将来役立つことを伝えたりすることで、モチベーションを高めるような仕掛けを今後も考えたほうが良いだろう。

さらに、生徒が英語に取り組む意欲を高めるために、授業以外でも英語に触れる機会を増やすこともいいかもしれない。例えば、英語の楽しい動画や音楽を紹介したり、英語でのコミュニケーションを促す環境を整えたりすることである。授業外でも英語学習への動機づけをすることで、生徒が英語に対して前向きな姿勢を持つことができるようになるかもしれない。

以上のように、英語の授業に対して生徒がより積極的に取り組めるようにするには、授業内容の改善や、授業外でのサポートなど、様々な工夫が必要であると言える。生徒が英語に対して前向きな姿勢を持ち、楽しく学べるような環境を整えることが、英語教育の質を向上させるために必要なことであると考えられる。

## IV 来年度の英語科の教科経営

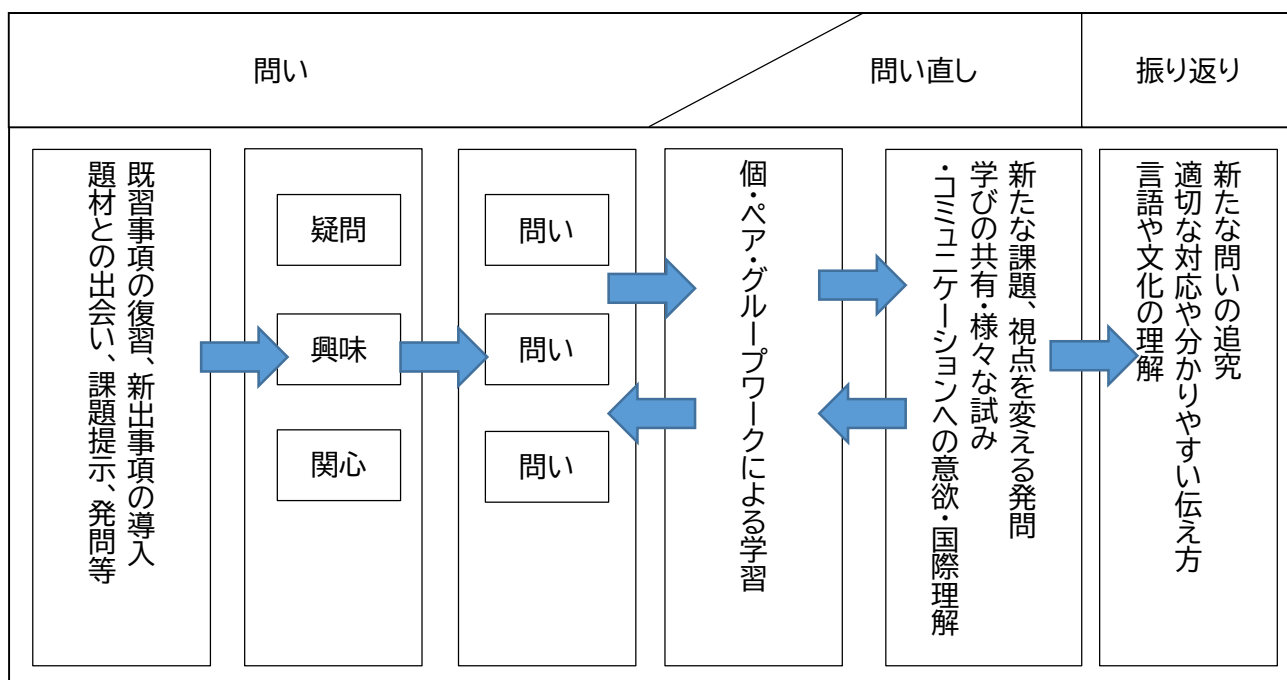
## 1. テーマ・サブテーマと教科の特質

英語をツールとして、思いを即興で伝え合う ー相手に配慮し、協働的な学びを通してー	
特 質	英語をコミュニケーションのツールとして捉え、世界の人々とコミュニケーションを図ること。具体的には、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やりとり]」、「話すこと [発表]」及び「書くこと」という五つの領域にわたる活動を、有機的に関連させながら、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮し、英語を用いて考えや思いなどを伝え合うこと。

## 2. 具体的な実践事項

- (1) 「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化
  - ・ キーワードを考え、まとまりのある内容を伝えることができる。
  - ・ 相手により伝わるために表現や構成を吟味し、内容を再構築することができる。
- (2) ICTの三つの特質と対話の三つの方向性の明確化
  - ・ 試行の繰り返しを目的に、発表を繰り返し、コメントをもらいながら資料を改善することができる。
  - ・ 異なる場面での英語の使い方や表現方法を適切に行い、相手とのやりとりをより円滑にする。
- (3) 「深い学び（学習のねらいの達成）」を目指した、瞬時の判断と柔軟な展開
  - ・ 題材をもとに相手とのやりとりを重ねる中で、相手の気持ちを配慮したコメントを瞬時に選択し、コメントをすることができる。

## 3. 学びのプロセス



#### 4. 英語で目指す子どもの姿

相手を思い、相手に伝わるように表現を選んで発することができる姿

#### 5. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	学ぶことへの興味・関心が高まっているか	子どもの実態に応じた資料を準備し提示する
		共通点や相違点をつかむことができるか	互いの思考・判断、知識・技能等の比較や可視化を行う
		知識・技能などを活用する	本時の学習に関連する既得の知識・技能等を確認する
問 い 直 し	自 分 で 考 え る  他 者 と 学 び 合 う	自分自身の経験や学習状況を捉えられているか	予想や意見など、模索する学習活動を設定する
		考えや思いを表現できているか	学び合いの成果を学級全体で共有する
		互いの考えや思いをつなげているか	意見などを比較したり関連付けたりする視点等を明示する
振 り 返 り	ま と め る	学び合いのよさを実感できているか	互いの変容や学習の成果を認め合う相互評価を行う
		関心や意欲が一層高まっているか	本時の学習と次時の学習との関連を確認する





## 5. 道徳科で目指す子どもの姿

相手の考えに興味をもって関わり合い、話合いを通じて発見した新たな価値に基づいて、自他の生き方や在り方を問い直そうとする姿

## 6. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	課題の内容と生活体験を関連づけて考え解決に向けて具体的なイメージをもつことができるか。	映像や資料を用いてテーマに関わる内容を紹介し、生活体験や既習内容を想起できるようにするか。  集団や個の特性に基づき、全体にとって適切な学習課題を設定する。
問 い 直 し	自 分 で 考 え る  他 者 と 学 び 合 う	自分と教材、あるいは学級集団と教材を比較し、自身が追求したい学習活動を設定しているか。  多様な意見に触れることで、物事を多面的・多角的に考え、広い視点で考えることができるか。	個人や集団の実態を把握し、目指す道徳的価値に近づけるような発問や問い直しをする。  意見を交流させ、新たな価値に気付いたり、考えを深めたりできるようにする。
振 り 返 り	ま と め る	考えの変容や深まりについて、感じたことを伝え合い、互いの考えを認め合うことができるか。	教材の内容を自分ごととして捉え、振り返ることができるようにする。  本時の学習を、日常生活や将来のことに関連づけて考えることができるようにする。

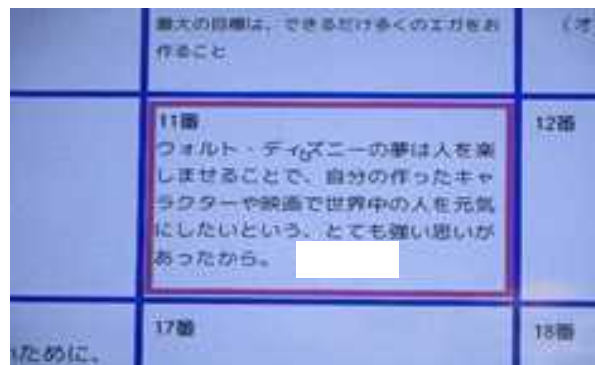
## Ⅱ 具体的な実践事項について

### (1) ICTの三つの特質

「コラボノート」を活用して個々の考えを共有することで、授業を通じて思考がどのように変容していくのかを見取ったり、各自の振り返りに役立てたりすることができる考えた。



各自の考えを入力したコラボノート。  
大型モニターに映して、考えを共有した。



発表者のコメントを色線で囲み、拡大して  
注目できるようにした。

### (2) 対話の三つの方向性

「ミエルトーク」を問い直しの場面で行うことで、個から全体へと思考を広げられるものと考えた。また、「コラボノート」の活用後に「ミエルトーク」を行うことで、その効果が一層深まることを期待した。



『論点を整理してまとめた板書』



『ミエルボードの内容について説明する様子』

## Ⅲ 生徒の変容について

○1年生における授業実践を通じた変化 (公開授業を通じた上記の学習内容を振り返って)

### ①ローテーション道徳の実施について

学期末の振り返りなどから、ローテーション道徳を通じた一年の取組が、学びへの関心や意欲の高まりにつながっていることが分かる。「いろいろな先生方の考え方や価値観に触れることができるのがよい。」という内容の意見が大半を占めたことから、他の人の考え方に耳を傾け、広い視点で考えることの大切さを実感する機会になったものと考えた。

### ②コラボノートの活用について

生徒の感想には「今までは、同じ班の人の感想や、全体で発表した人の考えしか知ることができませんでした。しかし、コラボノートを使うことによって、学級みんなの意見が見られて、とてもわかりやすかったです。」「発表だけでは聞き取れない内容もありますが、何度も見直したり確認したりできるところが、コラボノートのよさだと思いました。」「発表したくても、勇気がなくて挙手できないことが多いのですが、コラボノートだと、躊躇せずに自分の考えを発信できるのでうれしいです。」などといった内容が挙げられていた。様々な表現を取り入れながら自分の考えを練り上げたり、自分一人では思いつかないような考えを生み出せるといった良さがコラボノートにはあり、生徒の満足感にもつながっていた。





## IV 来年度の道徳科の教科経営

## 1. テーマ・サブテーマと教科の特質

人間としての生き方についての考え方を深める ～みんなで考え、みんなで伝え合う学びを通して～	
特質	道徳的諸価値についての理解を基に、他者との対話を重ねながら様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるかを考えること。広い視野から多面的に判断する力を高めること。

## 2. 具体的な実践事項

## (1) 「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化

- ・ねらいとする道徳的価値を明確にし、その道徳的価値について生徒の多様な考えを引き出せるような「問い」と「問い直し」を工夫する。「振り返り」については、コラボノートを活用して共有化を図る。

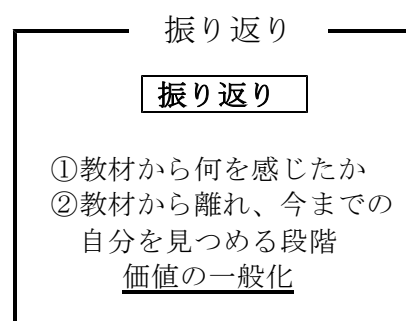
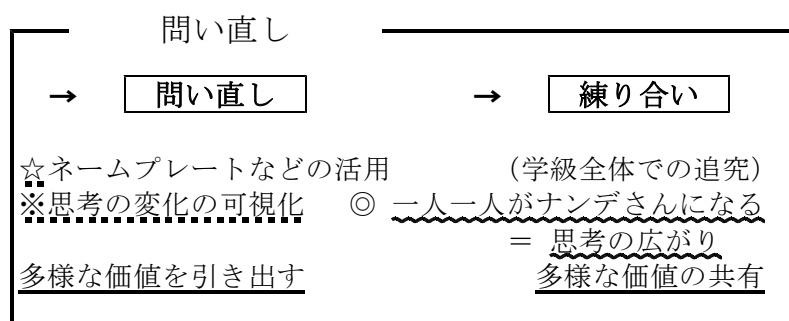
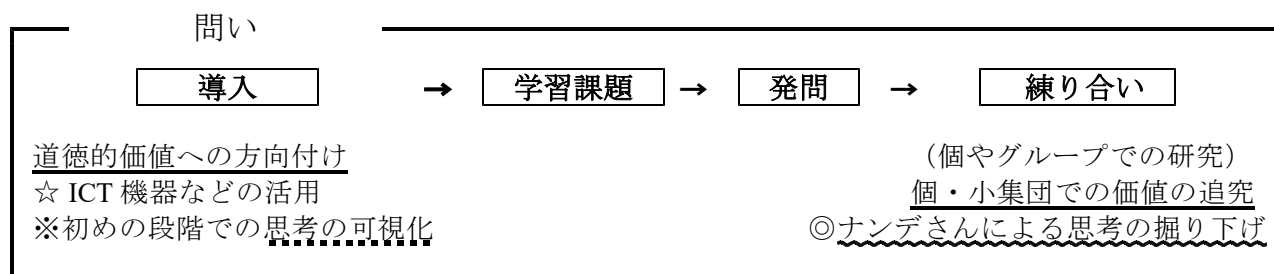
## (2) ICTの効果的な活用と三つの方向性

- ・コラボノートなどのツールの活用法を模索する。例えば、活用場面を振り返りに限定するのではなく、内容によっては導入や問い直しで扱うなど、柔軟に取り組めるようにする。瞬時にクラス全員や他クラスの生徒の考えを知ることができるという利点を生かし、多様な価値に触れる機会を設ける。

## (3) 瞬時の判断と柔軟な対応

- ・ねらいとする道徳的価値を明確にし、その道徳的価値について生徒の多様な考えを引き出せるような発問を工夫する。具体的には①学習課題を示すこと、②場面発問に偏った発問構成から、テーマ発問を中心に据えた発問構成を研究することの2点を重点的に実践する。

## 3. 学びのプロセス



#### 4. 道徳科で目指す子どもの姿

相手の考えに興味をもって関わり合い、話合いを通じて発見した新たな価値に基づいて、自他の生き方や在り方を問い直そうとする姿

#### 5. 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程		瞬時に判断する「学習者」の状況の視点	授業改善に向けた「授業者」の視点
問 い	見 通 し を 立 て る	課題の内容と生活体験を関連づけて考え解決に向けて具体的なイメージをもつことができるか。	映像や資料を用いてテーマに関わる内容を紹介し、生活体験や既習内容を想起できるようにするか。  集団や個の特性に基づき、全体にとって適切な学習課題を設定する。
問 い 直 し	自 分 で 考 え る  他 者 と 学 び 合 う	自分と教材、あるいは学級集団と教材を比較し、自身が追求したい学習活動を設定しているか。  多様な意見に触れることで、物事を多面的・多角的に考え、広い視点で考えることができるか。	個人や集団の実態を把握し、目指す道徳的価値に近づけるような発問や問い直しをする。  意見を交流させ、新たな価値に気付いたり、考えを深めたりできるようにする。
振 り 返 り	ま と め る	考えの変容や深まりについて、感じたことを伝え合い、互いの考えを認め合うことができるか。	教材の内容を自分ごととして捉え、振り返ることができるようにする。  本時の学習を、日常生活や将来のことに関連づけて考えることができるようにする。

## I 今年度の特別活動の教科経営

### 1. 本校の生徒の実態

「人生の樹」や「人生の森」の取組によって、自己理解だけでなく他者理解をも深めるとともに、学級への所属感・連帯感を高めることができている。さらに、「傾聴」をキーワードに支持的な風土を育むことで、ミエルトークをはじめとした話し合い活動が活性化された。実施例として、①学級目標づくり②体育祭の作戦会議③合唱曲選定、が挙げられる。またICTの活用を進める中で生徒の間にペーパーレスの意識も浸透し、紙を使うのはもったいない、という言葉が生徒から聞かれるようになった。一方で「学級生活の中で出てきた諸問題を解決する」時間の確保が課題である。

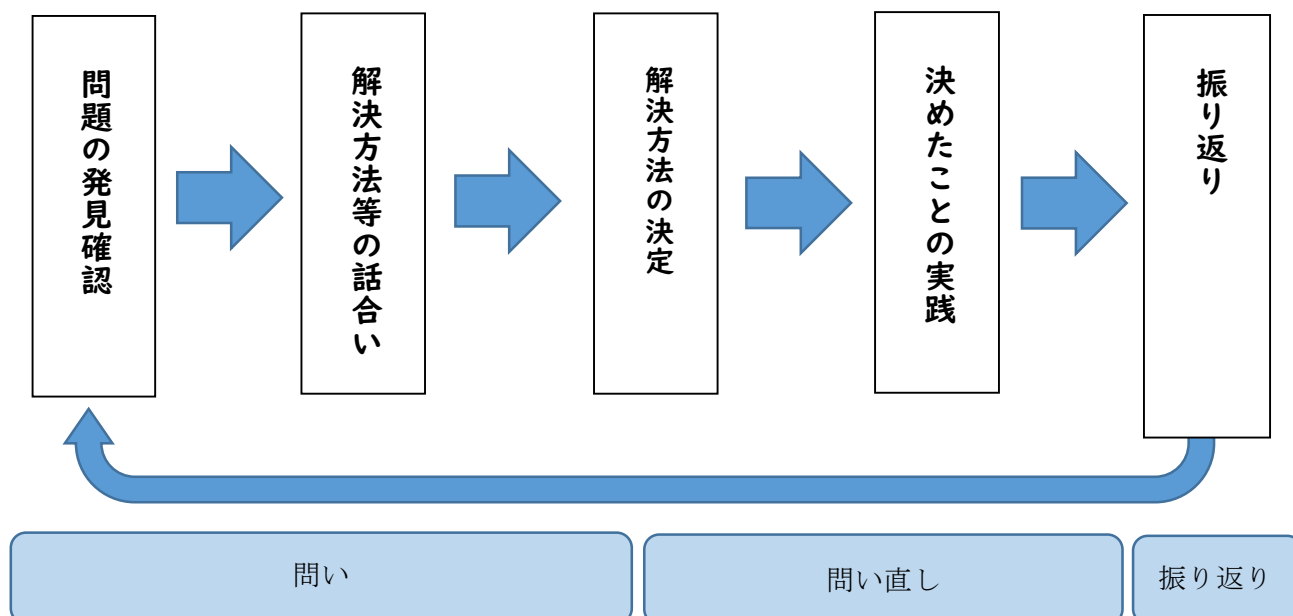
### 2. テーマ・サブテーマと教科の特質

「妥協」ではなく「調和」のある合意形成を目指す ー自己肯定感が高まる話し合いの実践を通してー	
特 質	直面する課題を解決するために話し合い、合意形成及び意思決定したものを実践や行動に結び付けること。

### 3. 具体的な実践事項

- (1) 自己肯定感を高め、「目指したい将来の生き方」に迫るための「人生の樹」「人生の森」の活用と、傾聴を基盤とした、「ミエルトーク」の活性化
  - ・「人生の樹」「人生の森」の活動を通して自己理解、他者理解を促進し、職業を超えた「目指したい将来の生き方」に迫ること。
  - ・傾聴の4つのステージをより意識して実践することで、安定した支持的な風土を築き、「ミエルトーク」における意見交換を活性化させること。
- (2) 年間指導計画を活用した学級活動における話し合い時間の確保  
学級活動の時間の多くは、各種行事の事前・事後指導に割かれることが多かったが、一年間を見通した時間運用ができていたとも言い難い。そこで、学級活動の年間指導計画を作成し、学級担任（とくに転入職員）が先を見通しながら学級での話し合いの時間を確保できるようにしていく。また、話し合いの機会を増やすことで、生徒のスキルアップも図っていく。
- (3) 情報モラルを踏まえたICT活用の取組  
一人一台のタブレットパソコンの活用をさらに浸透させるとともに、正しい使い方（時間・内容）を考えて実践する取組を、生徒の自治活動の一環に取り入れる。

### 4. 学びのプロセス



## 5. 特別活動で目指す子どもの姿

- ①実践を意識したよりよい合意形成のための話し合い活動ができる姿
- ②目標の実現を目指した主体的な意思決定に向けた話し合い活動ができる姿

## II 具体的な実践事項について

- (1) 自己肯定感を高め、「目指したい将来の生き方」に迫るための「人生の樹」の活用と傾聴を基盤とした、「ミエルトーク」の活性化
- (2) 情報モラルを踏まえたICT活用の取組

### 3年実践 「進路選択の準備をしよう」

ー批判的な思考を働かせた話し合いにより、進路選択において大切にしたいことを明確にできるかー

#### ①「人生の樹」から「人生の森」へ

- ・自己理解と他者理解  
(コンプリメントレター) ➡自己肯定感
- ・話し合いの土台となる人間関係づくり、  
居場所づくりや絆づくりへの戸惑い
- ・「人生の森」づくり

➡「人生の樹」から「人生の森」の活動を通して自己理解、他者理解を促進し、進学・職業を超えた「目指したい将来の生き方」に迫った。



#### ②「妥協」ではなく「調和」

- ・集団による多数決で「妥協」するのではなく、互いに納得するまで話し合い、よりよい考えである「調和」を導き出すことを目指す。

#### ③ミエルトークの実践

・傾聴の4つのステージをより意識して実践することで、安定した支持的な風土を築き、「ミエルトーク」における意見交換の活性化を促した。

- ・一人一人の考えを引き出すためのツールとしてのミエルトークの活用
- ・生徒の中での役割分担（アシスタント、ミセルさん、ナンデさん）  
➡学級ミエルトーク



#### ④ICTの活用による科学的な視点の提示や転換

### ○成果

- ・「人生の樹」の「枝」（将来の自分）の実現のための、よりよい進路選択について考えを深めることができた。本授業により、多くの生徒が、親や周囲の意見ではなく自分で進学先を決めることの大切さや、高校について良く情報を集めること、選択肢を増やすための高校選択という考え方もあることに気付いていた。また、本授業での気づきをもとに、生徒は「人



生の樹」に「日光・雨」という形で「自分がこれから努力すること」を記入し、人生の森を完結させた。

- ・「ミエルトーク」は、正しい答えのない問いでこそ効果を発揮することを改めて認識できた。本授業では「本当にその高校に行く必要があるのか？」という問い直しでミエルトークを行ったが、その前提として、秋田市内の複数の高校の教育課程や進学実績の提示により共通点を示したことで、生徒達は賛否について議論を深めることができた。
- ・円グラフの提示や、生徒の考え方をパワーポイントで示し、生徒の学習への関心を高めるために効果的な活用ができた。
- ・1人一台のタブレットを常時使用可能な状態とし、コラボノートを活用することで授業参加者全員考えを1つの画面に表すことができようになり、同一の学習課題に対する考えを、資料提示の前と資料提示の後で比較することが容易になった。

#### ●課題〔改善点〕

- ・本校の生徒達の多くが大学進学を前提とした特定の普通高校に進学する傾向があるため、本授業のような題材を取り扱う際にねらいとする、多様な考え方に触れることは、扱いづらかった。しかし、特定の普通高校に進学する理由を自分で決めることができないでいる生徒にとっては自分の考えをもついいきっかけになったのではないかと考える。
- ・本授業では情報モラルについては触れていない。今後、特別活動における情報モラルの取り扱いが必要である。

#### 【特活部の省察】

○「傾聴の4つのステージ」（①目と体を向けて話を聴く。②話の中身を繰り返す。③相手の言葉を自分の言葉に置き換える。④相手の感情を反映する。）を生徒に意識させるための手立として、年間指導計画で重点的な指導を検討する。

○学級での話合いの際に「妥協と調和」を意識させるための手法について研究し、提案する。

○ICTをあくまで手段と捉え、3つのメリット（思考の可視化、瞬時の共有化、試行の繰り返し）が生かせる場面に絞って取り入れることを意識する。

#### 全校実践 「生徒会活動におけるICT活用の取組」

##### ①生徒大会のペーパーレス化

生徒一人1台のタブレットパソコンを活用し、議案書をPDF化してデータ配付することで、ペーパーレス化を実現した。前学期は2，3年生，後学期は全校生徒へと段階を踏んで運用を広げることで、入学直後の1年生の不安を払拭するとともに、課題の洗い出しと対策を練る時間を確保した。

##### ②各種アンケート等のデジタル化

生徒会が実施する生徒アンケートにFormsを活用することで、ペーパーレス化とともに、記入・集計にかかる時間を短縮することができた。

また、建設的な提言を募集する「生徒会目安箱」について、従来の紙による投書と併用して、Web版も設置して運用を開始した。本校生徒であれば、いつでも、自宅からでも投稿できるようにすることで利便性を高め、生徒による自治活動の活性化を図った。

##### ○成果

- ・可能な範囲でのペーパーレス化を実現できた。
- ・生徒自身が変化を実感することで、合理性・利便性の意識が高まった。例えば「紙の使用はもったいない」という言葉が聞かれるようになった。
- ・集計作業にかかる時間が短縮され、結果のレスポンスが早くなった。
- ・目安箱への投書・投稿数が増加した。

#### ●課題〔改善点〕

- ・投稿数が増えた一方で、生徒会の範疇を越える内容の意見も見られるようになった。

### Ⅲ 生徒の変容

「人生の樹」「人生の森」の取組は今年度で10年目に入った。これらの活動によって、自己理解だけでなく他者理解をも深めるとともに、学級への所属感・連帯感を高めることができたと感じている。また、ICTの活用を進める中で生徒の間にペーパーレスの意識も浸透し、紙を使うのはもったいない、というSDGsを意識した発言が生徒から聞かれるようになった。

「傾聴」をキーワードに支持的な風土を育むことで、ミエルトークをはじめとした話し合い活動が活性化された。実施例として、①学級目標づくり、②体育祭の作戦会議、③合唱曲選定、が挙げられる。

一方で「学級生活の中で出てきた諸問題を解決する」機会が限られていたことは大きな課題である。年間指導計画を活用し、各学期や季節ごとに目標の振り返りをPDCAで進めていきたい。

### Ⅳ 来年度の特別活動の教科経営

#### 1. テーマ・サブテーマと教科の特質

「妥協」ではなく「調和」のある合意形成を目指す ー自己肯定感が高まる話し合いの実践を通してー	
特 質	直面する課題を解決するために話し合い、合意形成及び意思決定したものを実践や行動に結び付けること。

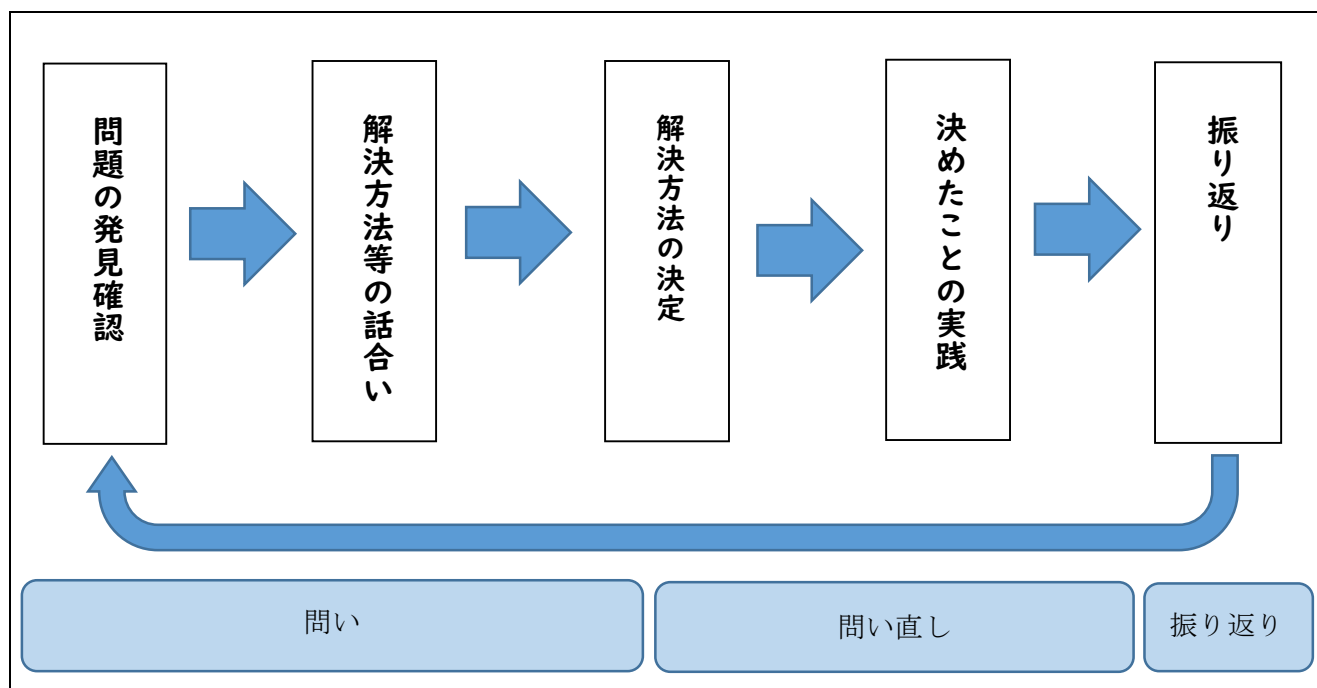
#### 2. 具体的な実践事項

- (1) 「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化
  - ・学びのプロセスを活用し自己肯定感を高め、「目指したい将来の生き方」に迫るための「人生の樹」「人生の森」の活用と、傾聴を基盤とした、「ミエルトーク」の活性化
  - ・「人生の樹」「人生の森」の活動を通して自己理解、他者理解を促進し、職業を超えた「目指したい将来の生き方」に迫ること。
  - ・傾聴の4つのステージをより意識して実践することで、安定した支持的な風土を築き、「ミエルトーク」における意見交換を活性化させること。
- (2) 年間指導計画を活用した学級活動における話し合い時間の確保
 

学級活動の時間の多くは、各種行事の事前・事後指導に割かれることが多かったが、一年間を見通した時間運用ができていたとも言い難い。そこで、学級活動の年間指導計画を作成し、学級担任（とくに転入職員）が先を見通しながら学級での話し合いの時間を確保できるようにしていく。また、話し合いの機会を増やすことで、生徒のスキルアップも図っていく。
- (3) 情報モラルを踏まえたICT活用の取組
 

一人一台のタブレットパソコンの活用をさらに浸透させるとともに、正しい使い方（時間・内容）を考えて実践する取組を、生徒の自治活動の一環に取り入れる。

### 3. 学びのプロセス



### 5. 特別活動で目指す子どもの姿

- ①実践を意識したよりよい合意形成のための話し合い活動ができる姿
- ②目標の実現を目指した主体的な意思決定に向けた話し合い活動ができる姿

## 1 本校の総合的な学習の時間＝「総合DOVE」の概要

### a 総合DOVEの歩み

本校では、平成10年度より総合DOVEの実践を重ねてきた。「DOVE」とは、本校の校章の意匠である「鳩」を意味する英単語であり、平和を希求する戦後の人々の願いが込められている。また、「DOVE」という名称には**D**evelopmental（発展的な学習）、**O**riginal（独創的な学習）、**V**oluntary（自発的な学習）、**E**njoyable（満喫できる学習）」という、本校が目指している総合的な学習のイメージも込めてきた。実践を始める際に留意したことは、平成5年以来、秋田県が学校教育共通実践課題としている「ふるさと教育」のねらいを踏まえることである。それは、ふるさととの出会い・発見・感動を通じて、①豊かな心を醸成し、②調べ追究する自己教育力を養い、③ふるさとのよさに気づき、自信と誇りを新たにすることにより社会を主体的に生きる力を育むことである。

本校では、そのねらいを実現するために、1年生では職場体験活動等を通して、職業観や進路意識を醸成し、2年生では社会人講話や職場訪問等を通して、自分の適性や持ち味を自覚できるようにし、3年生では、地域の課題解決や活性化に向けた提言等を通して、社会参画意識を育成するという、「地域に根ざしたキャリア教育」を展開している。

全校生徒と全教職員が、ベクトルを一つにして主体的に学習を進めるためには、学習の目的を確認し、ゴールを見通す必要がある。本校では、毎年4月にDOVE集会を行い、前年度の成果と課題を確認した上で、学習の目的や進め方を、全校生徒で共有している。また学習のゴールとして、各学年の学習の成果を発表し高め合う場の工夫改善を重ねてきた。平成16年には、独創性や実践力等を育むために、総合DOVEの研究成果の発表会と文化祭を融合させた学校行事「DOVE FESTA」を創設した。さらに平成28年には、「祭り」の要素が強い「DOVE FESTA」を改善し、質の高い学習の成果を発信する場とするために、研究学会をイメージできる「DOVE ACADEMY」と名称を変え、学習の目的とゴールの明確化に努めてきた。

コロナ禍の令和2年度も、全校生徒を研究内容や興味・関心を基に秋田の食材、伝統、特産品、自然、県民性という五つのジャンルに分け、各ジャンルを更に学年ごとに三つの会場に分散し「DOVE ACADEMY」を開催した。本番当日は15会場をICT機器で結び、オンライン上で全校ディスカッションを行った。令和3年度からは、より世界に視野を広げ、いわゆる「SDGs」の17の目標との関連から、持続可能な社会を実現する一員としての自分の生き方を考える研究を進めることとした。「持続可能な社会づくりの担い手として、自己の生き方を問い続ける」を新たなテーマとし、SDGsと関連付けた研究を行い、発表方法を発達段階と実態に合わせ、1年生は弁論大会、2年生プレゼン大会、3年生はディベート大会として、「DOVE ACADEMY」を開催した。



## b 総合DOVEの特色

本校の総合DOVEの活動は、1年次の職業意識・進路意識の形成から始まり、2年次にはSDGsの視点から秋田活性化策を計画・立案し、その研究を通して自分の生き方を考え、3年次には2年次までの研究や様々な生活経験などを踏まえて、SDGsの17のゴールから研究テーマを設定し、自分の生き方を探りながら高校での学習や将来への展望をもって卒業を迎えるという、3年間を一貫した進路探求型のキャリア学習である。

本校の研究主題は、「未来を自立的に生きる」であり、総合DOVEでは、自分自身の個性や適性を見つめ直し、社会情勢と向き合いながら、自ら課題を見付け、協働的な学びを通して、自分の理想の生き方を見いだそうとする態度を育成している。

## c 総合DOVEの重点

本校の生徒の状況を、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4項目から検証してみると、次のような傾向が見られる。

- (1) 知識は豊富だが、簡潔に相手に分かるように表現することが苦手である。
- (2) 知的好奇心や向上心、自制心は高いが、自己肯定感や自己有用感が低い。
- (3) 課題解決することには積極的だが、自己表現することには消極的である。
- (4) 就きたい職業はあるが、どんな生き方を目指しているかは曖昧である。

そこで、3年間の総合DOVEの学習では、「持続可能な社会づくりの担い手として、自己の生き方を問い続ける」をテーマとし、各学年の発達段階を踏まえ、自分が目指したい「理想の生き方」を具体化・実践化できるようにしていきたいと考えている。また、総合DOVEで取得した資質・能力が、未来を自立的に生きる力になっていくことを期待している。

## 2 総合DOVEの計画

### a 各学年の総合DOVEのねらいと活動計画

#### 1) 1年生のねらい

身近な人へのインタビューや職場体験などを通して、働くことへの思いや意義などについて考えを広げ深めるとともに、調査内容や整理した考えなどを弁論大会で発表したり、職場体験新聞にまとめたりすることで、「なりたい自分」を支えていく専門性についてもっと広く探求したいという意欲が高まる。

#### 2) 2年生のねらい

企業や団体への訪問調査やオンラインを活用した取材などを通して、SDGsの実現や秋田の

活性化策などについて考えを広げ深めるとともに、調査内容や整理した考えなどをプレゼン大会で発表する活動を通して、「自分の理想の生き方」を具体的に考えることができる。

### 3) 3年生のねらい

SDGsの実現に向けて研究テーマを設定し、自分たちの提案を動画にまとめ、企業等の担当者に助言を求めるなどしながら研究を進め、その成果を学年のディベート大会で発表する活動を通して、「持続可能な社会を実現する一員としての自分の生き方」を問い直し、自分は就きたい職業を通して、どんな生き方を実現していくのかという志を立てることができる。

## b 各学年の総合DOVEの活動計画

### 1) 1年生の学習対象と学習のねらい

学習対象	学習のねらい
① 自分らしさや自分の成長 ・自己評価、級友や保護者の他者評価	1) 自分のよさや特徴について理解できる。 2) 自分らしさに対する自信を深まる。
② 保護者や家族、親類などの仕事 ・インタビュー活動 ・職場訪問による見学	1) 身近な人々の職業人としての一面うい知ることを通して、尊敬の念を新たに抱くことができる。 2) 保護者や家族の努力や苦労のうえに生きている自分の存在を理解できる。
③ 自分が調査活動を通して抱いた思いなど ・DOVE ACADEMYに向けた発表原稿の作成	1) 弁論大会を通して、自分の考え論理的にまとめ相手に伝える方法を身に付けることができる。
④ 様々な仕事に携わる人々 ・三日間の職場体験活動 ・職場体験新聞作成	1) 仕事の喜びを共感的に理解できる。 2) 仕事の苦労、悩みを共感的に理解できる。 3) お世話になった方々の仕事に就くまでの過程や努力、苦労など理解できる。
⑤ 自分の進みたい道とその道を歩んでいる人々 ・「鳩翔の行事＝夢を発表する場」に向けた準備	1) 憧れの人々の生き方や業績を調べることを通して、自分の課題を把握できる。 2) 自分の進みたい道について、SDGsと関連付け新たに探求してみたい問いを立てることができる。

## 2) 2年生の学習対象と学習のねらい

学習対象	学習のねらい
① 自分が設定した研究課題に関わる企業や団体，個人	1) S D G sに関わる企業の方々のお話を聞き，自分が目指したい理想の生き方を考えることができる。 2) S D G sの17の目標と，S D G sに携わる人々が身に付けている資質・能力の関連を知り，自分の目指したい理想の生き方と関わらせて研究課題を絞り込み研究計画を修正できる。
② 探究に必要な資料や提案する企業や団体 ・インターネットを活用した調査 ・企業や団体への訪問調査やオンラインを活用した取材	1) 探求に必要な資料を収集したり，整理・分析することを通して，研究課題についての基本的な知識を習得できる。 2) 訪問調査や取材を通して，秋田活性化策につながる専門的な知識を習得できる。
③ 自分が提案する企業や団体 ・秋田活性化策の提案に向けた発表原稿やプレゼンテーション資料作成 ・DOVE ACADEMYに向けた発表資料の修正	1) 企業や団体から評価や助言をいただきながら，秋田活性化策を問い直し，深めていくことができたり，多面的・多角的な考え方を習得できる。 2) プレゼン大会を通して，パソコンの活用と相手を意識して発表する力を身に付けることができる。
④ 提案活動を通して抱いた思いなど ・「鳩翔の行事＝志を発表する場」に向けた準備	1) 探求した結果を自分なりに考察することを通して「自分の理想の生き方」を具体的に考えることができたり，新たな課題を明確にしたりすることができる。

## 3) 3年生の学習対象と学習のねらい

学習対象	学習のねらい
① 探究に必要な資料 ・文献資料の収集，整理 ・インターネットを活用した調査	1) SDGsの課題の解決のためにこれまでの取り組みや成果を知ることで，自分が解決すべき課題を絞り込むことができる。
② 自分が提案する企業や団体 ・SDGsを実現するための提案	1) 調査・研究した内容について企業や団体から評価や助言をいただきながら，研究内容を問い直し，深めていくことができる。
③ 自分が身に付けた専門的な知識や収集した資料を通して抱いた思いなど ・DOVE ACADEMYに向けた準備	1) ディベート大会を通して，批判的思考力や即興で考え対応する力を身に付けることができる。
④ 3年間の総合DOVEの学習で習得した知識や経験および実感できた思い ・卒業レポートの作成	1) 3年間で得た知識・技能，思考・判断，思いなどを言語化することを通して，研究の成果を適切にまとめることができる。 2) 成長を実感することで，自分の可能性への期待を膨らませることができる。

## 1 1年部 働く意義を知り、自分の生き方を幅広く考え、社会の一員として、自分たちができるとに主体的に取り組もうとする生徒を育てる。

### 子どもたちの気持ちを考えて向き合って【南通りすこやか保育園を訪問して】

子どもたちには、みんなそれぞれに気持ちがあり、やりたいことや考えがあります。保育士は、その気持ちを考えて話したり、動いたりすることが必要とされる、難しく重要な職業です。

例えば、右の写真のように朝の会が始まるけれど、子どもたちが立っている時に、どのような声でどんな言葉を使って席に座ってもらうのか、常に考えて動かなければなりません。また、子どもたちにも感情と考えがあるため、がむしゃらに怒るのもダメです。実際に働いている保育士の方も、喧嘩やトラブルなどは特に大変とおっしゃっていました。



### 実際に働いてみて

保育士として働くのは、楽しみ半分、緊張半分でした。しかし、子どもたちの元気な声や表情に助けられて緊張は解けました。保育士についてインターネットや本で調べるのと実際に働くのでは全く違っていました。一年歳が変わるだけで、遊ぶ玩具や接し方が変わるというのにも驚きました。「保育士は、医者並みできなくとも病気について知っていないといけないなど、様々な知識が必要とされる職業だ。」と話してくださった時、とてもハッとしました。自分が保育士になるとは限らないけれど、今回の職場体験で得た知識や経験は自分のためになると思いました。

### 経験から変容した高い意識

本生徒は、職場体験学習前後で、働くことについての意識が大きく変わった。一般的に保育士は子どもが好きであることが前提となる。しかし、ただ好きであるだけでは、保育士は務まらないということを今回の経験を通して感じ取ることができた。それは、様々な思いや考えをもつ子どもたちへの接し方であったり、医学的な知識であったりである。その職業を体験することによって、本生徒は働くことに対して視野が広がり、今後の生き方の参考になる考えをもてた。

### SDGsとの関わり【株式会社縫工を訪問して】

縫工のような、裁縫で物を作る仕事は、女性が圧倒的に多いです。縫工には、男性の社員が一人しかいないそうです。男女の割合が極端に違うからこそ、平等な態度を心掛けているとおっしゃっていました。

(5 ジェンダー平等を実現しよう)

縫工では、回収した古着の糸をほどこき、布に戻したものを使って服を作ることがあるそうです。私は、服のリサイクルはみんなが幸せになるとても良いことだと思ったので、自分の服もリサイクルに出してみたいと思いました。

(12 つくる責任つかう責任)



### これからの社会にも生かせる手作業の良さ

いつもお店で買っている服が、こんなに丁寧に作られていることを私は知りませんでした。ボタンの付け方ひとつにもすごくこだわっていて、なんでも機械化されていく時代、縫工の社員さんのように手作業で小さな工夫を施している人がいることを、もっとたくさんの人に知ってほしいと強く思いました。「技術は一生の宝物」。今回教えてもらった技術を、一生使っていきたいです。

(9 産業と技術革新の基盤をつくろう)

### 経験からSDGsを意識する

本生徒は、職場体験学習を通してSDGsを強く意識することができた。女性が圧倒的に多い縫製工場。しかし、そこではしっかりと考えたのもとSDGsが意識されていた。また、服は機械が作っているのだからという概念を覆す手作業の良さ。人だからこそ行える、技術面での小さな工夫や温かさ。本生徒は、今回の体験を通して手作業の良さに気づき、これからも機械作業と手作業が共存することも産業や技術革新の基盤になるのだと知ることができた。



## ニーズに応えるための工夫とやりがい【マックスバリュ泉店を訪問して】

トップバリュ商品は、様々な工夫をして、商品を安価に提供できるようにしています。

- 例)・工場を増やして輸送距離を短縮  
 ・ボトル商品のラベルの縮小化でコスト削減  
 ・製造と包装を同じ工場で行うことで輸送費削減

(やりがいについてインタビューしました)

目標を達成することです。営業利益を出すための手段を考えるのが楽しいです。

### 社会貢献できる人になりたい

これまでは何気なく買い物をしていましたが、売る側の立場を体験してみて、この仕事の人々の役に立っていることを改めて感じました。今後は、学校生活においても「誰かに貢献する」ことを意識して行動したいです。そして将来仕事に就いた時は、これらの経験を活かして、社会に貢献できる人になりたいです。

また、この体験をみんなに伝えるため、どうすればこの新聞（本生徒が作成した職場体験新聞）を読んでもらえるか考えている時に、「これって品出しに似てない？」と、ふと気付きました。



## 社会貢献について考えを深める

本生徒は売る側の立場を体験して、店舗側の様々な工夫があつて始めて安価な商品が消費者のもとに届くのだということを理解することができた。消費者にとって安価な商品が手に入ることは有益である。つまり、売り手側の工夫は社会貢献と言える。本生徒は、職場体験で学んだこと感じ取ったことを学校生活に活かし、自らの将来の職業にも活用していきたいという思いをもつことができた。

## 働くうえで大切なこととは【きらら高齢者介護事業部を訪問して】

きららでは、ご利用者様に「来てよかった。あなたに会えてよかった。」と思ってもらえるように心掛けています。また、お客様（高齢者）の表情や言葉・仕草など観察しながら、いつもと変わらないか感じ取ることも必要だそうです。職場体験で一番感じたことは、職員の方々が利用者様に対して笑顔で挨拶していたことでした。どんなに忙しくても、挨拶は笑顔で、そして明るく元気な声で、が体に染みついていくことに驚きました。働くうえで「挨拶」はとても大切なのだと感じました。また、「思いやり」も大切なことだと改めて考えさせられました。ドアの開け閉めでは、なるべく大きな音がしないように、言葉遣いでは相手を不快にさせないようになど、細かなところにも気を配ることが大切なのだと知ることができました。



### 福祉について深まった考え

職場体験をする前まで「福祉」とは「高齢者を介護する」ことだと思っていました。しかし今は、「福祉」とはただ介護するだけでなく、「思いやり」や「気遣い」が重視されるもので、利用者様に楽しんでもらうことも「福祉」のひとつなのだということが分かりました。

働くこととは、やりがいだけではなく、「思いやり」や「気遣い」も大切。それとともに「挨拶」や自分も仕事に対して楽しむことも大切だということに気付かされました。

### 働く意義について深まった考え

本生徒は、福祉関係の職場体験を通して、仕事のやりがいについて新しい視点をもつことが出来た。働く意義として一般的に挙げられるのは、経済的な面ややりがいである。本生徒も、福祉は介護することだと考えていたが、挨拶やドアの開け閉めなど、普段の生活の一部となっている行動に対して「思いやり」や「気遣い」をもつことが働く意義につながる行為だと感じて職場体験を終えている。本生徒にとって、これからの生活にも生かせる「思いやり」や「気遣い」。とても大きな収穫を得ることができた。

## 2 2年部 SDGsに関する素地研究から、興味関心を高め、持続可能な社会づくりに主体的に参画しようとする生徒を育てる。

### (1) 企業名 株式会社 See Visions

「リノベーションで秋田を活性化」というテーマのもと活性化案を考えた。提案先である株式会社 See Visions は店舗や会社などの内装・外装を手がけたり、その他、看板、メニュー、ロゴ、ウェブサイトなどもトータルでプロデュースしたりしているので、それらを生かして秋田の様々な課題の解決に近づくことができるのではないかと考えた。また、SDGs の目標である「住み続けられる街づくり」を「パートナーシップで目標を達成しよう」につなげ、一つの物事に対して様々な視点で提案できる「複合的デザイン会社」の強みを生かし秋田の活性化に取り組んでいる。これらのことにも着目し、秋田をよりよくするために「プロジェクト JB」を提案した。子供が遊ぶ学童を作り、高齢でもまだまだ働きたいと考えている方々にボランティアとして学童で働いてもらい、子供と交流できる場を作るという計画だ。Jはおじいちゃんの J、Bはおばあちゃんの B からとっている。学童にする建物については空き家をリノベーションして利用し、更なる秋田の活性化を図りたいと考えた。今回の提案を通して、リノベーションは、そこにあった建物の形を残して新たな建物に変えられるので、空き家問題を抱えている秋田は、多くの施設を生み出すことができる地域であると考えた。そして、短所、デメリットも問題解決に向けた材料の一つとして考えると、アイデアの幅も広がりさらに魅力的な提案ができるのではないだろうか」と発想を巡らせた。



### SDGs に関連付けて秋田の可能性を探る

この生徒は、SDGs の「住み続けられる街づくり」や「パートナーシップで目標を達成しよう」の実現を視野に入れながら、秋田が抱える高齢化社会の問題や空き家問題に注目した。協力企業の強みであるリノベーションで高齢者の方々にいきいきと活動できる場を提供するという秋田活性化案を考えた。また、その提案を通して、秋田は新しいことに挑戦しやすい環境であるなどの助言をいただき、今回の活性化案に実現の可能性を感じることができたようだ。

### (2) 企業名 アロマセラピーショップ Pfre

「アロマの力で秋田を元気に！」というテーマのもと活性化案を考えた。提案先であるアロマセラピーショップ Pfre は主にアロマを扱っているため、それを生かして秋田の様々な課題の解決に近づくことができるのではないかと考えた。また、SDGs の目標である「すべての人に健康と福祉を」に関しては、アロマの香りのできるセルフメディケーションが関連している。「海の豊かさを守ろう」では、界面活性剤が業界最小レベルの自然由来の洗剤を作りが関連してくる。これらのことにも着目し、秋田をよりよくするために「精油で万能スプレー作りのイベントを開くこと」を提案した。イベントを通して秋田でアロマセラピーをたくさんの人に知ってもらい、その先には秋田県の精油をブランド化し有名にすることで、更なる秋田の活性化を図りたいと考えた。今回の提案を通して、秋田をより活性化することを考えることが大切であることを実感することができた。そして、その実現のためには、社会の様々な部分に目を向けると同時に、秋田のことをもっと理解することが必要であると考えた。



### SDGs の実現を視野入れた秋田の活性化案

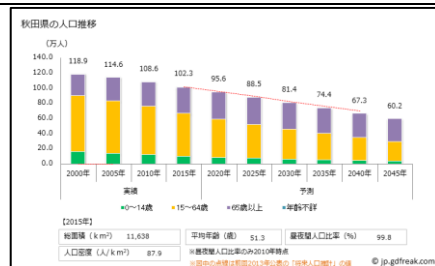
この生徒は、SDGs の「すべての人に健康と福祉を」や「海の豊かさを守ろう」の実現を視野に入れながら、秋田の様々な問題点に目を向け、訪問した企業の強みを生かしながら、活性化に向けた新たな提案を考えることができた。また、その提案を通して、秋田をより良くする方法を考えることの大切さを知ることができた。そして、その実現のためには、社会の様々な部分に目を向けて現状を知ることが大切であり、地元秋田をより理解することが自分たちのよりよい未来を築いていくことに気付くことができた。

### (3) 企業名 株式会社 関根屋

秋田県の人口減少率が全国1位である(右グラフ)という事実から、将来に対する危機感をもち、秋田県を活性化する方法として「自販機大作戦～秋田の経済成長～」というテーマを設定した。

関根屋さんは、仕出し・弁当店、駅弁事業者として、地域貢献することと安心安全な商品づくり、常に新しいことに取り組む(変えないもの・変えるものを明確に)の3点を重視している。お弁当を通じて、秋田の食材・食文化を全国に発信したいという意味を込めつつ、私たちが提案したのが、自動販売機での弁当販売だ。最近ではラーメンや餃子などの自販機も注目されており、人手不足の解消やお昼休み等の利用で売り上げを増やせるという提案をした。

関根屋さんからは①自動販売機で弁当を売るときの工夫やメディアの活用法、②自販機活用は労働時間を効率化し生産力をupさせる目的とした方が良い、というアドバイスをいただいた。また、弁当は消費期限が短いため、販売量を予測してフードロスを減らすことや、自販機横に電子レンジを置く工夫も考えることができた。



### 秋田の食材・食文化を全国に発信

本生徒はレポートの中で「秋田の活性化案を一から考えることの難しさを改めて実感した。企業の方々はいろいろな制限がかかっている中、様々な工夫をしていると分かった。」とまとめており、企業との対話を通じて、異なる角度から自分たちのアイデアを磨きつつ、思考・判断・表現力を高めていることが窺える。

### (4) 株式会社 ウェンティ・ジャパン

#### 「風の都あきた」をつくる

秋田は長い海岸線を持ち、年間を通して強い風が吹くので風力発電の適地であり、地域エネルギー自給率の都道府県ランキングは2年連続第1位。しかし、風力発電の事業を行うのは東京の大企業がほとんどだった。ウェンティ・ジャパンは、秋田の強みである風力発電事業を地元の企業で行い、秋田の活性化につなげようとしている会社である。私たちも風力発電の事業を通して秋田を活性化する案を考えた。それが「風の都あきた」構想である。

風力発電という他県に誇るものがあることを、県民はあまり知らない。風力発電のよさをPRするための「風の都博物館」をつくり、展示やワークショップを通して風力発電の仕組みや秋田の風景の美しさを県民に伝える。またその取組をSNSで世界に発信する。また、風力発電建設に伴い敷設された道路を遊歩道に整備して県民に開放し、風力発電を身近に感じながらマラソンやウォーキングをすれば、理解も深まるとともに体力向上にもつながる。さらに、風力発電から発展した売電、バイオプラスチック、漁業などの関連事業を拡大することで秋田で働くことを選択する若者も増えるのではないかと考えた。秋田の強みである「風力発電」を生かしたアイデアと地元企業どうしの協力で、秋田の可能性は広がっている。



### 様々な視点から考えた秋田の強みを生かすアイデア

本生徒は秋田活性化中学生選手権に参加し、課題企業となったウェンティ・ジャパンを訪問した。その際、佐藤社長から秋田が東京の植民地のようになっていることや、それを何とかしたいと立ち上がった企業があることに感銘を受け、さらに秋田の強みである風力発電を生かした活性化案をグループの仲間と協力して考えた。風力発電を様々な角度から見つめ、様々なアイデアを提案し、課題企業からは「遊歩道はすぐにでも取りかかる」と提案を認めていただいた。



## (5) 企業名 きららホールディングス

「AMES～Akita Makes Everyone Smile～」を柱に、活性化案を提案した。「AMES」とは造語で、「秋田がみんなを笑顔にする」という意味が込められている。提案先であるきららホールディングスは、幅広い事業を展開しており、児童福祉・高齢者福祉をはじめ、ペットリマナー養成、農業事業なども挙げられる。農業事業を行っていることや介護や福祉サービスの専門である企業の強みを生かし、地域資源を活用した食事や体験を楽しむ「農泊」を行い、体験者にSNS等で秋田の自然、食、文化を発信してもらうことを新しい事業として考案した。そして、農作物の収穫、活用を通しSDGsの目標「つくる責任、つかう責任」を達成したいと考えた。介護や福祉サービスが主な事業なので、普段遠出をすることができない高齢者の方も安心して過ごすことができる。また、きららホールディングスが求める人材が、「無資格、未経験、国籍も関係ない」という点にも着目し、秋田に滞在している外国人の方を積極的に受け入れ、人手不足を補えるのではないかと考えた。企業が行っている事業を多方面で生かすことで、秋田を活性化するとともに企業の持ち味を発揮できる提案を考えた。



### 秋田県と企業の強みを生かした提案

この生徒は、SDGsの目標「つくる責任、つかう責任」の実現を視野に入れ、企業の特徴や強みを生かした新しい事業を提案できた。企業が必要としている担い手、既存の事業、秋田県の地域資源などに着目することで、「農泊」という新たな事業を考案できた。秋田県の現状や企業が現在取り組んでいるSDGsについて知ること、秋田県のもつよさをより大切にしたいという思いに気付くことができた。

## (6) 秋田ノーザンハピネッツ株式会社

### バスケットで秋田を活性化！

秋田ノーザンハピネッツは、秋田を本拠地とするBリーグ所属のプロバスケットボールチームである。私は、ハピネッツが抱える課題の改善策を考えることで、秋田の活性化につなげられるのではないかと考えた。インタビュー結果より、ハピネッツには、【課題①】観客数を増やすこと【課題②】売上高を上げることの大きく2点の課題があることがわかった。【課題①】に対しては、秋田にある他種目のプロチーム（ブラウブリッツ・ノーザンブレッツ）と共同で参加型レクリエーションの実施を提案した。3チームの相乗効果で観客数の増加につなげようとするものである。【課題②】に対しては、オリジナル商品の開発を提案した。特に、マスコットキャラクターの名前を商品名に入れたクッキーや、人気選手の名前を商品名に入れた食べ物を開発し、それをホームゲームで販売することで、これまでスポーツに興味が無かった人にも感心をもってもらうきっかけになるのではと考えた。



### 主体的な取組みと独創的な発想が高評価に

本生徒は、プロスポーツチームに興味をもち、その取組みから秋田活性化策を考えることができた。身近にあるチームということもあり、活性化策を自分に引き寄せて考えることができていた。これが主体的な取組みにつながった要因であると考えられる。また、すでに実施されている取組みを、本生徒の独創的な発想と結びつけ、活性化案を考えていた。満足げな顔で学びを深めている姿が印象的であった。その独創的な活性化案が高評価を得ることにつながり、DOVE ACADEMY 最優秀プレゼンを獲得することができた。

### 3 3年部 SDGsへの興味関心を高め、持続可能な社会づくりに主体的に参画できる生徒を育てる。

#### (1) SDGs 11「住み続けられるまちづくりを」

昨年度は、秋田の活性化について、機能性のある住みやすい街とはどんな町だろうと考えた。今年は、それについてもっと知りたいと思い、このテーマを設定した。バスは公共交通機関の中で、最も人々の生活の近くにある。高齢者のほかにも通学する学生など、県内では車を運転しない人々からの大きな需要がある。そのため、バスを活性化することはSDGsの達成に向けて必要不可欠と考えた。県バス協会からの助言をもとにディベートに向けて提案を再構成した。日本では人口減少や少子高齢化に伴い過疎化が進んでいる。住民が減った地域では公共交通機関を利用する人が減り、都市機能や公共交通機関を維持できなくなり、更に過疎化が進むという負の連鎖が起こる。そこで私たちは「コンパクトシティ化で過疎地域を救おう」という提案をした。

私は今までこのような創造的な活動が苦手だった。しかし、グループのみんなと協力しながら研究を進めて楽しいと思うようになった。3年間のDOVEを通して、住み続けられる街とはどんな街だろうと考えた。私は、現在だけでなく、人が減ったり、災害が起こっても続いていく街だと考えた。将来、中学校のDOVEで学んだことを生かして、このような街づくりの一端を担いたい。



#### SDGsをきっかけに地域貢献の心を育む

この生徒は、SDGs11「住み続けられるまちづくりを」をテーマに掲げ、秋田県が直面している人口減少や少子高齢化と関連付けて、「住み続けられる街」とはどんな街なのかを追究する活動を通して、他者の考えや現場の声に耳を傾けながら自身の考えを深めることができた。また、創造性のある探究活動を通して、自己肯定感を更に高めると共に、将来、社会の一員として地域貢献するための土台を育むことができた。

#### (2) SDGs 16「平和と公正を全ての人に」

全ての人々が、生きるための食事をより豊かに、幸せを感じる為にはどうしたらいいのか？その方法と具体的な取り組みの現状について研究を進めた。グループ研究のテーマを「食の幸せを確立するには」とし、主に高齢者の介護食に着目した。全ての高齢者が、それぞれの健康状態や体力にあった負担のない、食べることが楽しい、嬉しい食生活を送るために、どのような取り組みがあったらよいかを考え、高齢化の進む秋田県に提案したいと考えた。

私が「食」の平等や公平性について関心を持った背景には、身近な家族に高齢者が居て、家族が介護する姿を目にしてきた経験がある。家族皆で食卓を囲む時に、噛む力や消化力が衰えてきていた曾祖母の食事を、祖母が細やかに世話していた。家族の中であっても、年齢、体力（身体機能）、生活ペースや好みも違う一人一人が、皆満足出来る食事環境を常に維持するのは難しいことだと、経験上感じてきた。それだけに、新聞で3Dフードプリンターの研究を知り、関心を持った。山形大学の川上勝先生に、数回に渡る質問等インタビューを行い、3Dフードプリンターの研究の現状や、実際の機能、課題について知識を深めることが出来た。



#### 対話、思いやり、気遣いや感謝

身近な「食」について追究しながらこの生徒は、自分らしく生きる方法に具体的な正解を出すことは難しいと考えた。“自分らしく”は、その人にしか決められないことであるし、年齢や状況によって本人の中でも変化していくかも知れないからである。また“自分らしい”生活の維持は、本人の努力だけでも達成することは困難なことであり、家族、地域、サポート環境の理解、協力があって初めて成り立つという考えに至った。そして、対話、思いやり、気遣いや感謝といったコミュニケーションが権利の根底にあることが必要だとの結論に達した。



### (3) SDGs 7「エネルギーをみんなにそしてグリーンに」

地球温暖化の問題を取り上げ、火力発電に代替するものはないかと考え、ごみ発電に焦点をあてた。ごみ発電とは、ごみを焼却処分する際の熱を利用して水を温め、その蒸気でタービンを回すという提案だ。二酸化炭素の排出量は、ただごみを燃やした時とは変わらず、発電もでき二酸化炭素の排出量を削減できると考えた。しかし、火力発電の発電効率が40%に対して、ごみ発電は10～15%だという課題が見つかった。そこで、現在のごみ処理施設すべてにごみ発電の仕組みを増設するという具体案を考え、火力発電の割合が71%であるフィリピンでごみ発電政策を行えば、環境問題への解決につながるのではないかと考えた。協力を頂いた世田谷工場様からは、資金面やスカベンジャーの人達の問題点を指摘された。発電の仕組みをつけたり処理施設を建設したりすることで、雇用を生み出すことができ、ごみ山の処理後、空いた土地に受託地を建設することができるという最終提案を考えた。

ディベート大会では、「ごみ発電は発電効率が悪いので、利益を得にくいのでは?」「ごみの排出を押さえる根本的な解決にはならないのではないか?」という質問に応じることで、政策の実効性やごみの排出量も抑えることができる提案だと気付くことができた。

### 課題を解決しながら、ブラッシュアップする

この生徒は、「火力発電の代替に! ごみ発電の活用方法について」をテーマに掲げ、日本だけではなく世界にも目を向け、環境問題について深く考えることができた。具体的な数値やアドバイスをもとに自分たちの考えにより磨きをかけ意欲的に取り組むことができた。この探究活動を通して、いろいろな視点から物事を考えその状況にあった行動をする生き方の大切さに気付き、今後の生き方につなげようとする考えをもつことができた。

### (4) SDGs 8「働きがいも経済成長も」

日本では非正規労働者の割合が高い一方で正規労働者の雇用環境が悪化している。また、若者の離職率が大きく、「とりあえず就職」する20代の割合が大きくなっている。こうした環境のもと、諸外国に比べた労働者1人あたりの生産性の低さが問題になっている。

この問題への解決策として、「生涯雇用形態の改善」と「AIによる実績の可視化」を提案する。「生涯雇用形態の改善」については、高齢者の経験を企業活動に生かしたり、若者の初任給を上げる。「AIによる実績の可視化については評価を客観的にすることで公正な評価を実現し、労働者のモチベーションを高める。以上の提案により問題が解決すると考える。



### 誰一人取り残さない雇用の実現のために

本研究班は、「生涯雇用形態の改善」と「AIによる実績の可視化」を提案した。企業としては業績のために非正規労働者を増やすが、逆にそれが労働者のモチベーションの低下に繋がり、さらにそれに拍車をかけるのが評価システムにあると考えたからである。「むやみに初任給を上げると経営を圧迫する」という企業からのアドバイスも踏まえ、高齢者の雇用の場を求めるとともに若者の就労意欲を損なわず、かつAIが公正に評価することでモチベーションを維持できると考えた。年齢構成がいびつなこれからの日本に必要な、持続可能な社会の実現につながる提案ができていた。

## (5) SDGs 3「全ての人に健康と福祉を」

私たちの健康は精神に非常に深く関わっている。自分の気持ちによって体調や行動が変化することはよくある。そのため、精神的な健康を解決することは全体的な健康につながると思った。どうすれば自己肯定感を高められるだろうか。私は自分を自分で認めるにはまずは他人に認めてもらうことからだと思った。そこで、私は友達とほめ合う時間が必要だと思った。友達なら、近くにいる時間が長いので長所がよくわかると思う。自己肯定感を高めるには他己肯定感から、という。まずは相手に認めてもらうことから始めてみようと思った。

今回の提案・発表を終えてさらに解決したいと思ったのが‘‘偏見‘‘である。人は日々、偏見で人を見てしまうことがある。全く見知らぬ人たちによる第一印象などだけでなく普段一緒に生活をしている人でも一緒にいるときに見えている部分だけを見て判断していることがある。もしそこで「悩みがなさそう」「何も考えてなさそう」というレッテルを貼られてしまうとその人にとって相談しにくい環境が構築されてしまうのではないか。これは相談の自主性を潰す行為であり、非常に危険である。この問題についてはこれから先、生きていく中で解決していきたいと思う。

### 自己肯定感を高めるための要因

自己肯定感に着目したこの生徒は、どうすれば自己肯定感を高めることができるかに注目して研究を開始し、他己肯定感を高めることが解決につながるのではないかと方向性を決めた。そして、他人に悩みを聞いてもらうためのアプリがあれば、自分のつらい気持ちを気軽に軽減することができるのではないかと考えた。ここから、実際に外部の方に提案を聞いてもらい、現場で子供たちの悩みを引き受けている立場からの視点を得たところ、「偏見」のキーワードも重要なファクターを持っていることに気づいた。

## (6) SDGs 12「つくる責任つかう責任」

循環型社会を目指す上で、現状日本のリサイクル率は先進34か国の中で29位と低い。また、普段の生活の中で、まだ使えるのに捨ててしまう「もったいない」が多いことに気付いた。3Rの一つであるリユースは、手間のかかるリサイクルよりも中学生の自分でも取り組みやすいと考え、研究テーマを「リユースの必要性～『もったいない』をなくすリユース大作戦」とした。

研究ではまず中古品販売店に対するイメージや利用状況を調査することを目的として、生徒を対象にアンケートを実施した。その結果、中古品販売店を日常的に利用している人、欲しいものがある時に中古品販売店を利用したいと考えている人の割合とも低いことが分かった。新品を扱う商業施設と中古品を扱う商業施設がくっきりと分かれてしま



っていることが消費者の足を遠ざけている要因の一つではないかと考え、スーパーマーケットの中に中古品販売店が出店する業態を提案することにした。ブックオフホールディングス様にご助言をいただき、スーパーに出店する場合に取り扱う商品についても考えた。

ディベートを通して、実現性をより高めるためにはスーパーと中古品販売店の両方にメリットを生み出すしくみが必要だと気付いた。

### 大量生産・大量消費からの意識転換 ～主体的な消費者として～

新品の商品を買ってもらい、まだ使えるうちに新しい物を買ってもらうことが当たり前の環境で育ってきた生徒たちである。この研究を通して、大量生産・大量消費がよしとされてきた価値観から物を社会全体で大切に使うことへと、意識を転換することができていた。またそれに伴って、消費者としての主体性が育った。